下谷遺跡・稗田遺跡

佐太南地区農村活性化住環境整備事業に伴う発掘調査

1994年3月

島根県　鹿島町教育委員会

下谷遺跡・稗田遺跡

佐太南地区農村活性化住環境整備事業に伴う発掘調査

目次

1 …… Ⅰ．調査の経過
2 …… Ⅱ．位置と歴史的環境
4 …… Ⅲ．下谷遺跡
4 …… 1．下谷遺跡調査の概要
4 …… 2．A区の調査
11 …… 3．B区の調査
17 …… Ⅳ．稗田遺跡
17 …… 1．稗田遺跡調査の概要
21 …… 2．上層木製品群
23 …… 3．下層木製品群
52 …… 4．出土木製品樹種一覧
53 …… Ⅴ．出土木材の年輪年代
55 …… Ⅵ．小結
55 …… 1．下谷遺跡
55 …… 2．稗田遺跡

例　　言

1．本書は、鹿島町教育委員会が松江農林事務所から委託を受けて、平成５年度に実施した佐太南地区農村活性化住環境整備事業に伴う下谷遺跡、稗田遺跡発掘調査の報告書である。

2．遺跡の調査地は、以下のとおりである。

下谷遺跡　島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷2056、2057、2058、2146-3

稗田遺跡　島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷1758、1761

3．ご協力いただいた土地所有者のご芳名は以下のとおりである。土地所有者の方々には、この場を借りて厚くお礼申し上げます。(敬称略)

下谷遺跡　吉岡恵美子、吉岡貞雄

稗田遺跡　平塚富善、中村　学

4．下谷遺跡の調査は平成５年５月10日から同年７月19日まで、稗田遺跡の調査は平成５年８月３日から同年11月26日まで実施した。

5．調査体制は以下のとおりである。

事　務　局	曽 田　　稔（鹿島町教育委員会教育次長）
	青山俊太郎（　　同　　社会教育係長）
調　査　員	赤 澤 秀 則（鹿島町教育委員会主任主事）
	宮 田 健 一（　　同　　嘱託）
調査補助員	石橋淳一、岡　泰道、川谷房光、染次秀一、水口晶郎
調 査 指 導	田中義昭（島根大学法文学部教授）
	石井　悠（鹿島町立鹿島中学校教諭）
	足立克己（島根県教育庁文化課文化財保護主事）
	角田徳幸（島根県教育庁文化課主事）
整 理 協 力	伊藤健司（財団法人 元興寺文化財研究所）、瀬古諒子
作　業　員	安達善也、井上一栄、加藤和枝、川下晴夫、長廻美江子、中島節雄、中島美喜子、中村隆子、中村鶴子、中村英明、中村　豊、平塚富善、平塚芳秋、山口建設
遺物整理員	朝山千穂、中島美喜子（以上、鹿島町立歴史民俗資料館）、石橋淳一、川谷房光、瀬田明子、丹羽野輝子、水口晶郎

6．掲載した遺物は、土器1/4、石器1/3、木製品1/6を原則としたが、これに従えないものもあり、その場合は縮率を明記するようにした。

7．稗田遺跡出土木製品の年輪年代測定は、奈良国立文化財研究所光谷拓実先生にお願いし、玉稿を賜った。記して厚くお礼申し上げます。

8．稗田遺跡出土木製品の樹種の同定は、財団法人 元興寺文化財研究所、株式会社 吉田生物研究所に委託しておこなった。

9．出土遺物は、鹿島町立歴史民俗資料館で保管している。

Ⅰ．調 査 の 経 過

鹿島町大字佐陀本郷から大字古浦にかけては、銅剣、銅鐸が出土した志谷奥遺跡、海岸砂丘上の集団墓地と考えられている古浦砂丘遺跡など著名な遺跡が多い。また、『出雲国風土記』には「恵曇陂」など具体的な状況が描写されている。しかし、この付近での埋蔵文化財の調査は少なく、集落などの動向はつかめていない状況にある。

この佐陀本郷から古浦にかけて、佐太南地区農村活性化住環境整備事業が計画された。平成４年度中に行なった分布調査と試掘調査の結果、奈良～平安時代頃と考えられる須恵器、土師器が出土した地点を下谷遺跡、田下駄、加工のある板材などが出土した地点を稗田遺跡と名付け、遺跡発見の手続きを行った。

平成５年度、下谷遺跡、稗田遺跡について松江農林事務所からの受託事業として実施した発掘調査の報告が本書である。平成４年度から５年度にかけての試掘調査の結果については、別途『佐太南地区遺跡試掘調査報告書』として刊行している[1)]。

下谷遺跡の調査は、平成５年５月10日から同年７月19日まで実施した。調査年は雨が多く、何度も大雨洪水警報が出るなか、下谷遺跡では調査区壁の崩落、調査区の水没、土砂の流入に悩み、一部調査できない個所も生じた。調査期間中の７月12日には、北海道南西沖地震があり、翌13日、これに伴う津波が豪雨の島根半島にも及び、海面の上昇もあって、さらに被害が拡大した。町内でも手結の集落は床上浸水家屋が多数発生し、調査担当者ら町職員の多くが浸水家屋等の片付けや防疫活動に向い、調査が中断する場面もあった。

一方、稗田遺跡の調査は平成５年８月３日から同年11月26日までおこなった。当初は、試掘調査で確認していた古墳時代後期から古代の木製品包含層を対象に調査区を設定、開始したが、さらにこの下層に弥生時代の大量の木製品が埋没していることが判明、調査区を拡大するなど、対応に苦慮した。現地で取り上げた木製品は約1700点余にのぼった。

途中、上層木製品群中の枠付大足を馬鍬と誤認し、９月10日マスコミ公開、９月12日に現地説明会を開催した。調査後の整理作業においてこの「馬鍬」は、枠付大足であることが判明したので、本報告はその分析で記述している。誤認をこの場を借り、お詫びしたい。また、木製品のうち船材と考えられるものについては調査終了後の12月11日、マスコミ公開を行ない、広報した。下谷遺跡調査において難渋したこの年の雨は、逆に稗田遺跡の調査では出土木製品の乾燥を防ぐに幸いした。

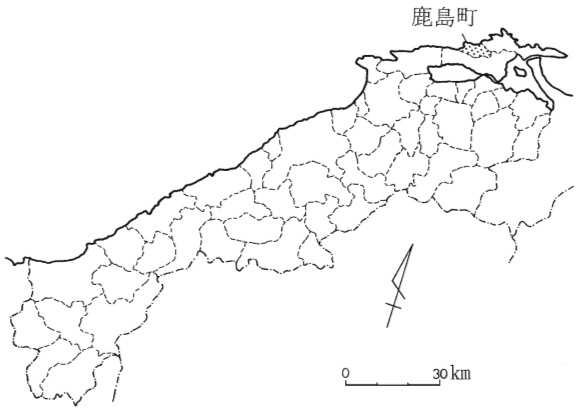


図１　鹿島町位置図

Ⅱ. 位置と歴史的環境

島根半島のほぼ中ほどに位置する鹿島町大字佐陀本郷から大字古浦にかけての平野は、西に日本海をひかえる肥沃な耕作地となっている。

この平野内および鹿島町域内での縄文時代の様子は前期の佐太講武貝塚[2]を除いて、いまだよく判明していない面があるが、講武盆地では北講武氏元遺跡[3]で、後期の土器片少量と晩期系の土器群が出土しており、さらに縄文時代の遺跡が存在するものと考えられる。佐太講武貝塚は、貝の散布範囲が指定を受けているのみで、当時の集落そのものの範囲などはいまだ明らかでない。貝塚を構成する貝は、ほとんどが汽水性のヤマトシジミで占められ、鹹水産のものはわずかである。このことは、貝塚が形成された当時、周辺部が潟湖としてこうした貝の成育に適した環境にあったことが知られる。この潟湖は、後の『出雲国風土記』にいうところの「佐陀水海」、「恵曇陂」の前身と考えられ、こうした水域からヤマトシジミを主とする魚介類を採取し、周辺の山野に堅果類や鳥獣を求めていたものと思われる。

弥生時代には、先述の北講武氏元遺跡で縄文晩期系の突帯文土器と弥生時代前期の遠賀川土器がともに出土しており、講武盆地を舞台に初期水田が開発されたことが知られる。また、大字古浦の古浦砂丘遺跡[4]では、前期の集団墓地が調査されている。この墓地に埋葬された人々の集落や水田址などは未検出であるが、今次の稗田遺跡の調査では弥生前期にさかのぼる土器の出土も見ており、この付近にも初期農耕集落が存在する可能性が高まったといえよう。また、わずかではあるが縄文晩期の土器も出土しており、さらに遡っての人々の低湿地近辺での生活が予想される。一方、盆地西南端には弥生前期からの佐太前遺跡[5]が存在する。この平野南側の山懐には、銅鐸、銅剣を埋納した志谷奥遺跡[6]がある。この平野での弥生時代の遺跡は少ないが、古浦砂丘遺跡、志谷遺跡などの内容をみれば、今後の調査により、講武盆地に匹敵する遺跡を埋蔵する地域と考えられる。

また、古墳時代についても、ともに礫床をもつ箱式石棺である臼畑古墳、狐堀古墳[7]が知られるほか、横穴墓群も多数知られており、その分布から古墳時代後期の段階には、集落が点々と成立しているものと考えられる。

『出雲国風土記』には「恵曇陂」としてこの平野中心部付近と考えられる景観が具体的に描写されているほか、先述の古浦砂丘遺跡の上層には、古墳時代後期から奈良時代頃にかけての包含層が存在し、砂丘上が当時の集落となっていたことが知られ、これが『風土記』秋鹿郡恵曇濱の条記載の「並びに家あり」に相当する集落と考えられる。やはり恵曇濱の条では、『風土記』編纂当時の島根郡大領社部臣訓麻呂の祖先、波蘇らが岩壁を２か所で掘り抜いたことを古老の伝として記している。

近世、松江藩によって宍道湖と日本海を結ぶ運河、佐陀川が開削されると、宍道湖沿岸の水害が緩和され、日本海側の集落と城下松江との水運が開け、漁獲物の輸送が盛んになる一方、古浦で行われていた製塩は真水が日本海に流れ出るようになりすたれていった。

1．下谷遺跡
2．稗田遺跡
3．佐太講武貝塚
4．古浦砂丘遺跡
5．佐太前遺跡
6．志谷奥遺跡
7．狐堀古墳
8．臼畑古墳
9．寺尾横穴群
10．山田古墳
11．峯谷寺の上古墳
12．峯谷寺の奥横穴群
13．峯谷寺の横穴群
14．一矢横穴
15．名分丸山古墳群
16．かまの古墳群
17．かまの横穴
18．免目古墳群
19．田中の奥横穴
20．免目横穴群
21．芦山横穴群
22．池平城跡
23．氏穴遺跡
24．本郷本谷遺跡
25．奥才古墳群
26．鵜灘山古墳群
27．藤山古墳
藤山遺跡
28．尾坂古墳群
29．北講武氏元遺跡
30．南講武草田遺跡
31．堀部古墳
32．岩屋古墳
33．伊貝山城跡
34．古浦経塚

図2　調査地周辺の遺跡（1/50000）

Ⅲ．下 谷 遺 跡

１．下谷遺跡調査の概要

遺跡は、大字古浦の砂丘地帯を北に望むやや急な斜面に位置する。この斜面の中央には水路が所在し、水路の東側をＡ区、西側をＢ区として調査を行った。調査前の地表標高は12ｍから18ｍである。谷の斜面部に中世から古代の住居址と、谷底に弥生から古墳時代の土坑群が存在した。

現地では重機によって表土をはぎ取った後、調査に着手した。調査の後半、７月13日未明の大雨により、調査区南側の法面が崩壊をはじめ、また、調査区上方で平行して行われていた石段工に伴う土砂が大量に調査区内に流入し、危険な状態となったため、Ａ区では谷底部の一部、Ｂ区では谷底部での調査が、それぞれおこなえなかった。また、調査に伴う排土が、隣接する田に流れ出たため、これの回収も行った。

２．Ａ 区 の 調 査

Ａ区での土層は、谷部である西に向かって厚く堆積しており、奈良・平安時代の包含層、弥生から古墳時代の包含層がそれぞれ褐色土として認められた。

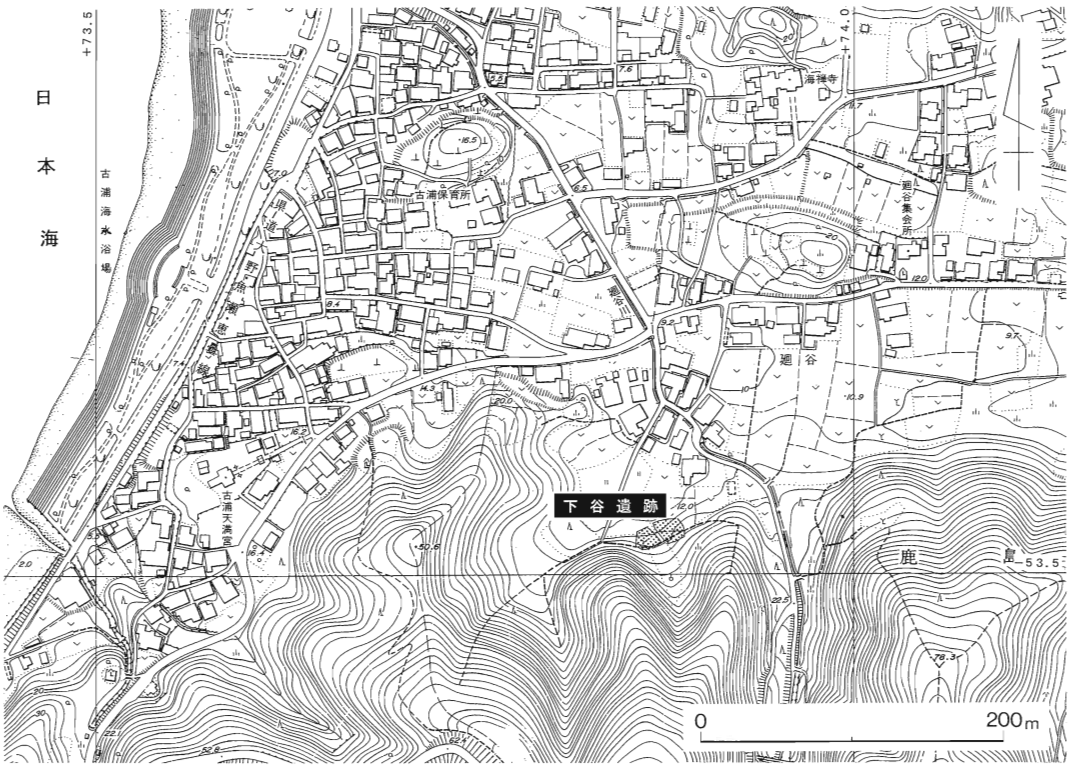


図３　下谷遺跡位置図（1/5000）

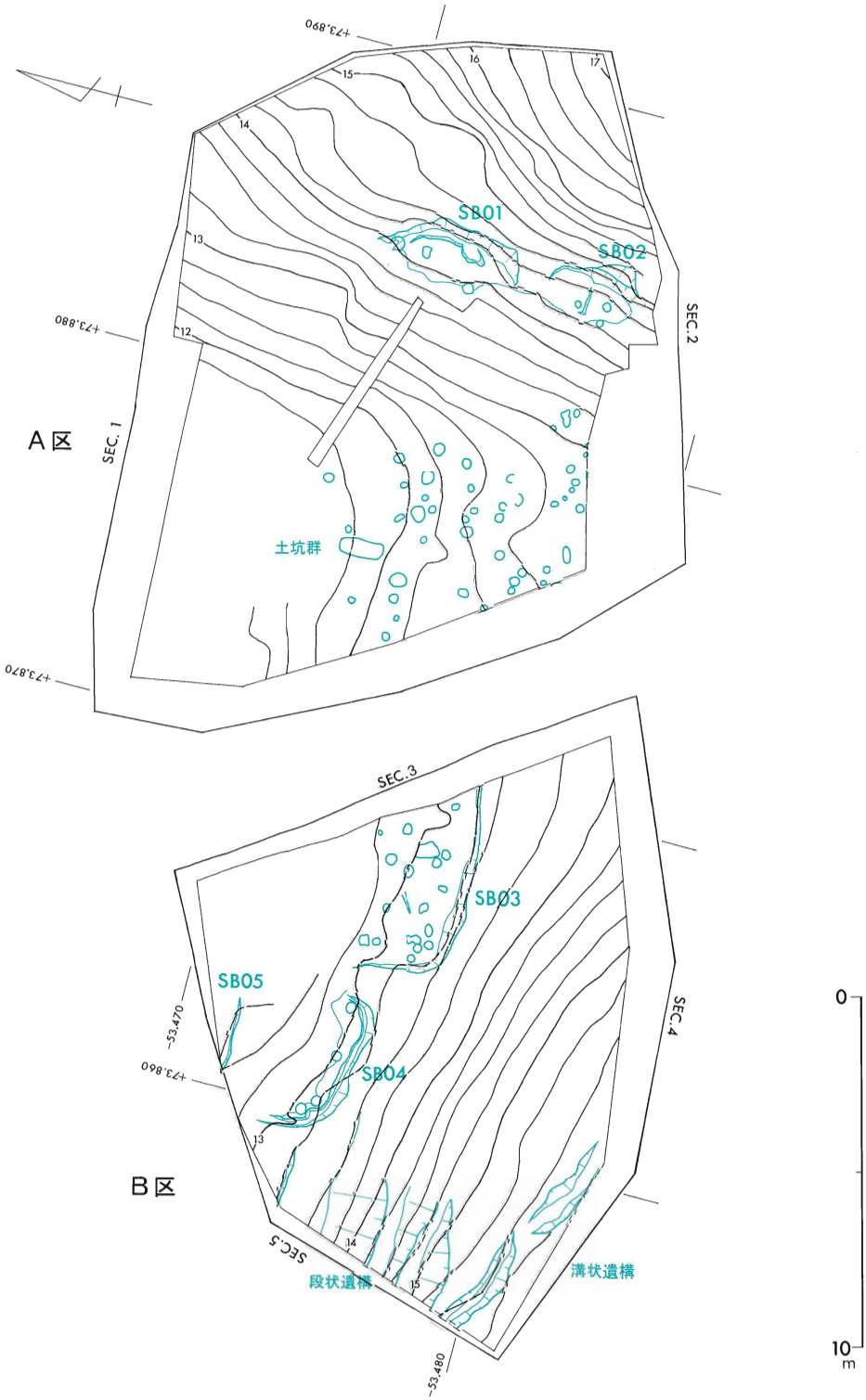


図４　下谷遺跡調査区配置図（1/200）

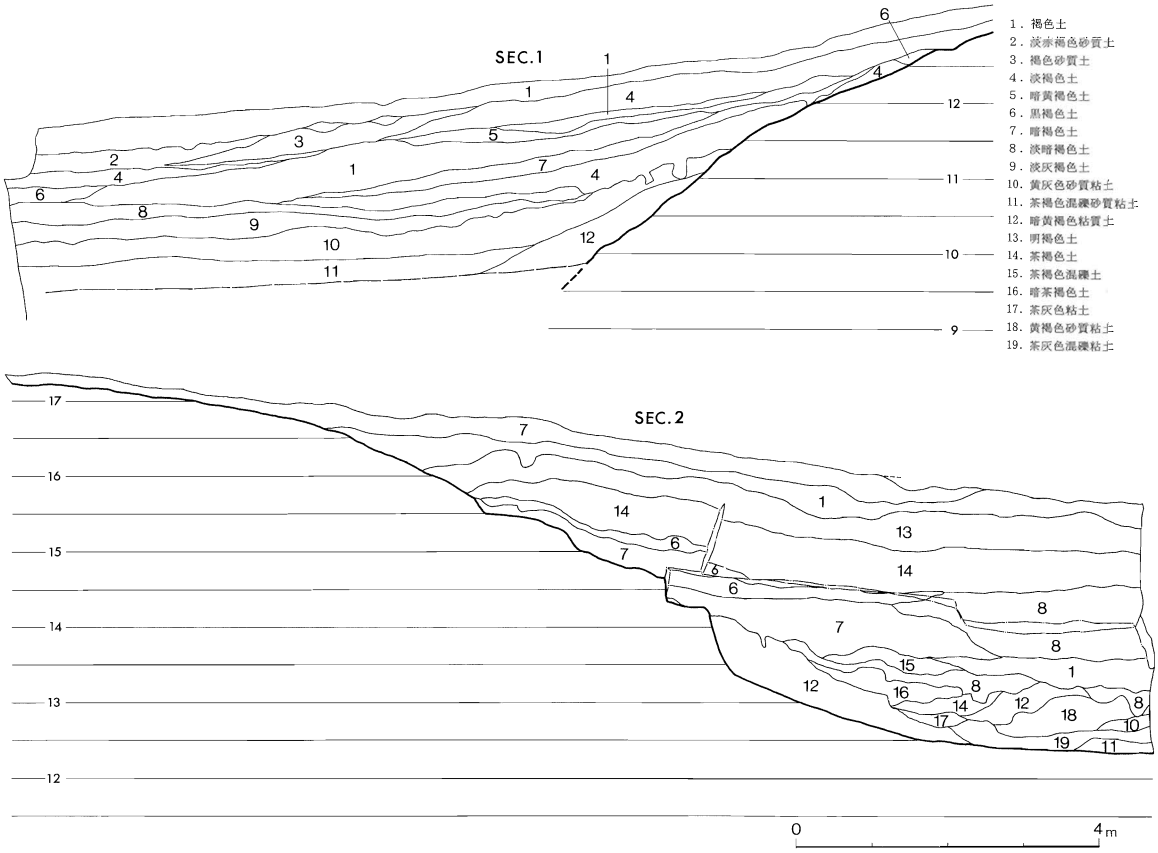


図５　Ａ区土層図（1/100）

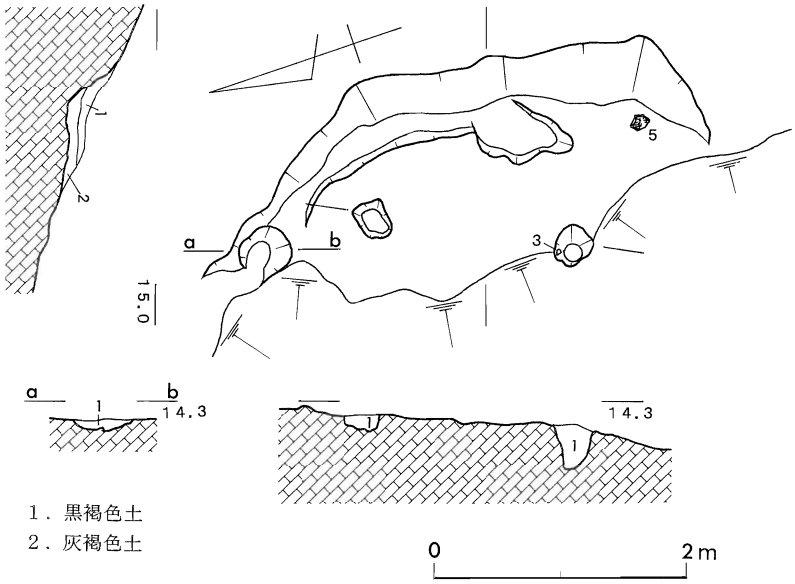


図６　ＳＢ01実測図（1/60）

ＳＢ０１　谷の西向きの斜面に掘り込まれた加工段上に存在した掘立柱建物と考えられる住居で、柱穴２と浅い土坑が残存していた。谷部に土盛を行って整地した床面は流失し、基盤層を掘り込んだ部分のみを検出した。柱穴の間隔は1.7ｍで、ごく小規模な住居と考えられる。他にも浅い土坑、溝が認められた。床面に貼り付くように須恵器片を検出した。

ＳＢ０１出土遺物（図７）　遺物はいずれも須恵器で、１、２は杯で、２は高台を有するが、１は糸切りによる底部をもつと考えられるもの。３は壷などの底部と考えられるもので、回転糸切り痕をとどめる。４、５は甕体部で、内面の叩き目を消さず、ともに焼成は甘い。同一個体の可能性もある。

ＳＢ０２　ＳＢ０１の南、さらに谷奥部に隣接する住居跡で、岩盤を削り出した床面の標高は約14ｍである。やはり小規模な住居と考えられ、不規則に３個の柱穴を検出している。床面に須恵器高杯杯部が伏せられていた。

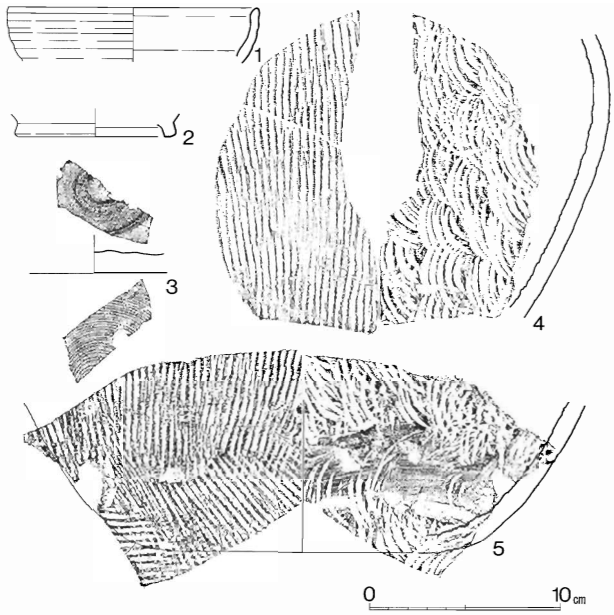


図７　ＳＢ01出土遺物

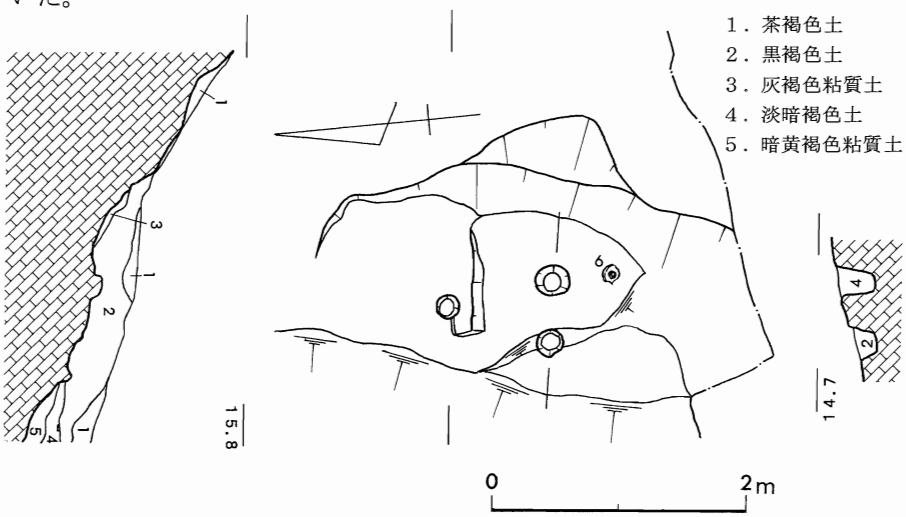


図８　ＳＢ02実測図（1/60）

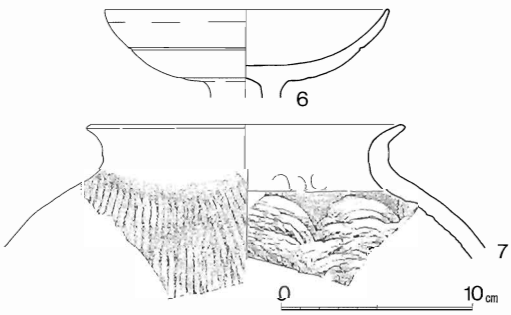


図９　ＳＢ02出土遺物

ＳＢ０２出土遺物　ここでも須恵器のみが出土しており、６は床面に伏せられていた、浅い杯部の高杯で、脚部を欠く。現状では透しは認められない。７は甕の口縁部から体部にかけての破片である。叩き痕は一切擦り消さない。６の杯底面には、重ね焼きの痕跡があり、同器種のものを重ねて焼成したとすれば、脚端径9.3㎝のものである。また、この面は非常に平滑で、たび重なる使用による摩耗を示すものか。

上層出土遺物（図10）　前述の住居址およびその当時の生活面に近い包含層の遺物である。８は、削り出し高台の磁器椀、見込みには釉を削り取った部分がある。釉は緑がかった灰褐色、胎磁は乳黄褐色である。

９～14は土師器、土師質土器で、９～11は土師質土器杯で、９は回転糸切痕をとどめる。11は切離しの痕跡をとどめず、底部そのものが剥落している可能性がある。土師器12、13はともに甑の把手部で、13は小形の製品である。14は土師器甕で、淡赤褐色を呈し、外面にはススが付着する。

15～20は須恵器杯で、高台をもつ20ともたない16～19の２者がある。18、19、20は回転糸切痕をとどめる。15は直線的に立ち上がる体部を有する。回転糸切り痕を有すると考えられる15～19はいずれも焼成が不良である。21から23は須恵器の蓋で、21は宝珠つまみをもつと考えられるもの、23は外面天井部にヘラ記号を有する。刻線は勢いをもって払われており、あるいは文字の一部の可能性がある。24は壷口縁部だが、焼成が不良で、瓦質の焼き上がりを呈する。25は甕体部で、内面の叩き目をある程度擦り消している。

土師器12、13、14、須恵器22、23が古墳時代後期、須恵器16から21が古代、須恵器15、土師質土器９～11が古代から中世初頭の遺物と考えられる。

以上のように、この包含層には、古墳時代後期から中世の遺物が包含されており、包含層に対応するＳＢ０１、０２はこのうちの古代の段階に含まれるものであろう。

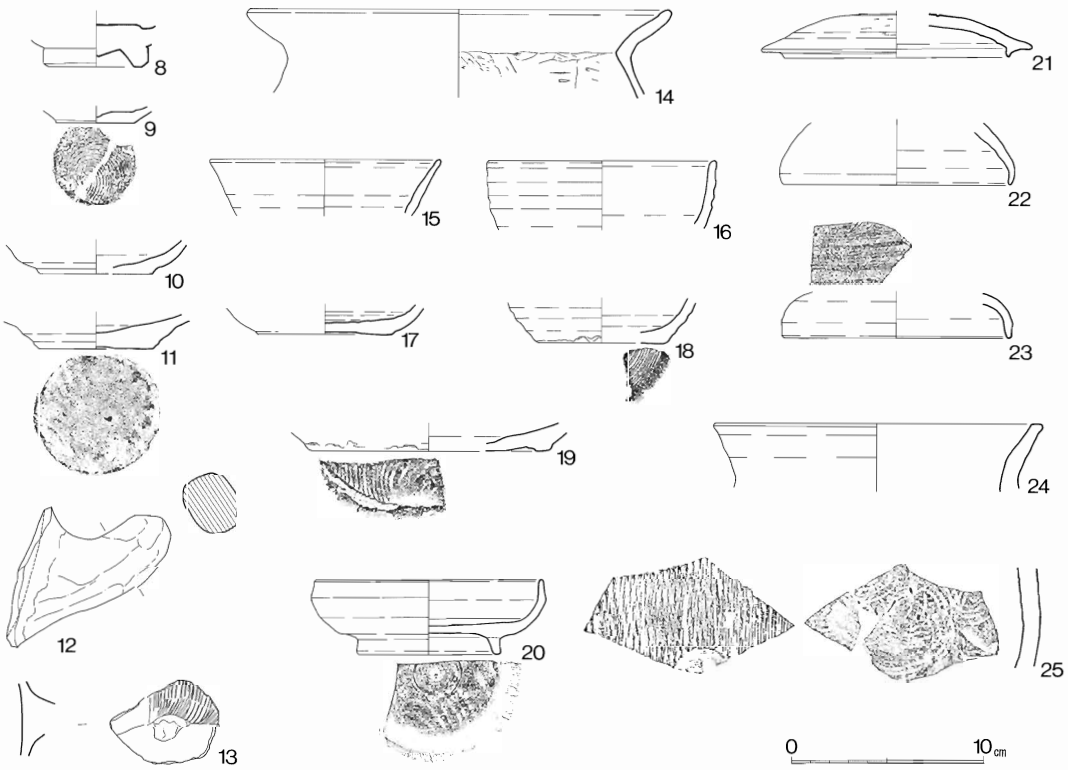


図10　遺構に伴わない遺物

土 坑 群　前述の包含層をさらに掘り下げると、谷底の緩やかな傾斜部分に土坑群および焼土面をいくつか確認した。斜面下には明瞭ではないが、溝状の窪みが北に向かって認められた。この面の北方にはさらに土坑が存在した可能性があるが、土砂の流入により、調査できなかった。確認できた土坑は49、火処と考えられる焼土面は５である。土坑は柱穴状を呈するものが多く、覆土土色も考慮して検討したが、建物などに復元できるものはなかった。

ＳＫ０１は、柱穴状のものが多いなかにあって長さ1.3m、幅0.5mと大きく、底面も平らに掘削される上、岩盤のブロックが坑中央に置かれるなど、墓壙状を呈する。覆土は礫を多く含む暗褐色土で、礫の中には焼けた石も含まれていた。しかし、遺物などは認められず、確証はない。

これ以外の土坑は、平面円形を呈し、径15～50cmのもので、埋土には礫、炭を多く含む褐色系のものと、礫や炭をほとんど含まない暗黄褐色の粘質土系の２者があった。

焼土面は、いずれも小規模なもので、わずかに土色の変化が認められるものである。焼土に伴うと考えられる炭もごくわずかに認められたに過ぎない。

土坑群覆土土色

02	暗灰褐色土	22	暗黄褐色粘質土
03	〃	23	暗灰褐色土
04	〃	25	〃
05	暗黄灰褐色土	26	暗黄灰褐色土
06	〃	28	暗黄灰褐色粘質土
07	〃	29	暗灰褐色土
09	〃	30	暗黄灰褐色土
10	暗黄褐色粘質土	31	暗黄灰褐色粘質土
11	〃	33	暗灰褐色土
12	暗灰褐色土	34	〃
13	暗黄灰褐色土	35	〃
14	暗灰褐色土	36	〃
16	〃	37	〃
17	暗黄灰褐色土	38	〃
18	暗灰褐色土	39	暗茶褐色土
20	〃	45	暗黄灰褐色土
21	〃	46	〃

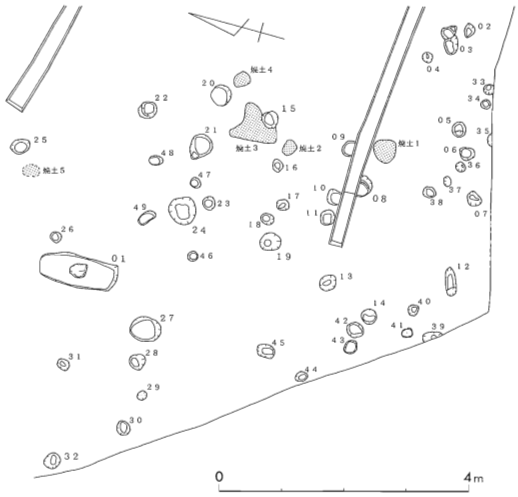


図11　土坑群配置図（1/120）

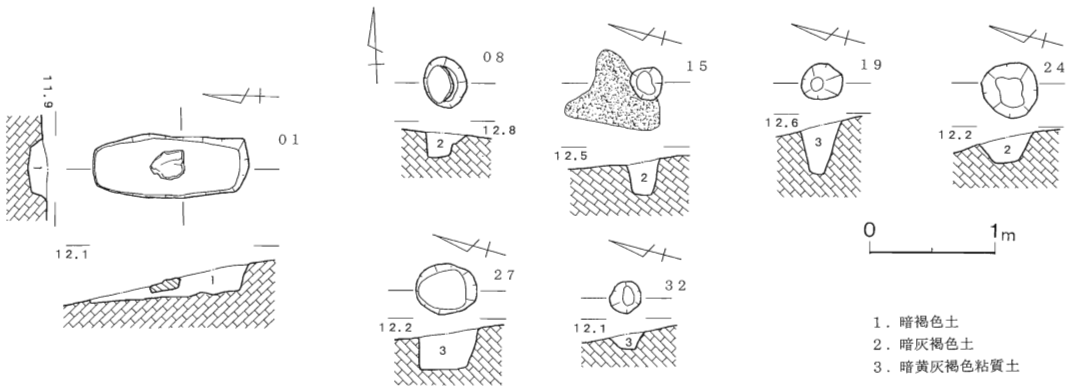


図12　土坑群実測図（1/60）

下層出土遺物（図13）　Ａ区下層の土坑群上面で遺物を採集しており、26は弥生時代後期初頭の甕で、口縁部に凹線や沈線をもたず、肩部があまり張らないもの。27は弥生終末から古墳時代初頭にかけての鼓形器台で、直線的な上台の端部をわずかに外方に折り曲げ、端面を平坦面に作り出している。28、29は、それぞれ脚部と甕ないし鉢の破片だが、あまり見かけない器形である。28は、小振りで中実の脚部であり、弥生後期から古墳前期の低脚杯のそれとは異なる。有脚の鉢などの脚部か。29は、直立に近い体部を有し、外面を粗いハケで仕上げ、内面にはこれに対応する指頭圧痕をとどめる。砲弾型の器形となるものか。海岸も比較的近く、器形から製塩土器の可能性も検討しうるが、胎土は精良で、２次的な焼成も受けた様子はないので、製塩土器などではなく、小形の甕ないし鉢と考えられる。弥生後期から古墳前期の土器にみられる胎土と変わりはない。

30、31は石器である。30は、四角柱形の大形の砥石で、上面にのみ砥面をもつ。乳白色を呈する。使用痕は長軸方向に擦痕をとどめる。正置すると砥面は大きく傾いており、著しい使用による研ぎ減りと考えられる。31は、安山岩質の平基無茎式の石鏃である。先端はやや鈍角に作られ、裏面には広く素材面をとどめる。

遺物の量はわずかな上、遺構そのものに伴う状態で出土したものはないが、これらを土坑群の時期を示す遺物と考えうるとすると、土坑群は、弥生時代後期から古墳時代初頭を中心とする時代の所産と考えることができる。Ｂ区でも遺構は未確認であるものの、同様の時期の遺物を採集している。

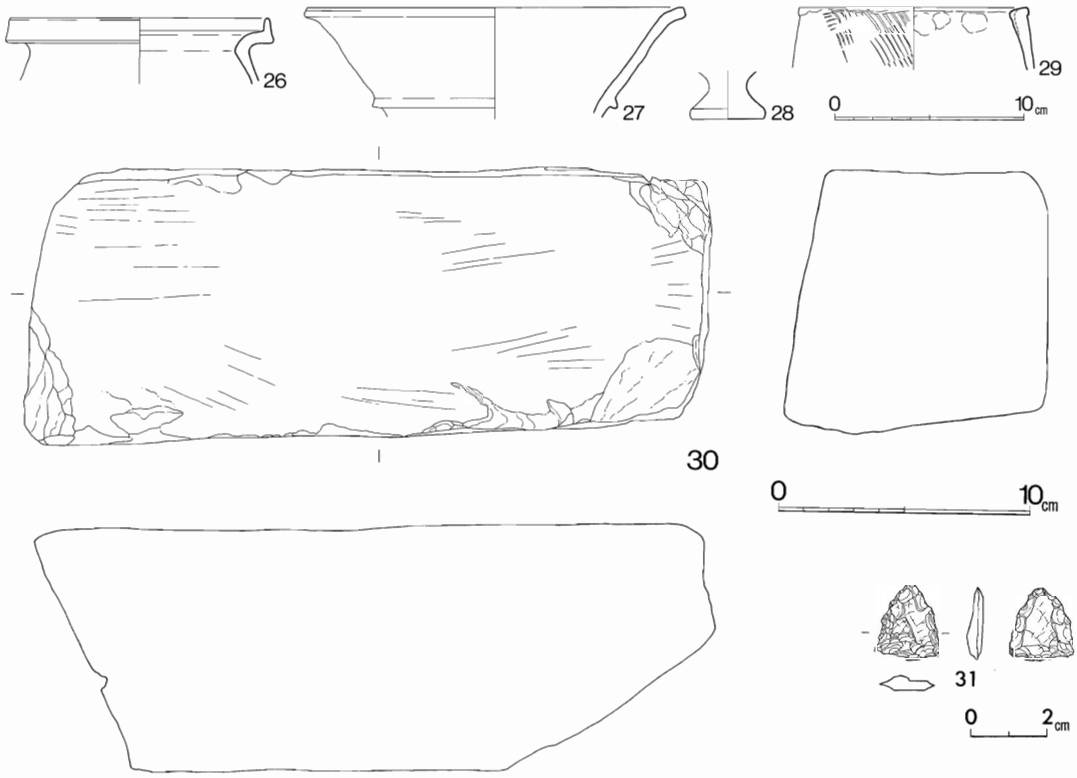


図13　下層遺物（30;1/3　31;1/2）

３．Ｂ区の調査

この調査区では、斜面を削り込んだ加工段に作られた掘立柱の住居址３棟と斜面を削り込んだ溝状遺構、段状遺構を検出している。さらにこの下層にはＡ区から続く弥生から古墳時代にかけての土坑群が存在する可能性があり、住居址群の調査後、この層位に向けて掘削を進めていたが、調査区が大雨による土砂流入と調査区上方斜面の崩落のおそれが生じ、調査の継続には危険を伴う状態となったため、この下層での調査は断念した。

調査区の南および西方は基盤層があり、これに溝状遺構、段状遺構は掘り込まれるが、ＳＢ０３～０５はこの谷内に厚く堆積した土砂の内、茶褐色土を基盤に掘り込まれている。

検出した３棟の住居址は、建物方位が揃うこと、覆土が酷似することなどから、同時に存在した母屋と付帯施設の可能性がある。

ＳＢ０３　調査区東寄りに検出した住居で、北向きの斜面を掘り込んで加工段を造成し、ここに掘立柱建物を建てている。この住居は、Ａ区との境の調査区土手内まで続いているが、土手反対側Ａ区の西壁断面ではこの遺構と断定はできないが、黒褐色の落ち込みを確認しており、長辺は10ｍ以上になる可能性もあり、小規模な住居の多いこの遺跡にあっては、比較的大形の住居といえる。床面の標高は約13.1ｍである。調査時点では流失していたが、床面はさらに北方斜面に土を盛って作り出されていたものと考えられる。桁行方向に10ｍ以上の規模があるとすれば、梁行方向についても不明ではあるが、それなりの規模があった可能性がある。

床面には不規則ではあるが柱穴が残っており、これから復元できる建物は、現状では桁行３間以上だが、桁行柱間は1.4～1.7ｍで、想定できるように長軸10ｍ以上の建物とすれば、桁行は５間以上の規模が復元できる。建物の長軸方向は、Ｅ-０°-Ｓと軸を東西に向けている。梁行柱間は対応する柱が判然としないが、1.5～1.6ｍと思われる。梁行は、残る柱穴では１間以上としかわからないが、桁行が５間以上の建物とすれば、梁行もさらに長い建物の可能性があろう。その場合、復元される建物は、総柱のものになる。調査区土手で観察した土層（図14 SEC.3）では、ＳＢ０３覆土と考えられる黒褐色土がわずかに降りながら、さらに北に延びており、この想定を裏付けるものと考えられる。黒褐色土がある範囲を床面とすると、梁行は約６ｍあり、柱間からすれば梁行４間の建物が復元可能である。よって、ＳＢ０３は、桁行５間以上、梁行４間のかなり大形のものと考えられる。

柱穴は径20cm前後のものが多いが、柱穴の底径はさらに小さいので、推定される柱はかなり細いものと考えられ、貧弱な上屋しか想定できない。また、これら柱穴はかなり錯綜するので、建替えを想定すべきかも知れない。床面には柱穴とは考えられない不整形な土坑がいくつか認められる。住居内で行われた作業に伴うものであろうか。

また、床面および覆土には土師質土器を包含していた。

ＳＢ０３出土遺物（図16）　この遺構に伴うと考えられる遺物は土師質土器32～37である。32～35は椀で、口径15cm、底径６cm程度のものである。36は柱状高台をもつもので、高台上には浅い杯部が接合していたものと考えられる。これらは底部をとどめるものはいずれも回転糸切り痕がみられる。37は口径約20cmに復元できる甕で、外面には全面にススが付着し、煮炊きに使用されたことが知れる。柱状高台をもつ器種が存在することから13世紀ころ、鎌倉時代の住

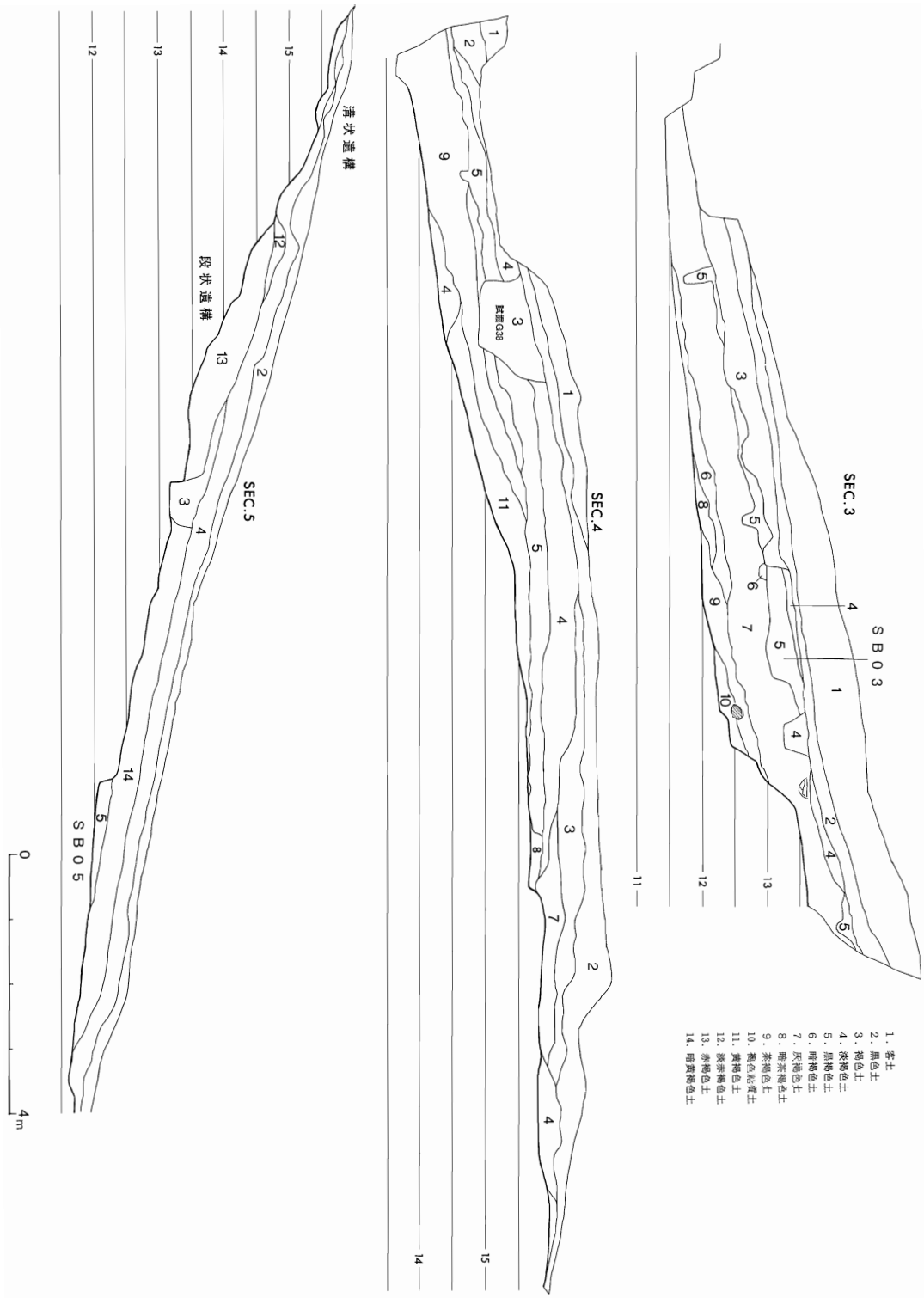
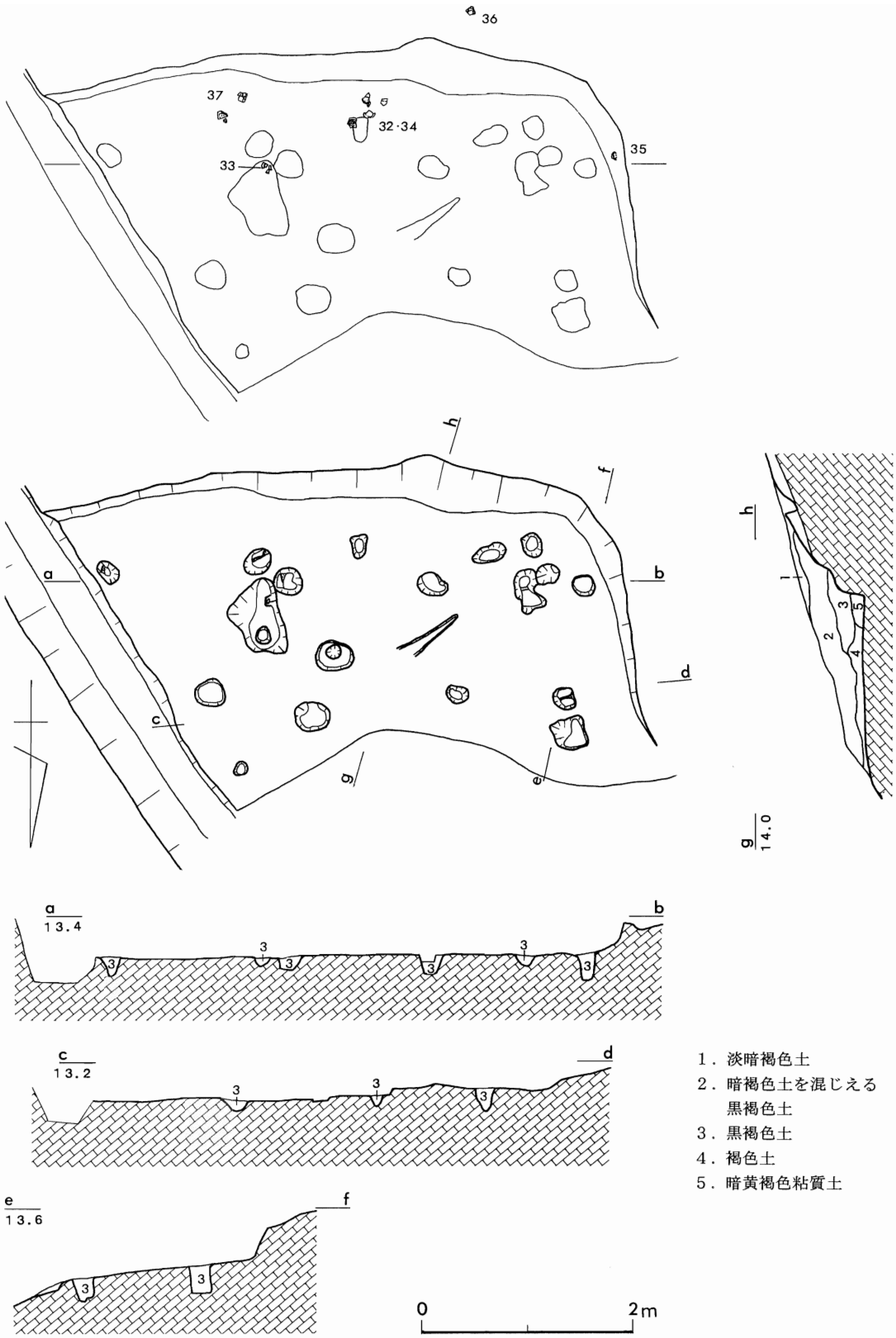


図14　Ｂ区土層図（1/100）



1．淡暗褐色土
2．暗褐色土を混じえる黒褐色土
3．黒褐色土
4．褐色土
5．暗黄褐色粘質土

図15　ＳＢ03実測図（1/60）

居と考えられる。出土遺物は土師質土器のみで、磁器片などは伴わず、一般的な農民層の住居と考えられる。

ＳＢ０４　ＳＢ０３西側に隣接して作られていた住居で、当初、南西隅に積まれた大小約10個の石材をよく締まった黒褐色の覆土中に検出した。この石材下には柱穴２個があった。石材は住居廃絶時か、廃絶後にここに積まれたものと考えられる。床面の標高は約12.9ｍで、ＳＢ０３とほとんど変わらない。建物の長軸はＥ-６°-Ｓと、

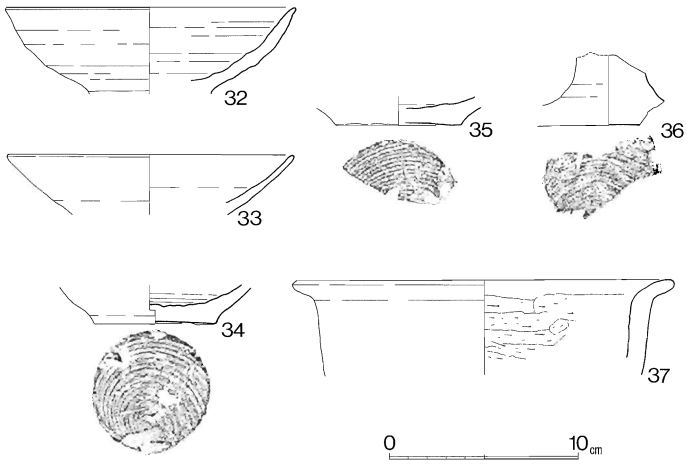


図16　ＳＢ03出土遺物

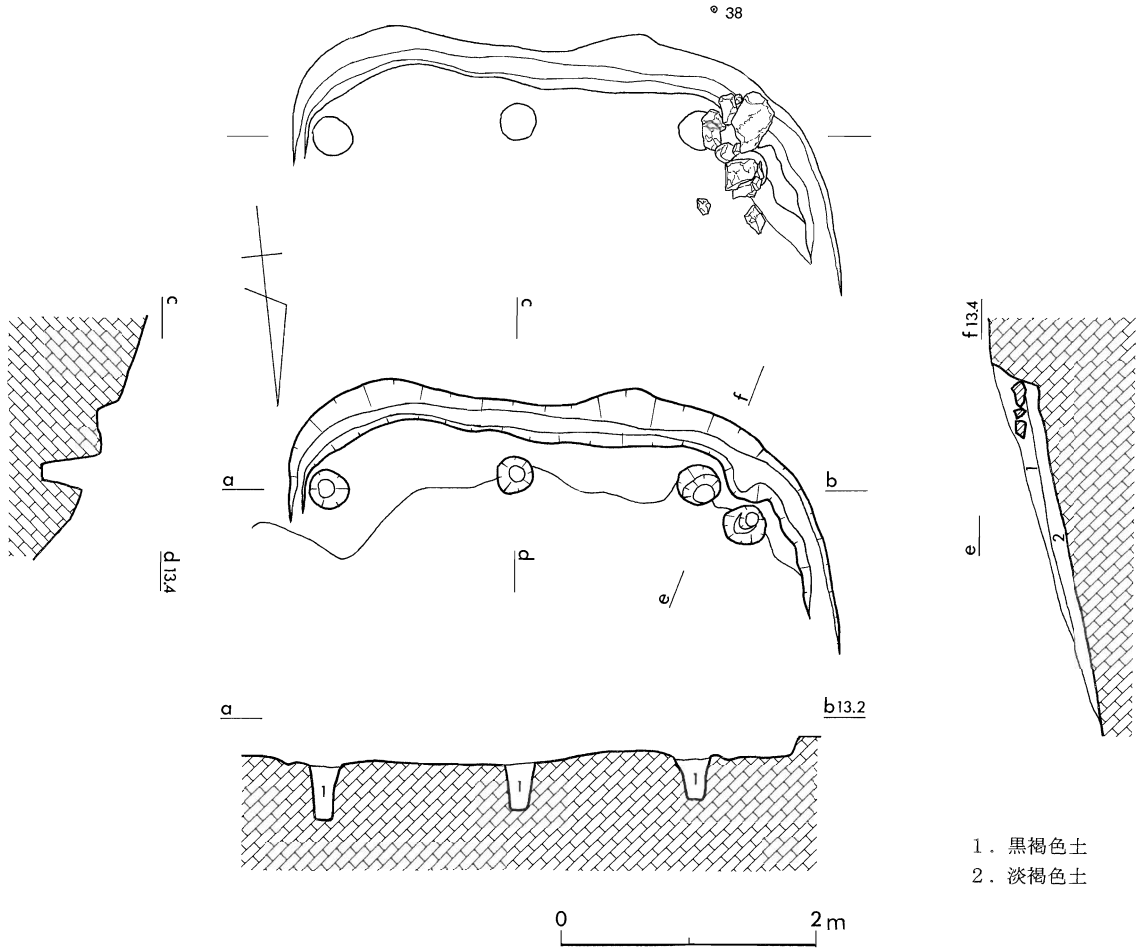


図17　ＳＢ04実測図（1/60）

ほぼ東西を指向し、ＳＢ０３と方位が近い。ここでは斜面を掘り込んで作り出されたカット面と柱穴が非常に近く、壁際に溝がめぐるなど、隅丸方形の竪穴住居を思わせる状況であった。桁行２間、梁行１間以上のものである。桁行柱間は1.5～1.8ｍである。柱穴は径30cm前後のものである。その位置からはＳＢ０３に付属する建物の可能性が考えられる。

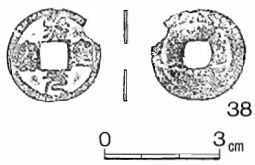


図18　ＳＢ04出土銭（1/2）

ＳＢ０４出土遺物（図18）　住居址内からは遺物は検出しなかった。しかし、直接伴うとは確言できないが、住居脇から古銭１が出土している。古銭は、摩耗しているが、熙寧元宝と読め、1068年初鋳の宋銭である。

ＳＢ０５　調査区の北西辺、ＳＢ０３、０４から一段下がった位置で一部検出した加工段状の落ち込みである。柱穴などは検出していないが、覆土が他の住居とよく似た堅く締まった黒褐色土であるため、住居として報告する。他の住居同様、斜面をカットして掘り込まれており、このカット面は方位が揃うＳＢ０３、０４に平行している。床面の標高は約12ｍである。

以上３棟の建物は、覆土の状況が酷似しており、母屋と納屋あるいは家畜小屋など、同時に営まれた家屋と考えられ、眼下の小平地を耕作する中世の農家の姿を推察することも可能である。今後の類例を待ちたい。

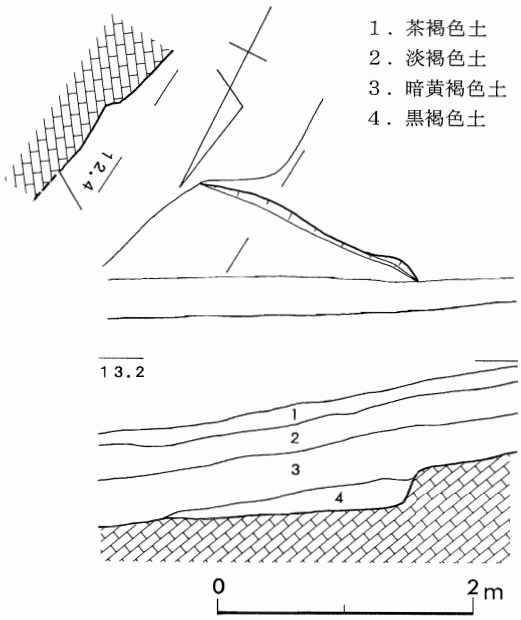


図19　ＳＢ05実測図（1/60）

溝状遺構　調査区南西隅、住居址群背後の斜面上の緩傾斜地にあったごく浅い溝で、幅0.3～0.9ｍを測る。溝内には、灰褐色、茶褐色土が堆積する。

段状遺構　溝状遺構に続く斜面が段上に加工されていた。３段が加工されているが、その性格などは現地では明らかにすることができなかった。陶器39が出土している。

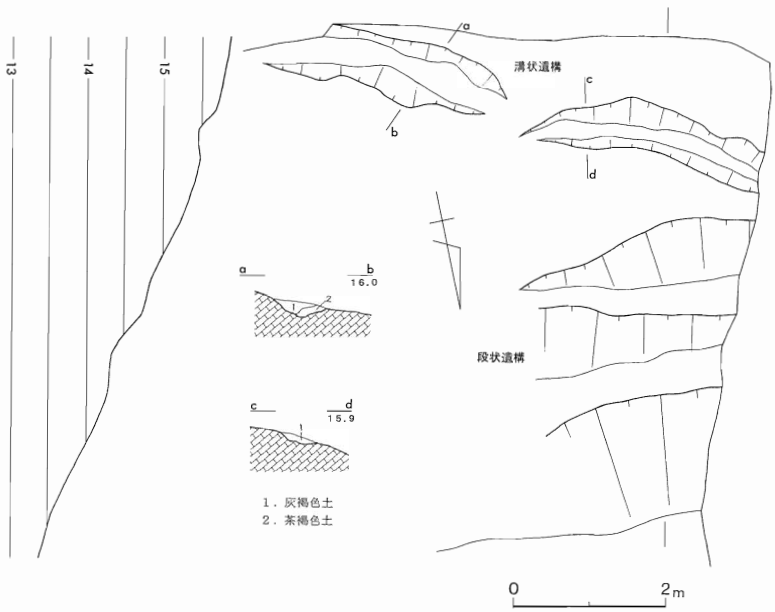


図20　溝状・段状遺構実測図（1/100）

遺構に伴わない遺物（図21）　陶器39は美濃灰釉菊皿で緑灰色の釉がかけられる。40は削り出しの高台をもつ青磁椀で、見込みには緑がかった灰褐色の釉薬を削り取った部分がある。胎磁は淡灰褐色である。

41から46は土師質土器で、41は小形の皿で、底部は回転糸切りで切り離される。42～45は、41よりやや大きい杯だが、切離し痕が明瞭に観察できるものがない。46は柱状高台を有する杯である。これらの土師質土器は、ＳＢ０３出土のものに近く、これに関係する遺物の可能性もある。

47～49は須恵器杯である。47、48は底部の切離しが回転糸切りによるであろうもの。49は甕片である。Ａ区ＳＢ０１、０２に前後する時期のものであろう。

50～52は土師器で、住居址群の調査後、下層に向けての掘削中に出土した遺物である。50は単純口縁の壷で、小形丸底壷などの器種が考えられる。51は低脚杯の脚部、52は甕の体部だが、外面を叩き目、内面をハケ目で仕上げる。製塩土器の可能性もあるが、胎土は精良なものが使用され、２次的な焼成も受けた様子はないので、製塩土器ではなく甕と考えられるが、叩きによって土器を成形する技法は当地方では一般的ではない。これらは、弥生終末から古墳初頭にかけての遺物で、Ａ区下層で検出した土坑群などの遺構がここにもあったことが予想される遺物である。

53は赤褐色を呈する砥石で、破損しているが、４面を砥面とした使用痕がみとめられる。石材は木目細かく、仕上砥と考えられる。54は土師質の土錘で、重さ５ｇである。

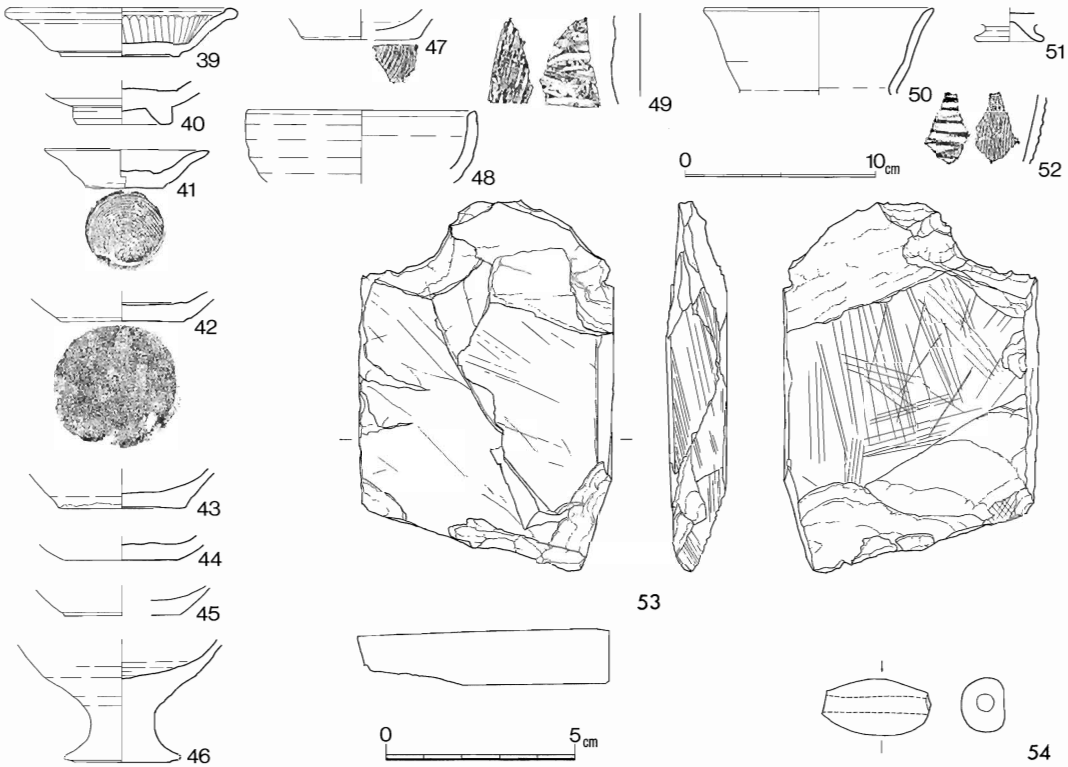


図21　遺構に伴わない遺物（53・54;1/2）

Ⅳ. 稗　田　遺　跡

1．稗田遺跡調査の概要

今次の調査は、鹿島町の西南部、大字佐陀本郷、大字古浦にまたがって計画された佐太南地区農村活性化住環境整備事業に先立って発掘調査を実施したものである。整備事業計画地内には、周知の文化財は存在していなかったが、近接して銅鐸２、銅剣６を埋納した志谷奥遺跡、砂丘上に営まれた弥生時代前期から中期の集団墓地と考えられる古浦砂丘遺跡、古墳時代後期の臼畑古墳など、点々と周知の遺跡が存在したことから、この計画地内にも遺跡の存在が予想されたため、この区域内で試掘調査を行い、遺跡の発見に至った。下谷遺跡とともに、平成５年度松江農林事務所からの受託事業として発掘調査を実施した。稗田遺跡では、存在が予想された遺跡のうち、集落道の敷設が予定されている部分について、幅８ｍ、延長36ｍの調査区を設定し、北東から順に第１から第５の区にわけて調査を開始した。

当初は、古代の木製品を含む遺物包含層を想定して調査に着手していたが、その下層にも多くの木製品が埋蔵されていることが判明し、木製品の出土が続くため、県教育委員会、調査指導者の指導も受け、調査区を北東方に７ｍ拡張したが（拡張１区）、さらに木製品の包蔵が続いていたため、再度北東方に12ｍの拡張（拡張２区）を行った。結果、延長53ｍ、480㎡の調査となった。

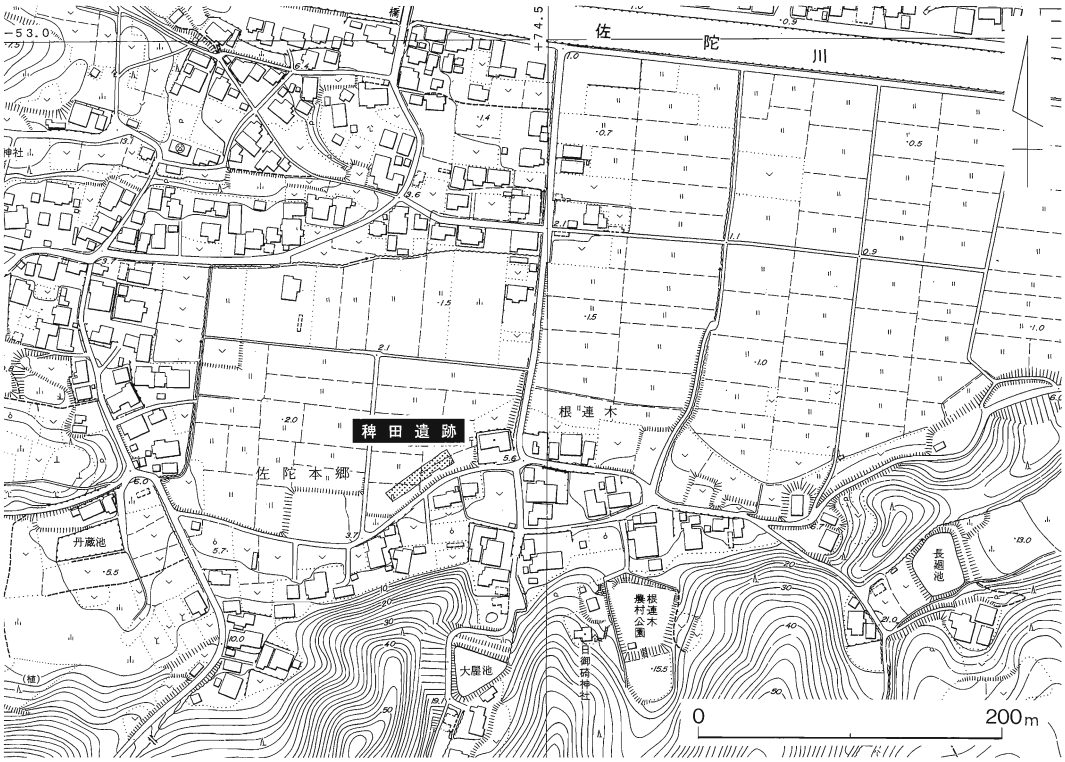


図22　稗田遺跡位置図（1/5000）

この遺跡では、弥生時代を中心とする大量の木製品が、地元で「オモカス」と呼称される泥炭層から出土し、『出雲国風土記』秋鹿郡の条に「恵曇陂」と見える池の汀線付近を水田化するにあたり、集落での廃材を低湿地に踏み込んだ遺跡であると考えられるところとなったが、遺跡の性格については依然、検討の余地を残しているように考えられる。

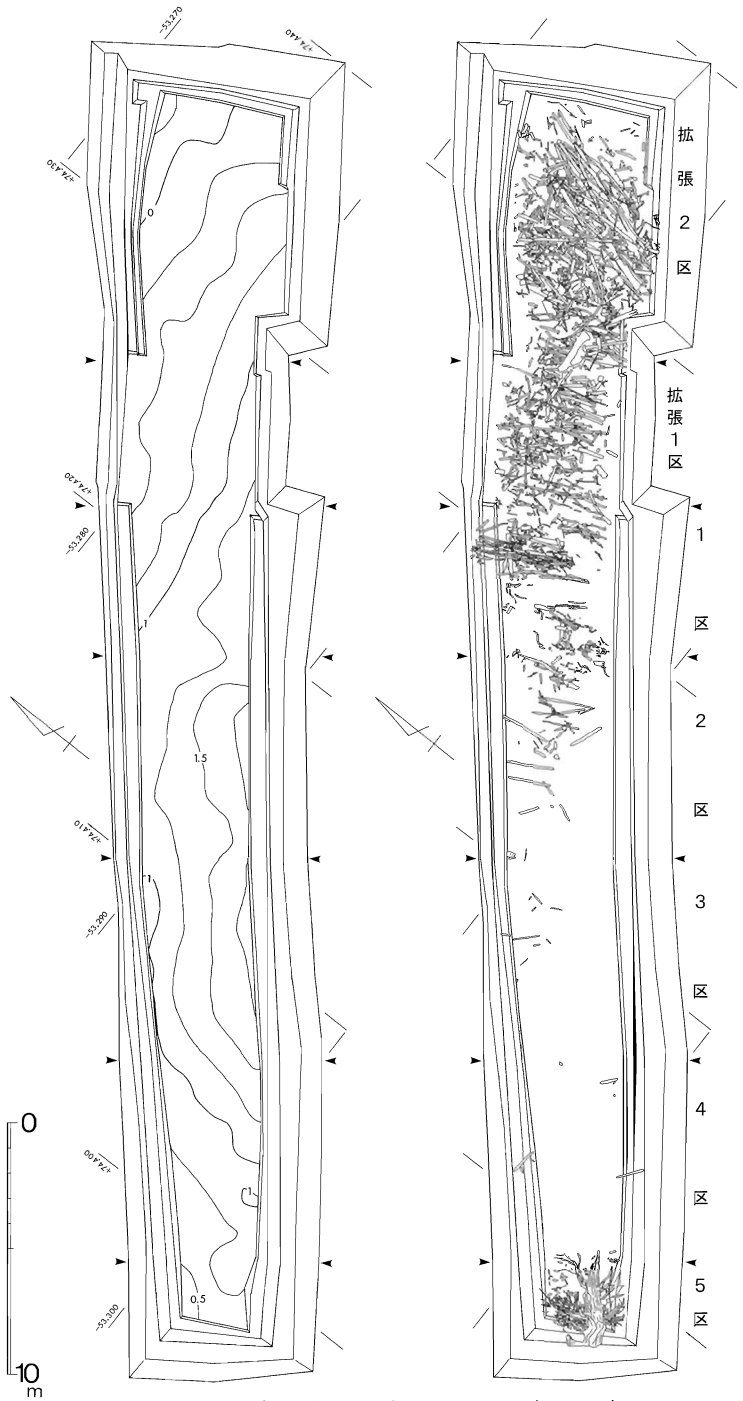


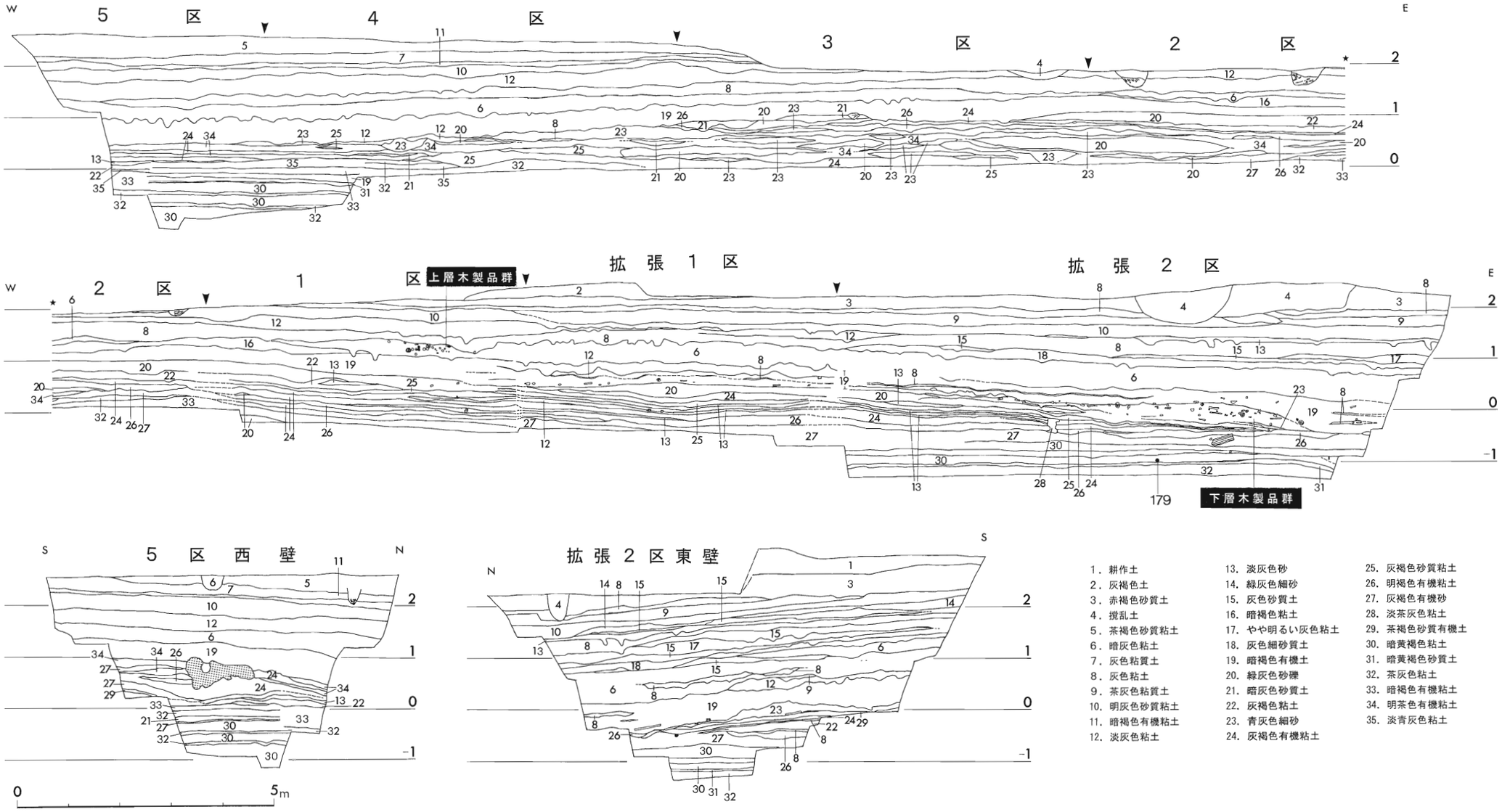
図23　稗田遺跡調査区配置図（1/300）

現地で取り上げた木製品は約1700点余にのぼった。出土した木製品は多量であると同時に建築材、農工具など多様で、保存状態の良さとともに注目される。木製品を含む泥炭層は、途中わずかに粘土、砂の層を交えるものの、安定しており、水流からは比較的遠かったことが推定される。

泥炭層から推測される当時の低湿地の様相は、『風土記』恵曇陂の「俗人の云へらく、其の底に陶器・瓷・甎等の類多にあり。古より時々に人溺れ死ぬ。深き浅きを知らず」と記述された景観をそのまま彷彿させるものであった。

調査区内の精査終了後は、さらに深部についても調査を行い、わずかではあるが、弥生前期、縄文晩期前半の土器などを検出し、周辺での低湿地への進出がこの時代に始まっていたことを推測させた。

今回の調査地周辺は、古浦砂丘遺跡、志谷奥遺跡や『出雲国風土記』にみえる恵曇陂などの顕著な遺跡が知られていながら、その実態には不分明の点が多かった地域での調査で、この地区の古代史像解明に基礎的なデータを提供するものといえよう。



1．耕作土
2．灰褐色土
3．赤褐色砂質土
4．撹乱土
5．茶褐色砂質粘土
6．暗灰色粘土
7．灰色粘質土
8．灰色粘土
9．茶灰色粘質土
10．明灰色砂質粘土
11．暗褐色有機粘土
12．淡灰色粘土
13．淡灰色砂
14．緑灰色細砂
15．灰色砂質土
16．暗褐色粘土
17．やや明るい灰色粘土
18．灰色細砂質土
19．暗褐色有機土
20．緑灰色砂礫
21．暗灰色砂質土
22．灰褐色粘土
23．青灰色細砂
24．灰褐色有機粘土
25．灰褐色砂質粘土
26．明褐色有機粘土
27．灰褐色有機砂
28．淡茶灰色粘土
29．茶褐色砂質有機土
30．暗黄褐色粘土
31．暗黄褐色砂質土
32．茶灰色粘土
33．暗褐色有機粘土
34．明茶色有機粘土
35．淡青灰色粘土

図24　調査区土層図（1/100）

2．上層木製品群

遺跡は、試掘調査で検出した古代の木製品包含層を調査することを目的に始めたが、木製品はこれにとどまらず、下層にさらに大量に埋蔵されていることが判明したため、この層位を上層木製品群とした。木製品を含む暗灰色粘土層は、地表下約1.5m、標高約1.2m付近に所在し、１区から拡張１区で比較的多く木製品が認められた。調査前の水田面の標高は約３mであった。１区では、雑木を南北方向に幅約１mに並べたかのように検出した。木材のなかには加工品も含まれる。周辺で須恵器片を試掘時、本調査時に採取しており、これらの遺物がこの遺構に近い時期の遺物と考えられる。１区以西では、包含層そのものが薄く、下層木製品群と層位的に区別できない出土状況で、弥生土器と古代の土器が同一面で検出される状況であった。

１区での木材の集積は、まず東西方向に木を横たえ、それに架けるように南北方向に材が並べられているため、有機質の粘質土が示すような当時の軟弱な水田面に、人が踏み込む際の道としたと考えられ、当時の畦畔の可能性もある。

出土遺物（図26）　ここで検出した加工材は、枠付大足１、３、把手４、用途不明材５がある。

このうち、３、５は試掘調査時に出土したもので、試掘調査区がまさにこの上層木製品群の足掛かりに相当しており、田下駄３は、本調査出土の枠付大足１と組み合っていたものと考えられる。３孔のもの。

枠付大足１は、枠部は片側部分しか残存しないが、復元できる片足分の枠は、長さ約１m、幅0.5mで14本の横桟を渡す。須恵器２は蓋杯の蓋で、古墳時代後期のものである。

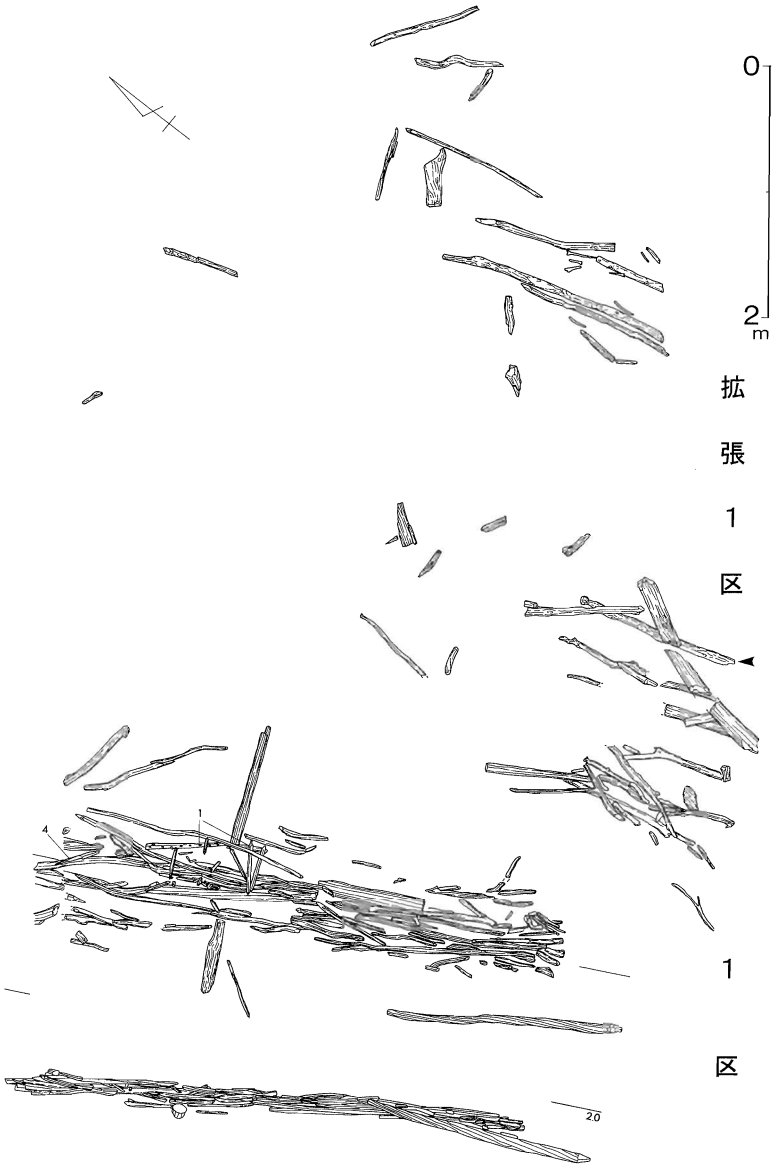


図25　上層木製品群平・立面図（1/60）

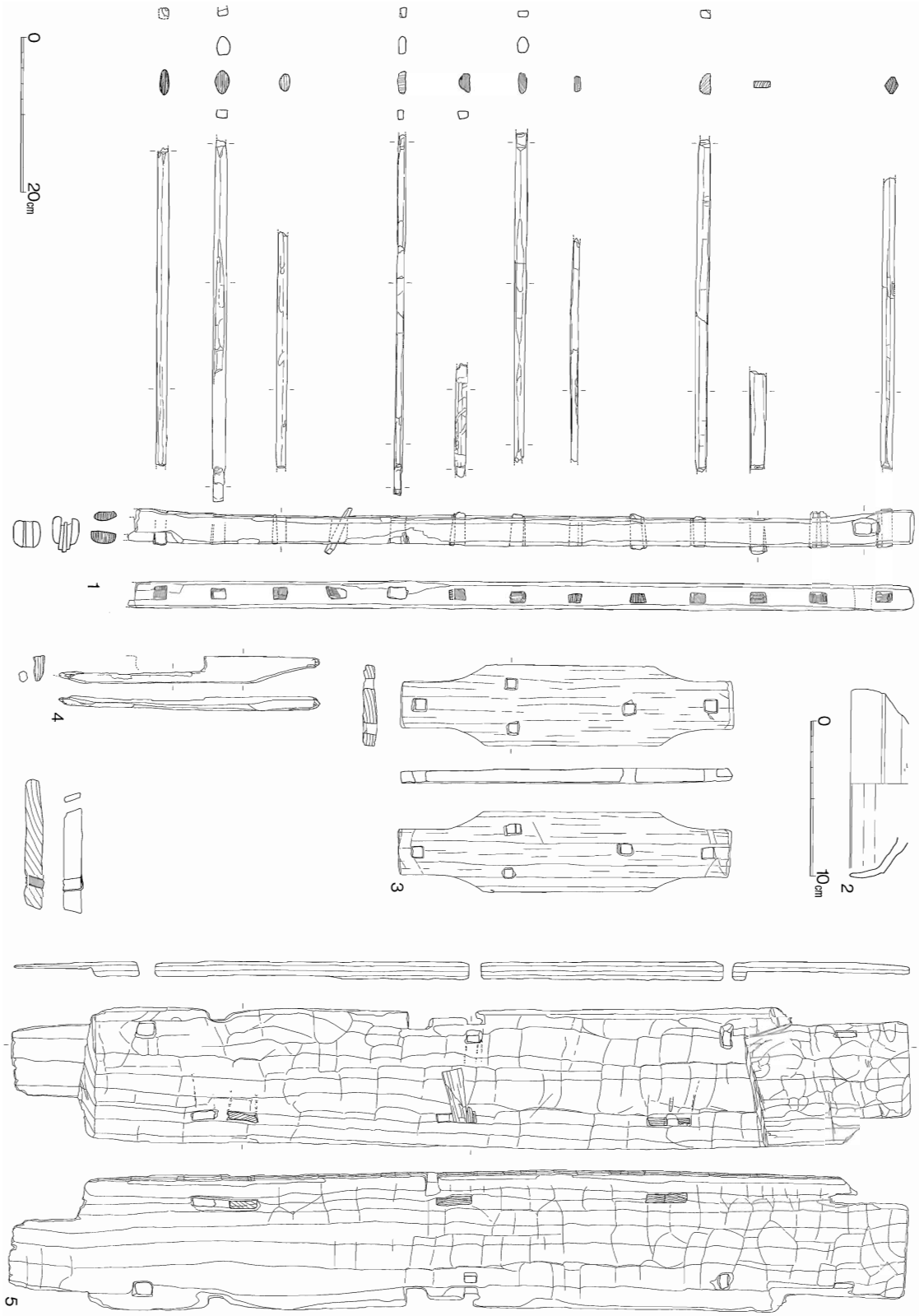


図26　上層木製品群出土遺物（1/8　2；1/4）

３．下層木製品群

上層木製品群を包含する暗灰色粘土は、調査区のほぼ全体を厚く覆っており、これを除去すると泥炭状の暗褐色土があらわれる。この層に多量の木製品が含まれていた。暗褐色土は、１から５区では薄く、拡張１区から拡張２区にかけて、厚く堆積している。

一方、泥炭層が堆積する基盤層は、緑灰色の砂礫層であった。調査後の等高線図はこの基盤層面を測量したものである。この図でもわかるように基盤層は、２区から３区にかけてが高く、ここから東、北、西の各方向にゆるやかな傾斜面となって降っていた。この傾斜に特に東側で厚く泥炭層が堆積しており、層中に数多くの木製品が含まれている。泥炭層は間に細かく細砂や粘土層を含みながらも、安定して堆積している。この層位に含まれる木製品を下層木製品群とした。地表下約２～３ｍ、標高約0.6～－0.4ｍ付近に所在し、調査区東半の１区から拡張２区で特に多くの木製品が認められた。ただし、この包含層の標高は、上面に厚く土壌が堆積して、その重量によって泥炭層が圧縮された結果の現在の標高であり、当時はさらに高く、足の取られやすい不安定な土壌であったと考えられる。

下層木製品群を検出した調査地点は、泥炭状の覆土が示すように、当時の耕地とは考えられず、水辺の草が生い茂る低湿地という景観が想定される。それは、後の『出雲国風土記』に「恵曇陂」としてあらわれる池の記述を彷彿させる。こうした低湿地へ人が踏み込む際の足掛かりとして、また、当時としては利用度の低い地点に、集落で不要となった材を投入し、結果として、このような集積をみたものと考えられる。

後述するように出土した木製品には鍬、鋤、田下駄など、水田農耕に伴う遺物が多く検出されており、付近に水田があったことがうかがえる。この地点での土層の観察からは、潅漑を推測させる水流の痕跡は認められない。当時の水田はさらに低位の地点で、遺跡東方の小水流（現 大家川）を利用して存在したものと考えられる。この水田への通路としてこれら木製品群の集積は使われた可能性も考慮しうる。

上層木製品群を含む暗灰色粘土層は、遺物の示す古墳時代後期段階では、すでに水田化した土壌と考えられ、この間に可耕地の面積が拡大したことがうかがえる。現在の標高で約1.3ｍ付近のこの地点まで潅漑しうる水路などの整備が行われたものと考えられる。しかし、依然として湿田であったことは、枠付大足の出土や、木材を集積しなければ足を取られる畦畔の存在からうかがうことができる。

また、この遺跡上方には、これだけの木製品の供給元となった当時の集落の存在が予想される。今回の調査と原因を同じくする佐太南地区農村活性化住環境整備事業に伴い、調査地脇の根連木集会所が移転する予定地が、遺跡の南約15ｍの地点に計画されていたため、調査と並行して、この地点の試掘調査を実施した。地表下２ｍまででは、関係する遺構、遺物を検出することはできなかったが、付近の地形から、遺跡背後の大家川が作った小扇状地上にその集落が存在することはまちがいなかろう。木製品に未製品が数多く含まれることから、この集落は、木器製作を行う周辺での拠点的な集落であることも予想されるのである。『風土記』にいう「恵曇陂」は、日本海に面する古浦砂丘の内側の潟湖の後身のひとつと考えられ、この周辺には、さらにいくつかの小集落が点在したことを予想することも可能であろう。

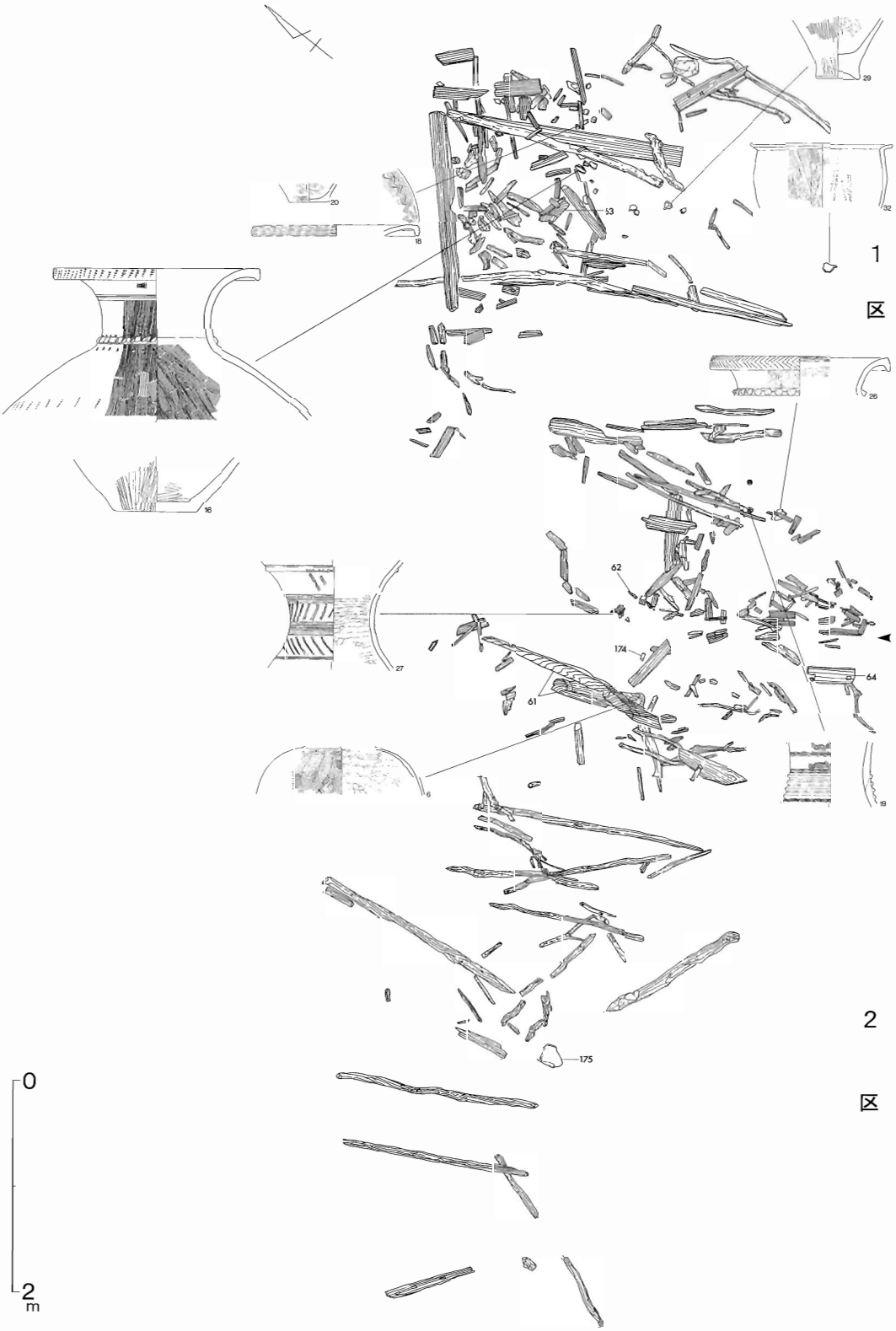


図27　下層木製品群1～2区遺物出土状態（1/60）

１～２区（図27）　ここでは泥炭層は薄く、基盤層である緑灰色砂礫の上面に薄く載った泥炭層内から木製品を検出した。木製品はさほどの密集を示さないが、加工材の他に切断しただけの樹皮をもつ木材も多く認められ、これらは南北方向に並ぶものが多かった。１区東側で比較的多くの材の集積がみられ、この付近では、弥生前、中期の土器が多い印象である。

層中からは木材のほかに弥生土器、土師器、石器も出土している。弥生土器の多くは中期から後期のものだが、一部前期のものを混える。

また、船材と考えている61は、船首ないし船尾の材と考えられるもので、折損したものを重ねた状態で出土した。この材の下面で出土したのが土師器６で、この船材の年代を推定しうる資料であろう。

２～４区（図28）　２区西部から５区にかけては泥炭層はさらに薄く、遺物は各時代のものが混在する状態で、層位的に区別しうる状況ではなかった。遺物は土器が比較的多く出土するものの、有意の分布は示していないものと考えられたが、基盤層上面に貼り付くように弥生前期、中期の遺物が出土しており、注意された。木製品と土師器、弥生後期～前期土器が出土しており、層位的には区別できないが、５区出土の土師器60のように奈良時代に比定しうる土器もあり、調査区西方では泥炭層そのものがきわめて薄いため、上層木製品群に対応する遺物も混在しているものと考えられた。

なお、時期は不明だが、西端の５区でスギの倒木を検出している。この遺跡からはスギ製の

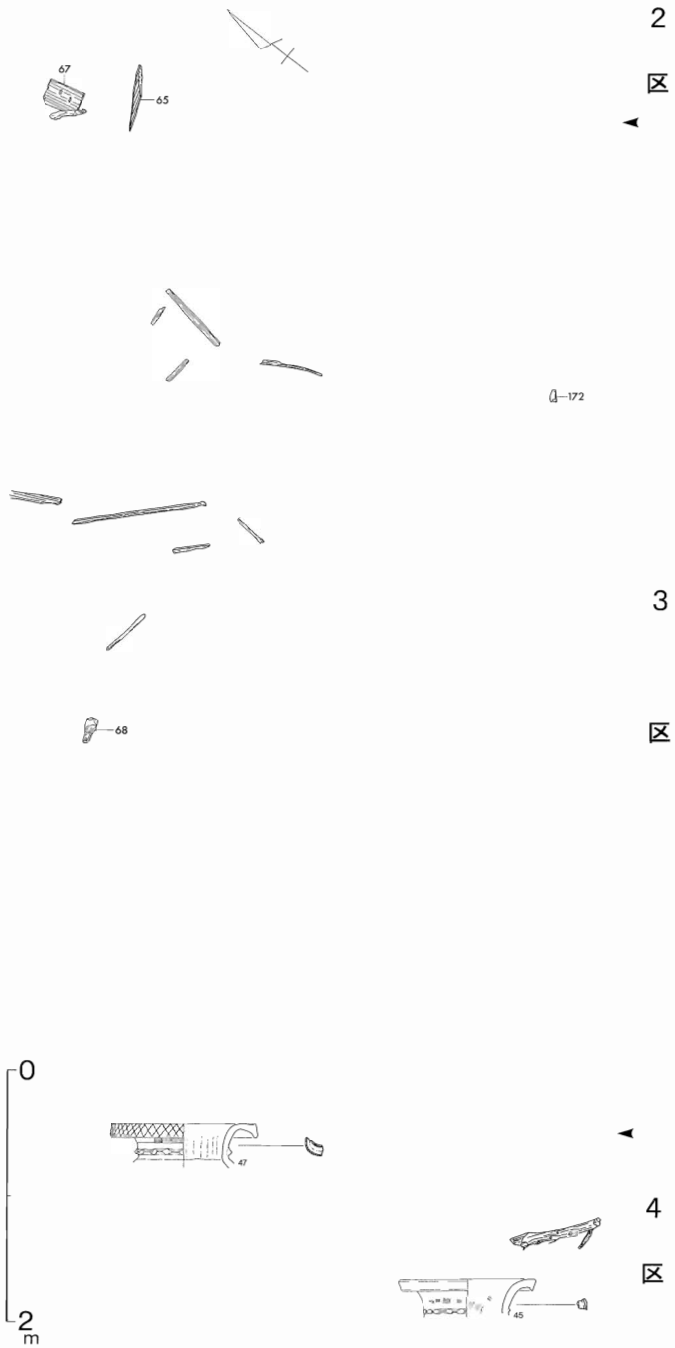


図28　2～4区遺物出土状態（1/60）

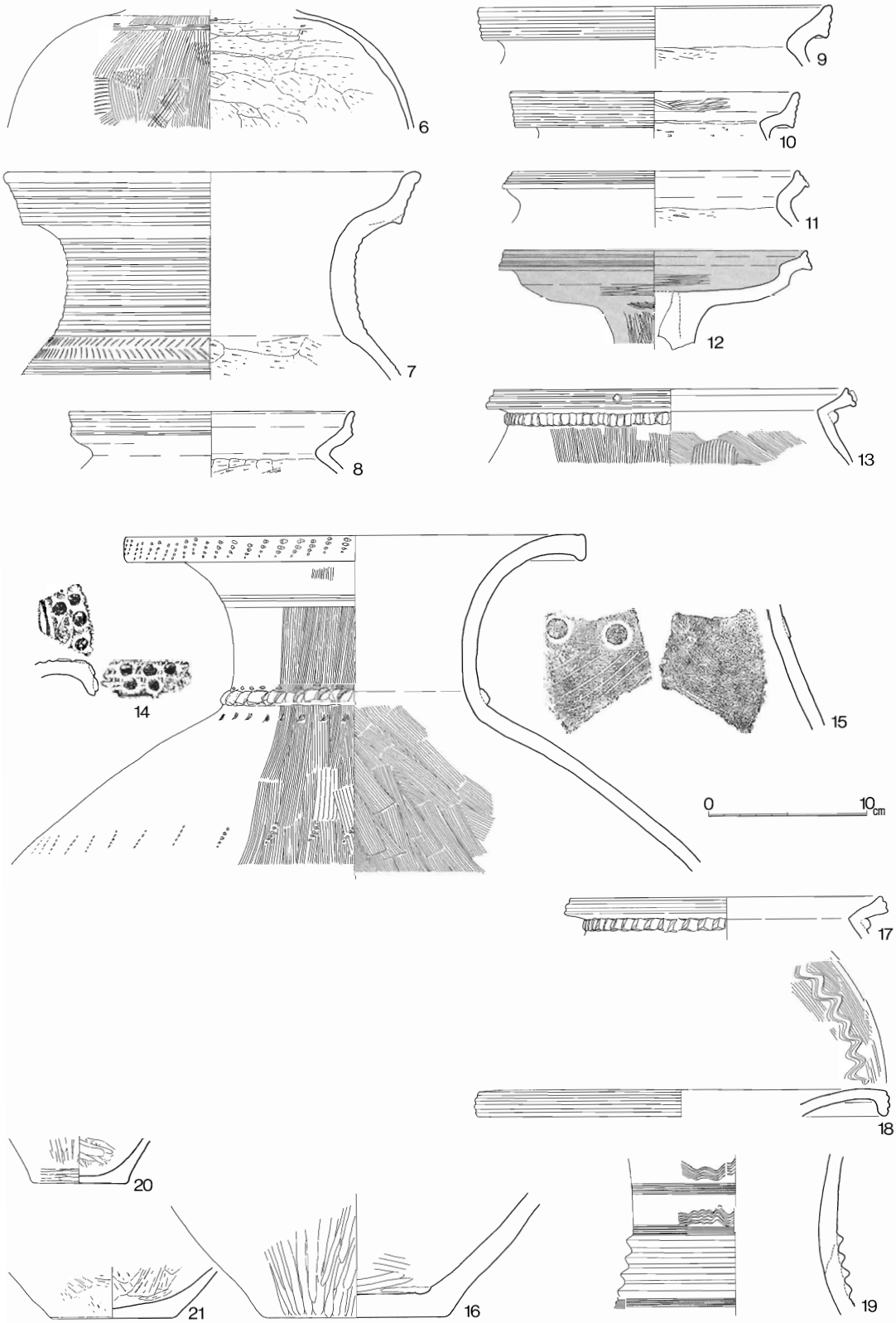


図29　1～2区出土遺物（1）

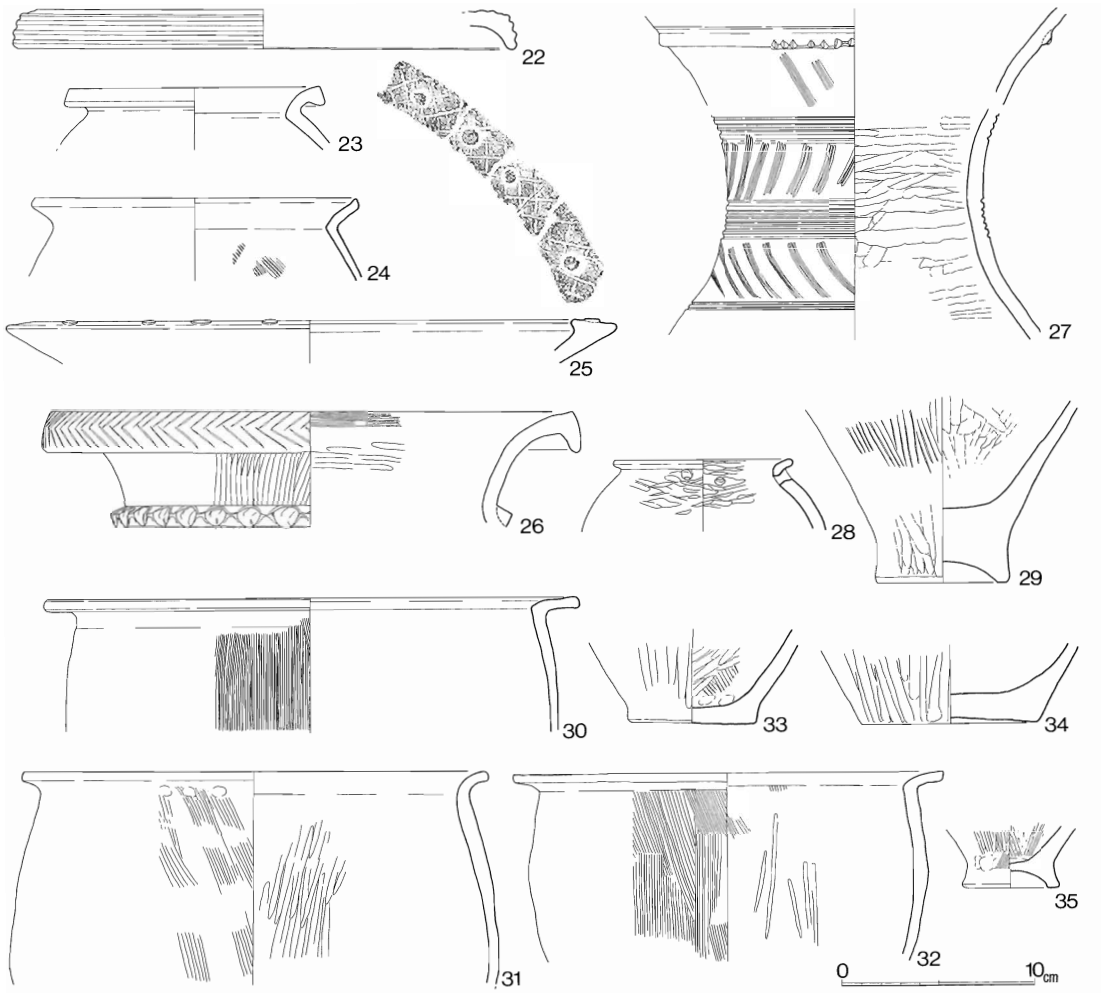


図30　1～2区出土遺物（2）

木製品が多く検出されているが、実際の植生としても付近に生育していたことをうかがうことができる。

１～２区出土土器（図29～30）　土師器６は球形の体部外面を粗い縦のハケで仕上げる甕で、直立に近い口縁部が接続するものと考えられる。佐太前遺跡出土のもの[5]に類例があり、古墳時代前半のものであろう。弥生後期壷７は試掘調査時出土品の再掲。[1] 茶褐色の胎土で、他のものとは異なる。８は吉備系の甕かと考えられるものだが、胎土は在地のものと特に変わる様子はない。弥生末から古墳時代前期に相当するものだろうか。

９～11は弥生後期前葉（Ｖ－１様式）の甕である。12はこれらに併行する時期の高杯で、内外面を赤彩する。

13～30は中期土器（Ⅲ～Ⅳ様式[8]）である。壷では、口縁に凹線を施す14、18、22、口縁に凹線をもたない16、25～27がある。甕では、口縁に凹線を施す13、17、口縁に凹線をもたない23、

24がある。壷、甕あわせ、大きくは、前者がⅣ様式、後者がⅢ様式に含まれよう。16は特に大形の壷で、口径29cm、復元器高約70cm、体部径は50cm以上に復元されるものである。口縁、肩部に櫛状工具による刺突文をめぐらせる。27は貼付突帯、櫛描文、凹線文で飾っている。底部20、21、29、33、34は外面を磨いており、中期のものであろう。中でも内面のヘラ削りをとどめる20、21は新しい相を示す。28は吊り手を付けたと考えられる無頸壷で、やはり中期の中で捉えうる遺物である。

31、32は前期の甕と考えられる。

２～４区出土土器（図31）　36は古墳時代中期の深い杯部の高杯、37～44は弥生後期前半代（Ｖ－１～２様式）、45～53、55～58は弥生中期（Ⅲ様式）のものである。

後期の甕は、いずれもＶ－１様式の範疇で捉えうるが、43の鼓形器台は、Ｖ－２様式から出現する器種であり、これのみ後期の中では新しい遺物である。高杯42は脚が中実のもので、あまり見かけない。外面を磨いて仕上げる。

中期の壷では、頸部に貼付突帯を巡らせる45、47や、口縁平坦面に施文する46～48がある。いずれもⅢ様式に含まれるもので、凹線文をもつものがここではみられないことが注意された。甕、鉢の50～53も中期のものであろう。53は平坦に拡張された口縁上面に櫛状工具による斜格子文を描く。端部には刻みをもつ。底部55～58は外面を磨いており、やはり、中期の甕底部と思われる。

54、59は弥生前期（Ｉ様式）のものである。54は逆Ｌ字口縁の甕で、３条のヘラ描き沈線をめぐらせ、口縁端には刻み目をもつ。

なお、５区出土の60は内外面とも丹塗の貼付高台を有する土師器で、内面見込みに暗文の弧を描いている。いわゆる律令的土器と考えられる。この土器だけは、上層木製品に対応する遺物であろう。

１～５区出土木製品（図32、33）　船材61は、スギの一木から刳り抜かれた大形のもので、残存長2.3mを測る。加工面には手斧の痕跡をとどめる。中途に段があり、何かに固定したホゾ孔をもち、この段付近から材下面が緩やかに大形の先端部に向かって上がっていくことなどから、船材と考えた。丸木舟の上縁に上部構造として架構された材を想定している。この推測が許されるなら、準構造船の部材ということになる。この材下面から出土した土器から、古墳時代前半の年代が考えられるが、準構造船が海水面からは切り離されていたであろう遺跡前面の内水面を航行していたことは考えづらく、集落での造船作業中の廃材か、海岸部から不要材として運び込まれた可能性の２者を考えておきたい。

62は曲柄平鍬の身で、ナスビ形の笠部をもつ。復元できる刃部は幅が広い。63は船材ないし槽の一部であろう。木取りからは槽と考えられる。火を受けた痕跡をとどめる。64は用途不明品だが、両端に異なる大きさの四角い穿孔がある。65は船材ないし槽の一部かと考えられる平坦な材、66は広葉樹を材とする鍬などの原材、67は田下駄折損品である。穿孔や切断面が整えられておらず、製作途中での破損、廃棄が推定できる。４孔のものか。68は横槌に似るが、裏面に溝が刳られており、用途は不明といわざるをえない。69は把手で、ホゾ孔がある。鋤などの部品か。70は途中を欠くが、端部に穿孔があり、さらにそこに挿し込まれた角柱状のものを固定する目釘孔がある。カセなど、紡織具の一部か。

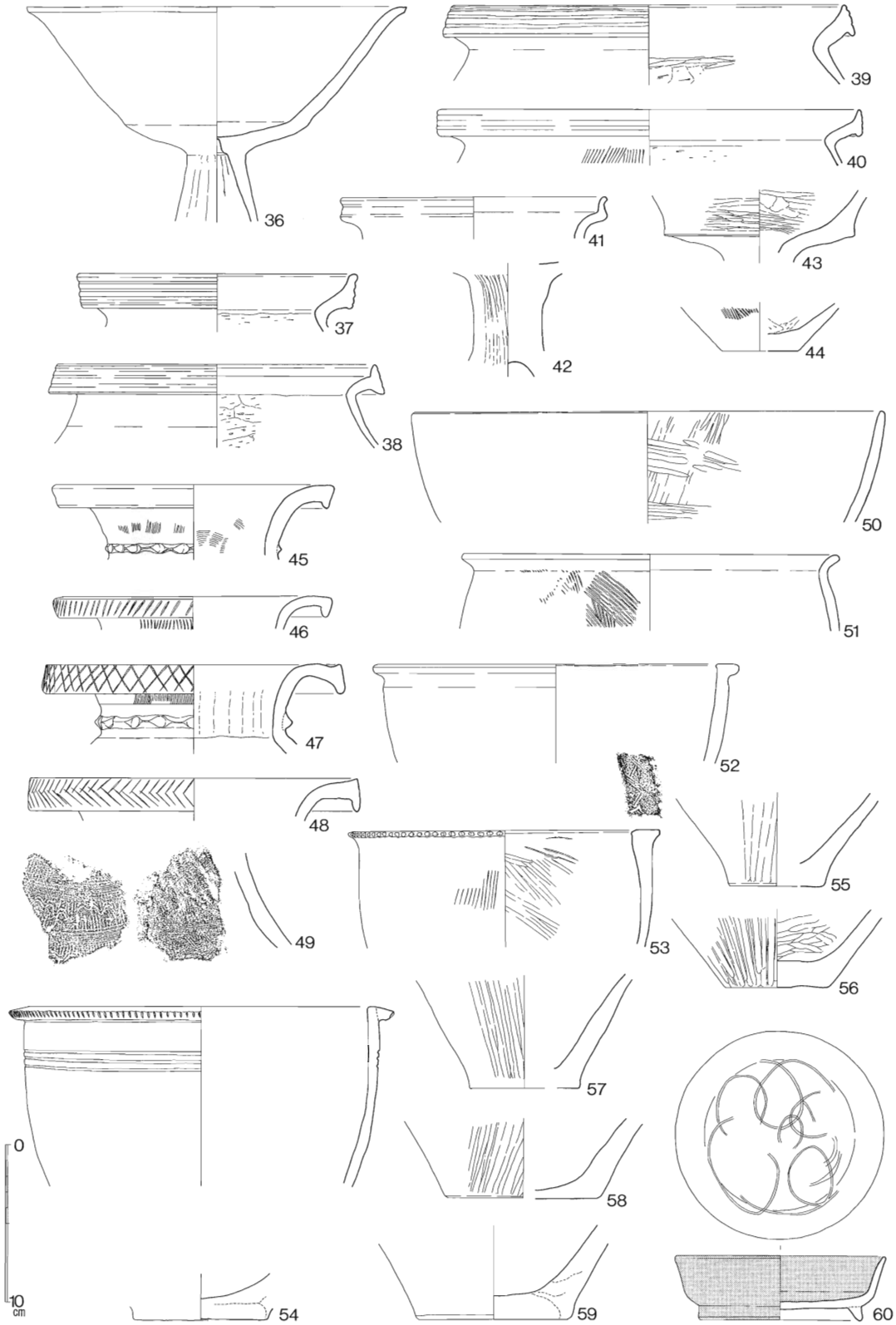

36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
0
10
cm

図31　2～5区出土遺物

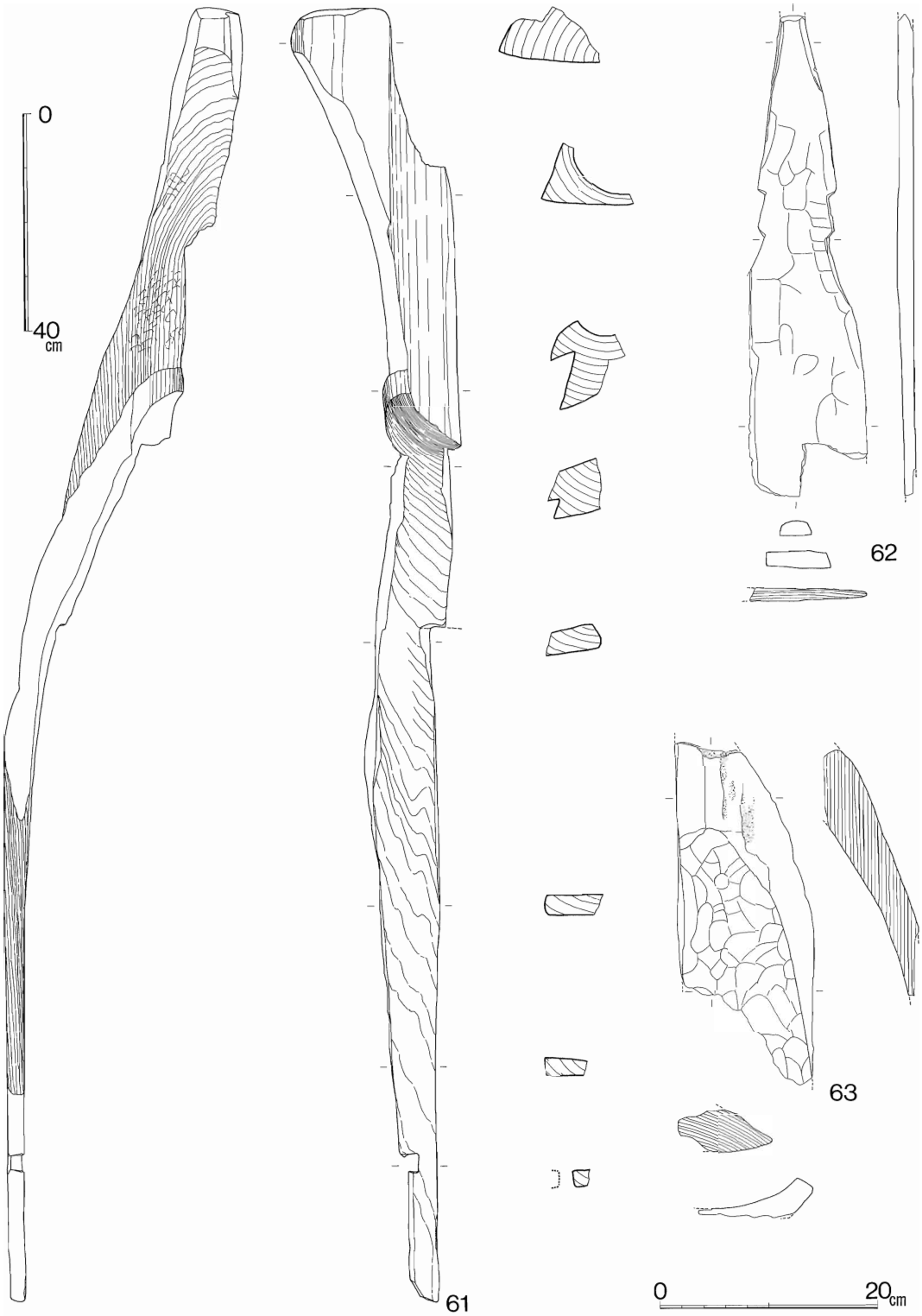


図32　下層木製品群遺物出土状態（1～3区　61のみ1/12）

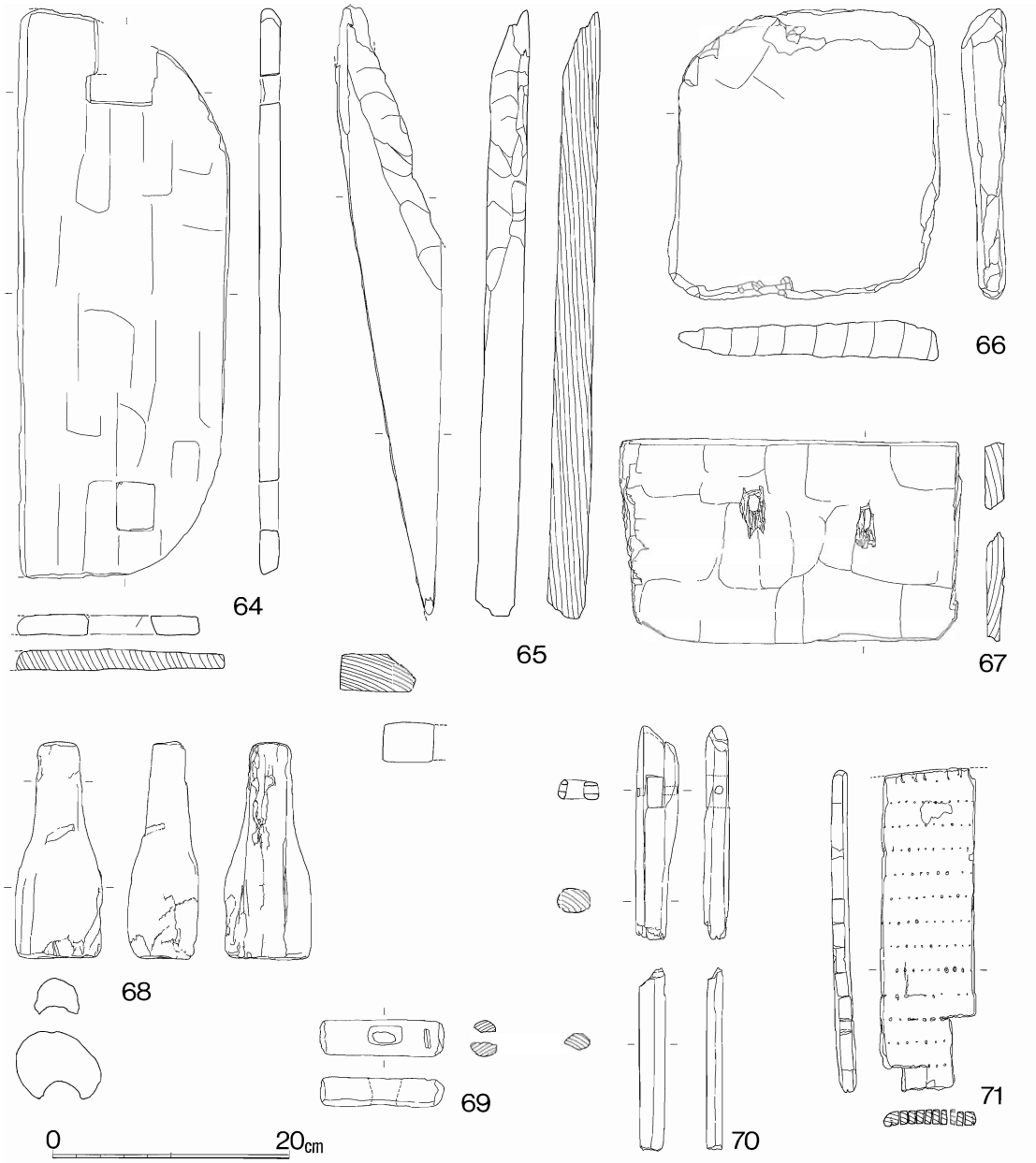


図33　下層木製品群遺物出土状態（1～3区）

71は板目のモミ属を材とする盾で、威し孔が全面に平行してある。上端部が残っており、この辺は威し孔の列と平行せず、盾上縁は山形の加工がされていたものと考えられる。この上端には平行する２孔１対の威し孔列があり、盾の縁に沿って装飾的な威しがあったものであろう。威し孔列の間隔は約２㎝、孔間の間隔は６～７㎜である。顔料などは認められない。

また、石器では、提砥172、磨製片刃石斧174、砥石175がある（図49）。

拡張１区第１面（図34上）　１区東側に拡張したこの調査区では、やはり木製品を数多く検出した。木製品は、１区同様、泥炭層内に含まれるが、基盤層はこのあたりから東方に向けて傾斜をやや強め、泥炭層もその厚さを徐々に増している。木製品も重複しているため、第１面、第２面と２次にわけて取上げた。加工された木製品も多いが、枝を払っただけの雑木も多く伴っていた。

共伴する土器は、弥生時代中～後期のものを多く認め、中心は弥生時代後期のものであった。なかにはあるいは古墳時代に入るかと考えられる椀72や弥生時代後期末の甕73があり、層位的には分別できなかったが、木製品より高い位置から出土しており、この区の木製品よりも新しい遺物との印象であった。しかし、下層木製品群を含む包含層である暗褐色土の堆積時期を考えるとき、下限を示す遺物であろう。

拡張１区第２面（図34下）　第２面では木製品は調査区東端に集中的に認められ、それ以外の基盤層上面には点々と木製品と土器が散在していた。この面で木製品とともに採取した土器は、弥生時代中期のものに限られ、第１面よりは古い傾向がある。

出土土器（図35）　72は時期不明だがあるいは古墳時代の遺物かとも考えられる椀、73は弥生時代後期末の複合口縁甕、74～78は弥生後期のいずれも擬凹線をもつ甕で、以上が第１面からの出土である。79～89は同中期の甕およびその底部で、第２面からの出土である。

第１面出土土器では上記の２点を除けば、いずれもくり上げた口縁に数条の凹線や擬凹線を施し、内面を削り放して仕上げとするもので、弥生後期前葉（Ｖ－１様式）の範疇で捉えうるものである。

第２面出土の甕81～85は、いずれも口縁に２から３条の凹線文が施されており、弥生中期後葉（Ⅳ様式）のものに限られている。うち、82～84は、頸部に貼付突帯を巡らせている。84は凹線文の口縁に粘土を貼って、円形浮文としている。79、80も同様の時期の甕体部と考えられる。79は内外面をハケで仕上げ、80は内外面を丁寧に磨いた上で、肩部に板の小口を押し当てた列点をもつ。壷肩部片86も外面に施文、内面にハケメをもち、同様の時期であろう。甕底部と考えられる87～89は、外面を磨いた薄手のもので、同様の時期のものと判断できる。

拡張１区出土木製品（図36～38）　木製品では、90が直柄狭鍬の身で、柄を保持する隆起をもたない。柄孔から、柄とはかなり鋭角に接合する。91、92は田下駄で、ともに４孔のものである。91は１辺に切断時の粗い刃跡を、全体に手斧痕をとどめ、仕上げられておらず、未製品か。92はやや大形のもので、緒孔の位置が全体に偏する。93は途中を欠く柾目の不明材であるが、中途に穿孔がある。緯越具などの紡織具だろうか。94は針葉樹を材としており、カイか。図化面のみ加工されている。拡張２区出土の167に似るが、全体に薄い印象である。95は全面に威し孔がある盾片で、威し孔列の間隔は約2.5cm、孔間の間隔は５～６mmである。威し孔列を結ぶ線が見え、穿孔前に罫書きをおこなっている。顔料などは認められない。前掲の71に似るが、威し孔列の間隔が異なり別個体であろう。96、97は槽の破片と考えられる。98は残存長116cmの天秤棒と考えられるもので、一端を欠くが、欠けた端部側にのみ縄などを掛ける浅い刳込みがあり、不自然ではある。

99は一木作りの腰掛で、腰掛とした場合の座面は丸味をもつよう作られている。上面両端にそれぞれ溝状の刳込み、台座部分の前面に装飾的な刳込みが施される。全体に平滑に仕上げら

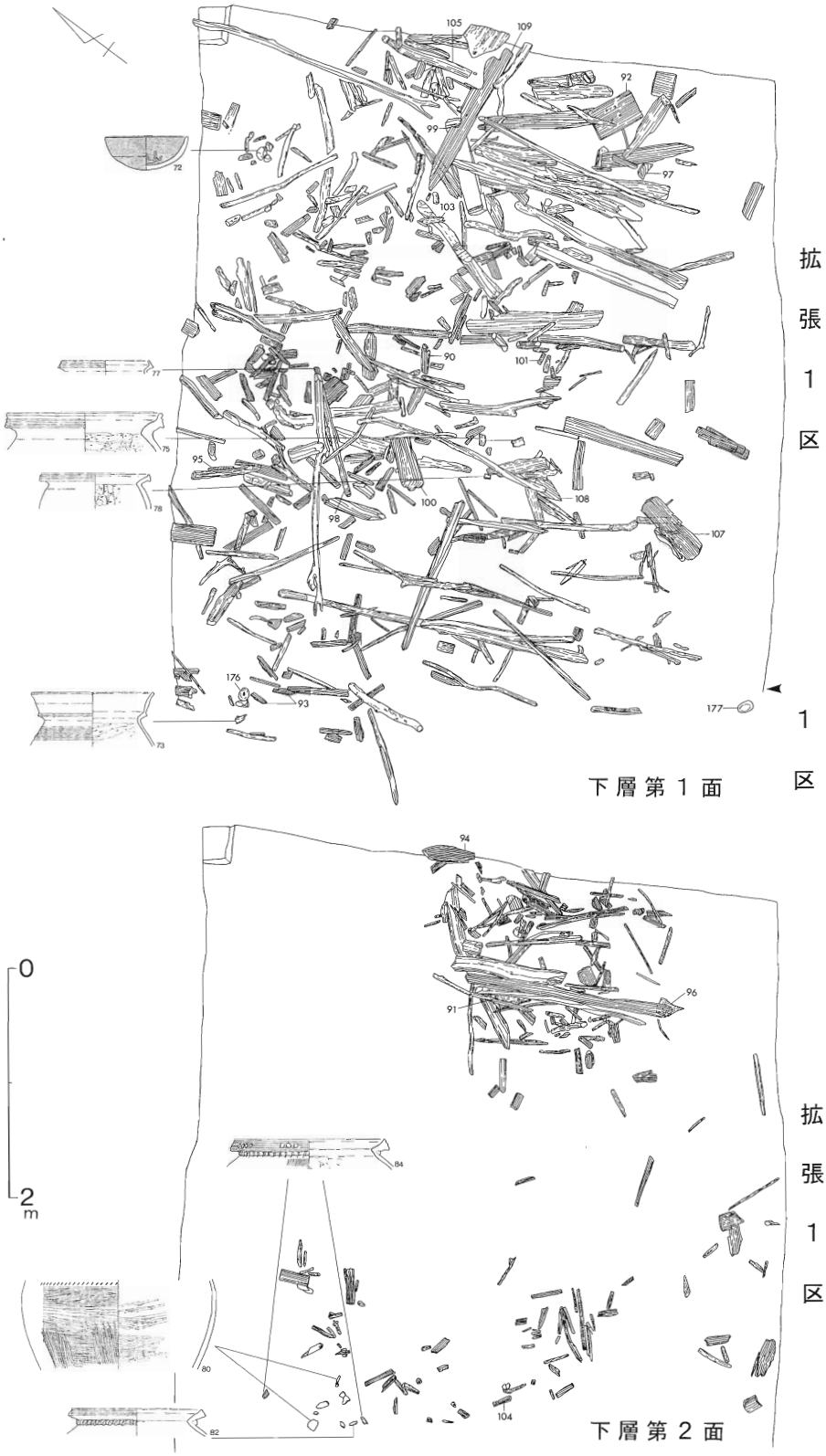


図34　拡張1区遺物出土状態（1/60）

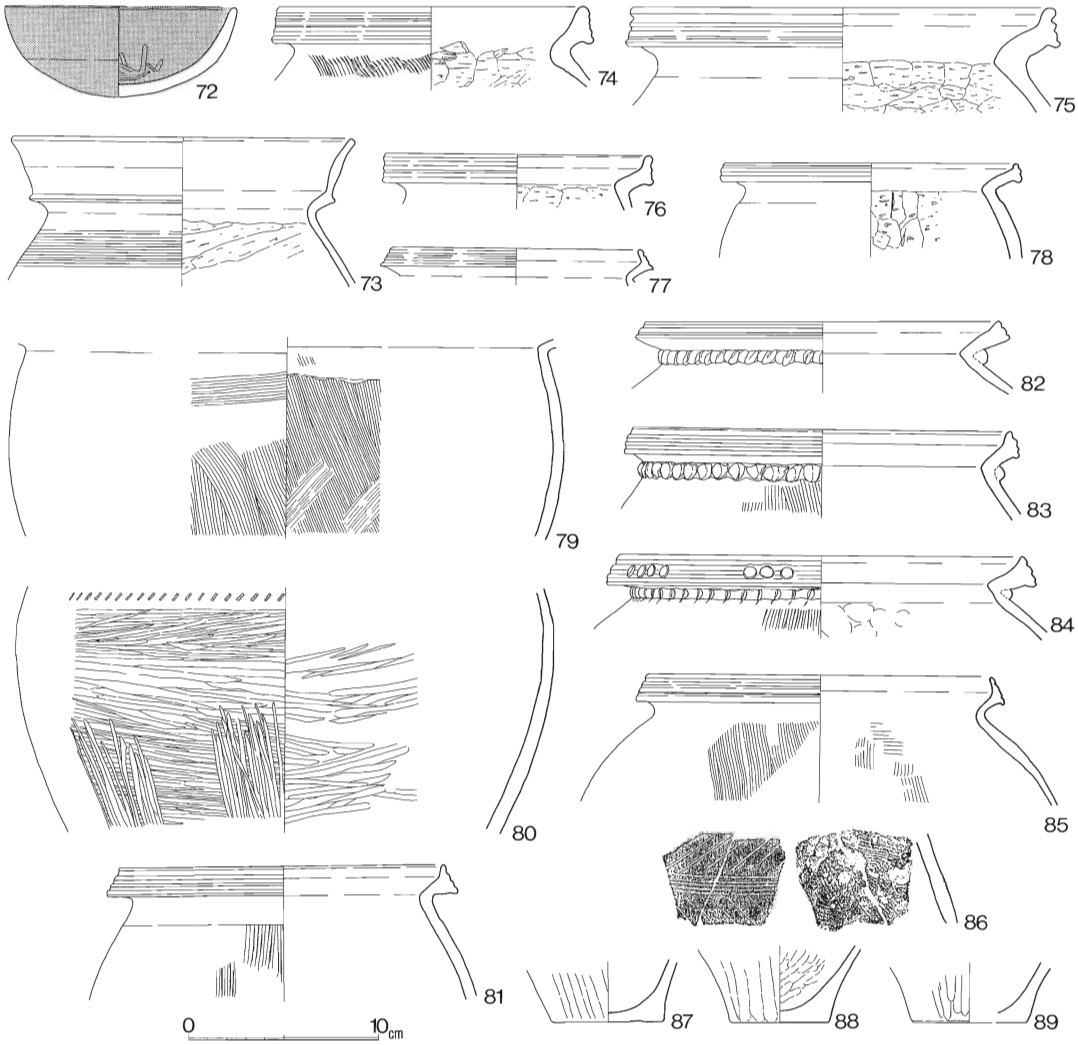


図35　拡張1区出土遺物（1）

れているが、座面裏側にわずかに刃物の傷がある。下方に伸びる台座部内側は前面が広く、後面に向かって狭くなっており、あたかもそうした形状のものに組み合わさるように作られている。また、単体では据らず、船の舳先ないし舳の両側舷に架けられた腰掛と考え、船材の一部として報告する。しかし、確証はなく、類例を待つべき遺物と考えられる。

100は浅い槽の一部で、破損後火を受けており、裏面から破断面にかけて炭化している。さしわたし60cmにもなる大形品である。101は、両端に小穿孔する小形の把手かと考えられる不明品。浮子の可能性もある。102はスギを材とする火鑽臼で、折損しているが、４個の火鑽孔をもち、１個所で発火した痕跡をとどめる。この孔は裏面まで貫通している。側面に火種を流す溝が認められないため、この面も破損している可能性がある。103は不明材だが、操作用の提緒孔をもつ

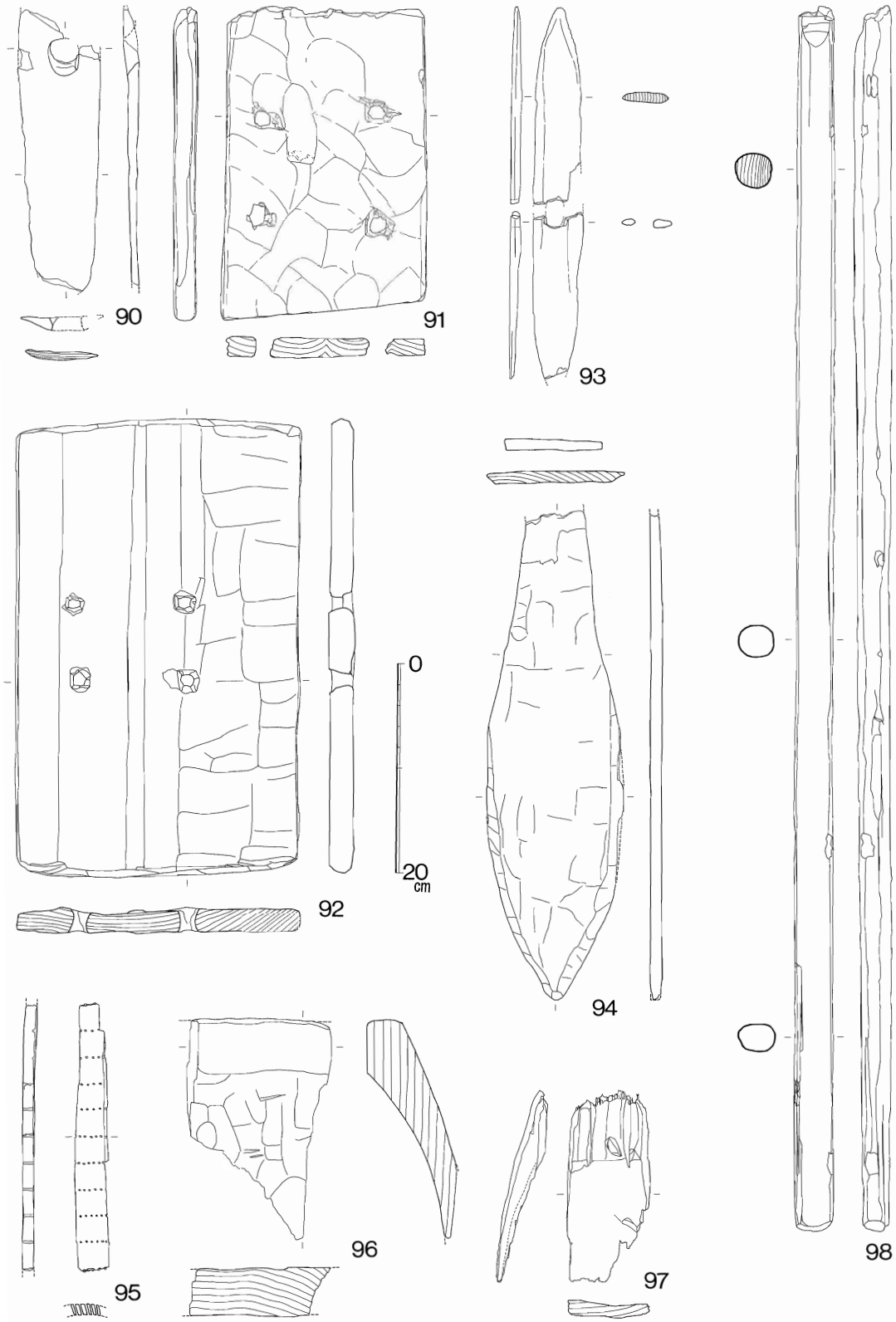


図36　拡張1区出土遺物（2）

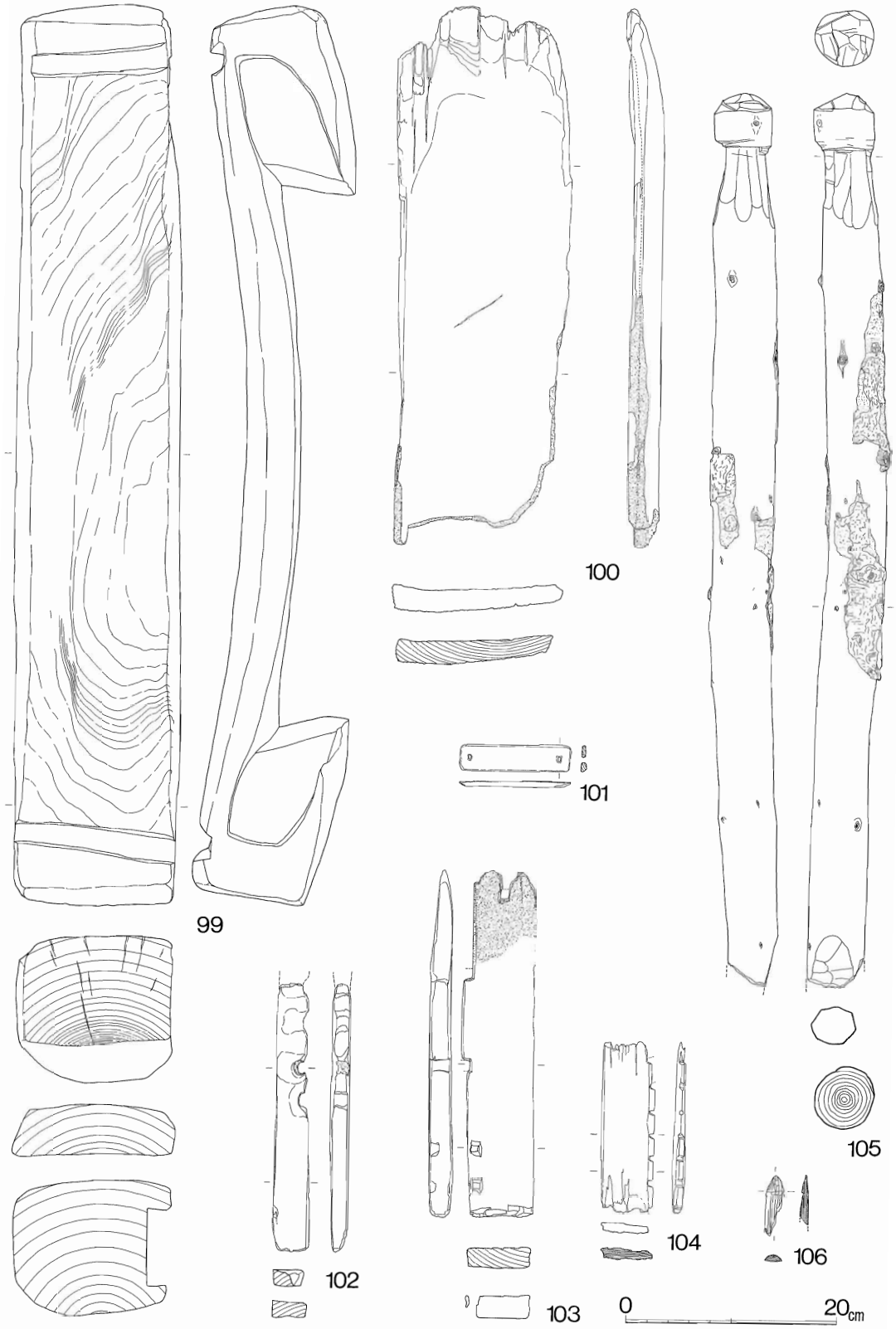


図37　拡張1区出土遺物（3）

田下駄折損品の可能性がある。折損後に火を受け、炭化している。もう一端は、粗い加工のままで、田下駄としては未製品と考えられる。104も不明材だが、片側に細かく刻みが施されており、なんらかのものを編んだ編台の目盛板の一部の可能性がある。刻みの幅は2.2～2.6cmである。表裏面とも剥離しており、本来はさらに厚さのあったものと考えられる。105は、小枝を払っただけの丸太材で根本側を加工して竿頭状にしている。もう一端の側にも加工がみえる。竿部には樹皮をとどめている。建築材か。106は剥離して裏面を欠く不明材であるが、男根状に細かく細工されている。107は樹皮を剥いだ外周面を一部に留めている不明材。長さは64cmあり、両側端中央部に２か所ずつ刳込みがある。この刳込みの配置と約10cmの孔間の距離は、田下駄の緒孔に似る。簡易型の田下駄か。108も不明材で、薄いスギの板目材を二等辺三角形状に加工し、頂点と底辺の計４か所に小穿孔している。

109は、厚さ３cm近いスギ板を加工した長さ約140cm、幅16cmの柾目材で、一端を尖らせ、段状の刳込みを２段設けている。もう１枚同様のものがあれば、先端の尖らせた部分を地面に打ち込み、段状の刳込みに板を架け渡して、梯子ないし棚状のものとなりうる。その際には段の刳込み角度からは、直立に近い使用法が考えられるが、現状では用途は不明というほかない。

石器では、磨製石包丁173、磨石176、177が出土している（図49）。

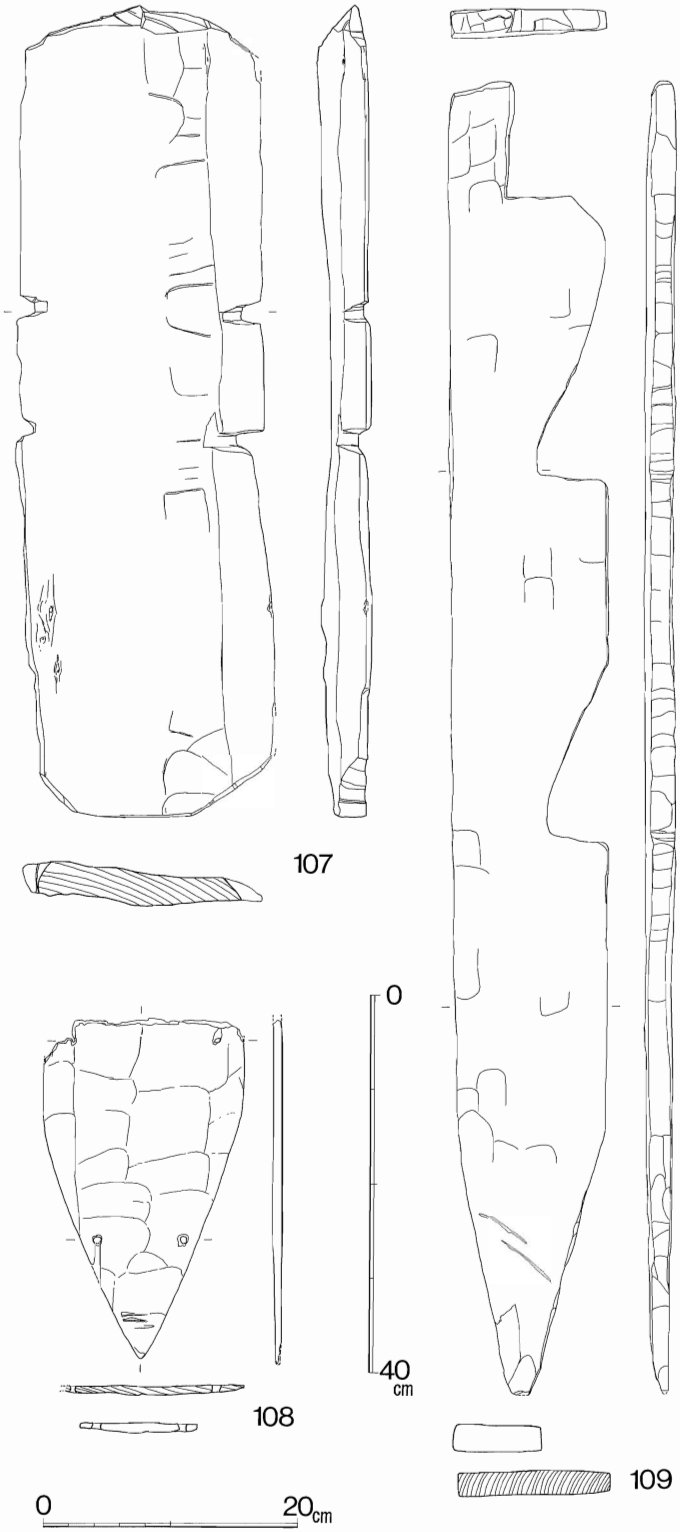


図38　拡張1区出土遺物（4　109のみ1/8）

図39　拡張2区第1面遺物出土状態（1/60）

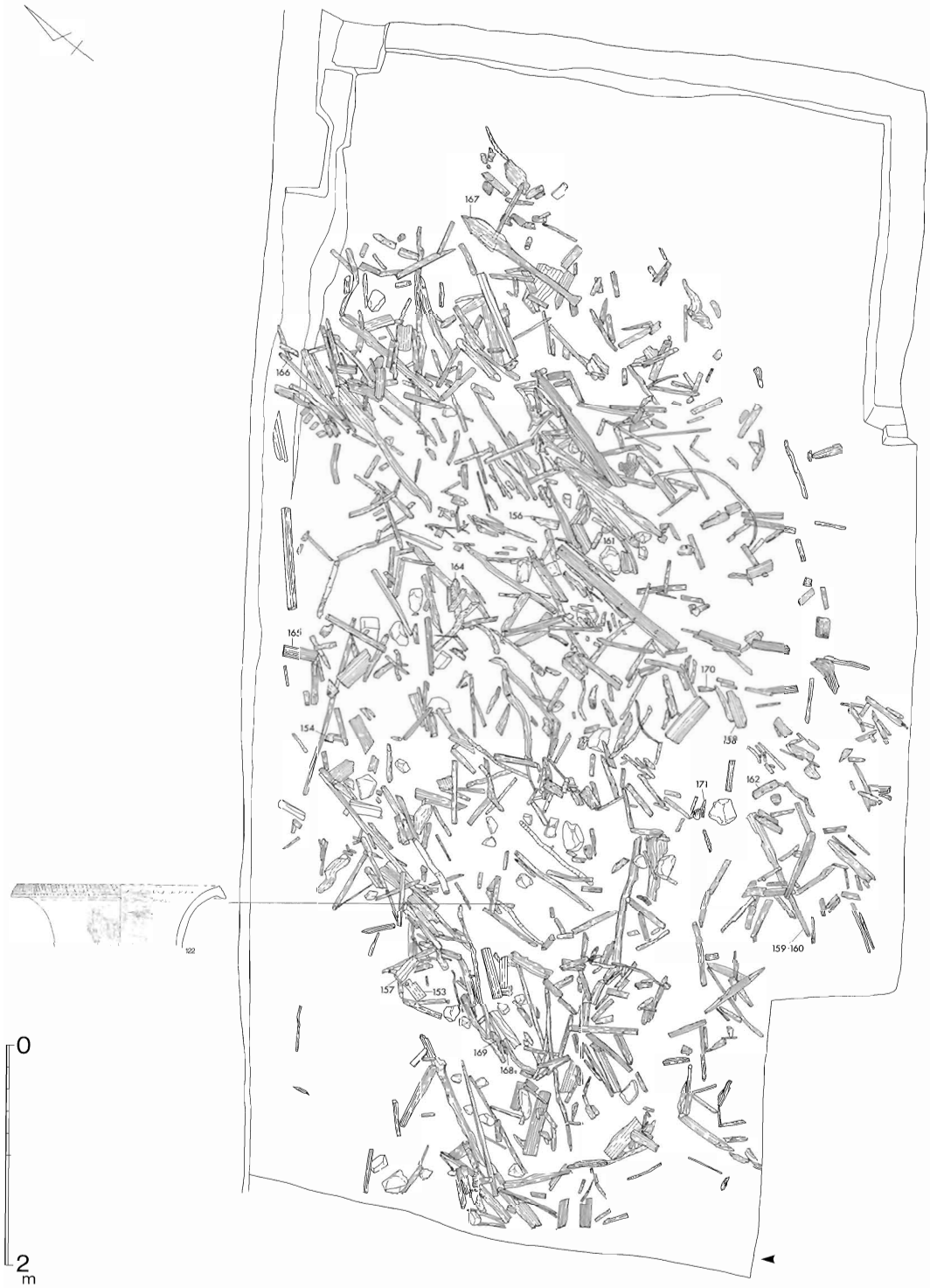


図40　拡張2区第2面遺物出土状態（1/60）

拡張２区第１面（図39）　拡張１区から東方に向かって木製品の包含が続く様子であったため、さらに拡張を行ない、拡張２区と呼んだ。結果、これまで以上の木製品の埋蔵が確認された。著しく重なっているため、２次にわたって取上げを行った。

木製品は長めのものを緩やかな斜面の傾斜に沿うように投棄したものが多く、結果として拡張２区南西の高所側から見ると放射状に配列したかのように見える。

検出した木材には加工材のほかに長めの原木、スギの幹、スギの枝ないし先端部があった。また、人頭大ないし一抱えもある石材もあわせて検出している。砂礫からなる基盤層にも調査区内では、これほどの大きさの石は含まれないことから、これも足掛かりや木材の固定用に意図的に投入したものと考えられる。

土器などの遺物はさほどの量はないが、この面では弥生後期の土器を中心に中期後葉の土器も得ている。

拡張２区第２面（図40）　木製品は著しく重なっているため、２次にわたって取上げを行った。大量の木製品の取上げを優先したため、厳密に層位的に作業したわけではないことをお断りしておきたい。ただ、第２面の遺物は、第１面の下位に所在したことは明らかなので、全体として見た場合、上面のものより古相を示すことは明らかである。ただ、上面に木製品が重なっていなかった場合、第２面で取り上げるべき木製品を第１面の作業において取り上げている可能性はある。

この面の木製品もやはり上面同様、斜面の傾斜に沿うように検出している。木製品そのものは、やや小形のものが多い印象である。第１面同様、足掛かりや木材の固定用に意図的に投入したと考えられる石材が引き続き出土した。土器は弥生中期のもののほか、弥生前期のものが１点出土している。

出土土器（図41）　調査区内からは弥生後期から弥生前期の遺物が出土している。110～117が第１面、118～123が第２面の木製品とともに取上げた遺物である。

第１面の遺物をみると、110は口縁外面に櫛状工具で擬凹線を引くもので、弥生後期中葉（Ｖ－３様式）。111、112は繰り上げた口縁部に凹線を施すもので、110より若干古手の様相をみせ、後期前葉（Ｖ－１様式）。杯内面を赤彩する高杯113は、111、112と同時期のものか。114、115は壷の頸部で、117とともに弥生中期に遡るものであろう。116は厚手の甕と考えられ、内面頸部以下が削り放しで、後期前葉（Ｖ－１様式）でとらえうる資料であろう。肩部に櫛状工具による刺突を連続させる文様と、沈線が１条残る。

以下は第２面出土の遺物である。甕118は、胴部最大径に施文するが、体部内面をヘラ削りしており、弥生中期後葉（Ⅳ－２様式）。施文は、ハケ原体を押し付けて２段に刺突する。甕119も頸肩部内面を削らず、同様の時期と考えられる。120は手づくねの小壷で、口縁端部に波状文を描く。121は頸部に凹線文を描く壷、122は口縁端をやや拡張し、端面に３条の凹線を施し、口縁内面に櫛状工具で波状文を描く壷である。これらは弥生中期後葉（Ⅳ様式）の遺物と考えられる。123は口縁下にヘラ描きの７条の沈線を描く弥生前期後葉（Ｉ－４様式）の遺物である。

これらの遺物は、量は少ないながら、他に挟雑物をもたず、下層木製品群を含む暗褐色有機土の時期を示すものと考えられる。同層は、拡張１区での出土土器も考慮すると、弥生時代前

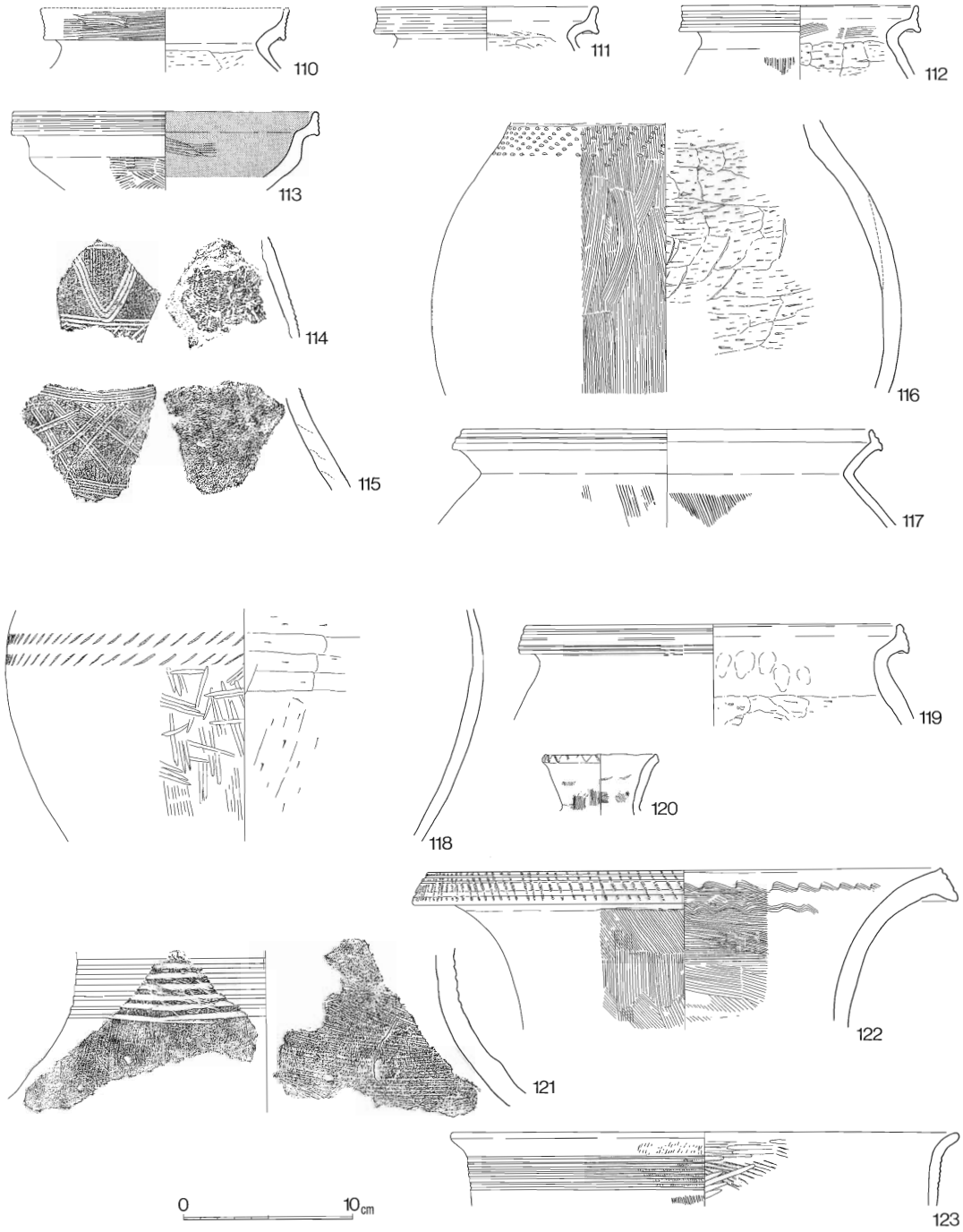


図41　拡張2区出土土器

期後葉から弥生時代後期末にかけて形成されたことが推測できる。さらに、暗褐色有機土が一定の厚みをもち、木製品をそれぞれ２次に分けて取り上げた拡張１区、拡張２区で、出土木製品の廃棄の時期を考えると、第１面が、弥生後期前半から後期末にかけて、第２面が弥生中期後葉を中心とする時期にそれぞれ相当するものと考えられる。

第１面出土木製品（図42～46）　124は、鍬と柄で、鍬の身が柄に装着された状態で泥炭層に突き立てられていた。柄は、その後泥炭層が上面に堆積した土砂の重量によって圧縮される過程で折れ曲がった状態で出土した。直柄平鍬とも考えられるが、鍬身上端に穿孔があり、柄と鈍角で接合する状態で出土したことから、この身は泥除の可能性が高い。鍬身本体は失われた状態で泥炭層に突き立てられたものと考えられる。

125は刃部をもたず、泥除であろう。126は組合せの鋤かと考えられるが、あまり見かけない楕円形の身をもつ。身には図化面にのみ刃物の傷がある。断面半円形に加工された、やや長い軸の上端に柄と結合するための紐かけと考えられる部分がある。127、128もやはり組合わせの鋤であろう。127は明瞭な肩をもち、128は楕円形の身をもつ。ともに薄い作りである。129は角のない平面形をもつ田下駄である。折損しているが、約１m離れた地点にあったものが接合した。130、131も田下駄である。131は縦長のもので、操作用の提緒孔が両短辺側にある。長辺に沿っては溝が１条刳られている。いずれも４孔式のもので、うち１孔がわずかに偏する位置にある。

132は大形の加工板で、長さ約150cm、幅約23cm、厚さ約２cmのものである。いわゆる田舟の側板のように見え、下縁に長方形のホゾ孔が４か所開けられており、これらの孔に沿うように溝が刳られている。また前端には円形の孔が３つある。全面に手斧による加工痕をとどめ、後端はさらにほかの材を受けるかのように手斧によって削り込まれたゆるやかな段が作り出されている。前端部は切断面が整えられておらず、未製品か。

133、134は船材ないし槽の破片と考えられるもので、手斧による加工痕をとどめる。木取りからは槽の可能性が高い。槽とすれば相当の大形品である。135はモミ属のカイであろうか。柄の部分を欠く。粗割段階の凹凸が整えられておらず、これも未製品の可能性がある。136は容器の未製品と思われるもので、節の多い芯持材から刳抜きを始めたものの、なんらかの理由で断念したもの。137も槽の破片であろう。138は、スギの柾目材を加工した容器未製品と考えられるが、面取をするなど、細工が細かく、ヤリガンナと考えられる工具による加工痕を残している。容器としての製作を断念した後の加工も認められる。139は刳物桶底板の折損品か。140、141も槽の破片であろう。140は破損後、火を受けている。ただし、141は丸太の外周面を残す。どのような形になるか不明である。142～144は刳物桶の破損品である。いずれもミカン割にした原木から刳り抜かれ、内面下端近くに底板を受ける帯状の突起が刳り残されている。この面からのみ出土している。142は目の細かいスギ材を使い、他のものに較べて丁寧な作りである。桶としても深い。143、144はネズコ属を材とする。145は広葉樹の板で、鍬などの身を今後何個体か作り出すための原材であろう。長さ74cm、幅33cmあるが、最大厚３cmと薄く、高い隆起をもつ鍬などは作れない。１区出土の66同様、低湿地に加工まで貯留しておいたものかもしれない。146は、ミカン割にしたハコヤナギ属の材を手斧で全面に加工したもので、これも未製品か。

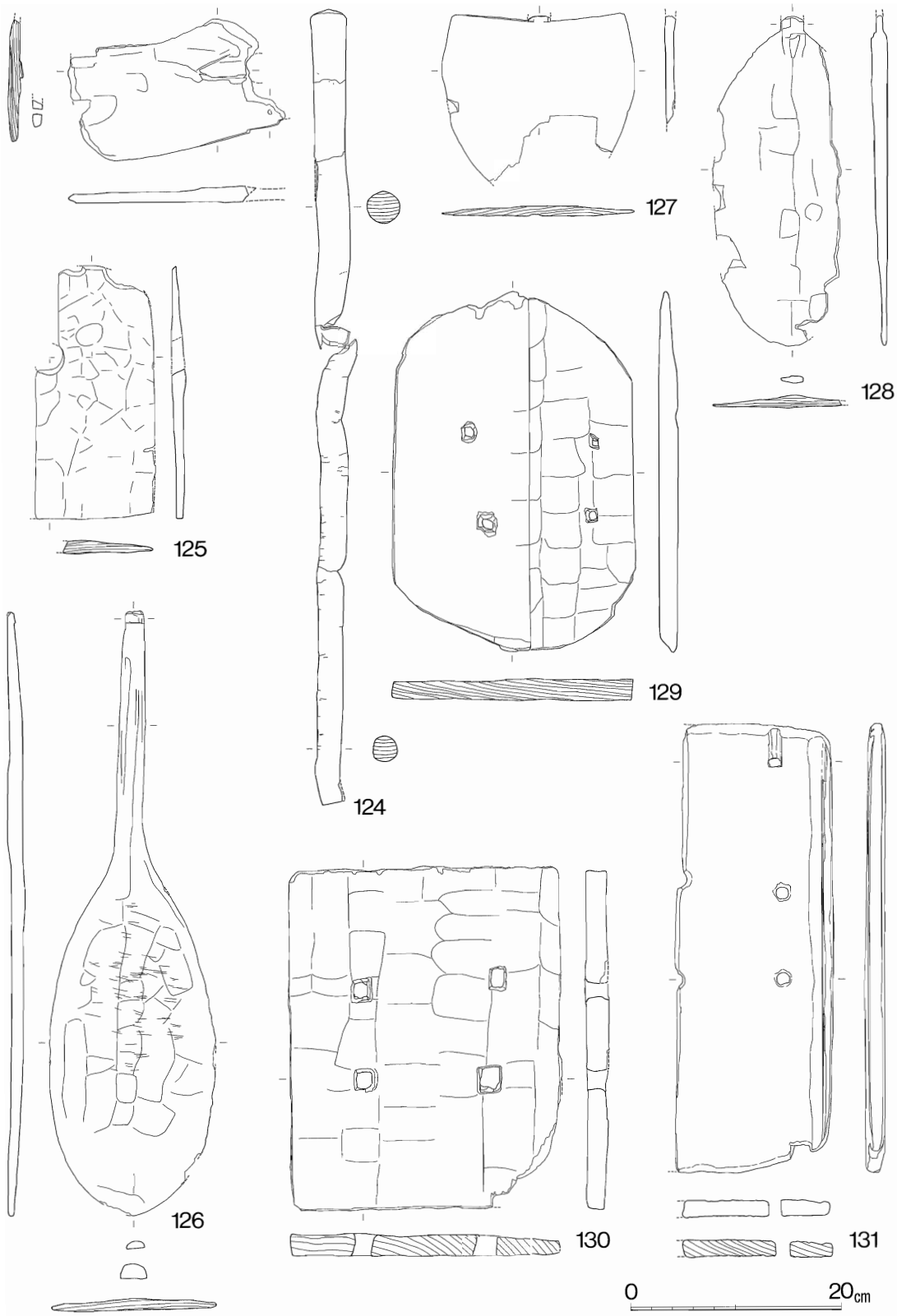


図42　拡張2区第1面出土木製品（1）

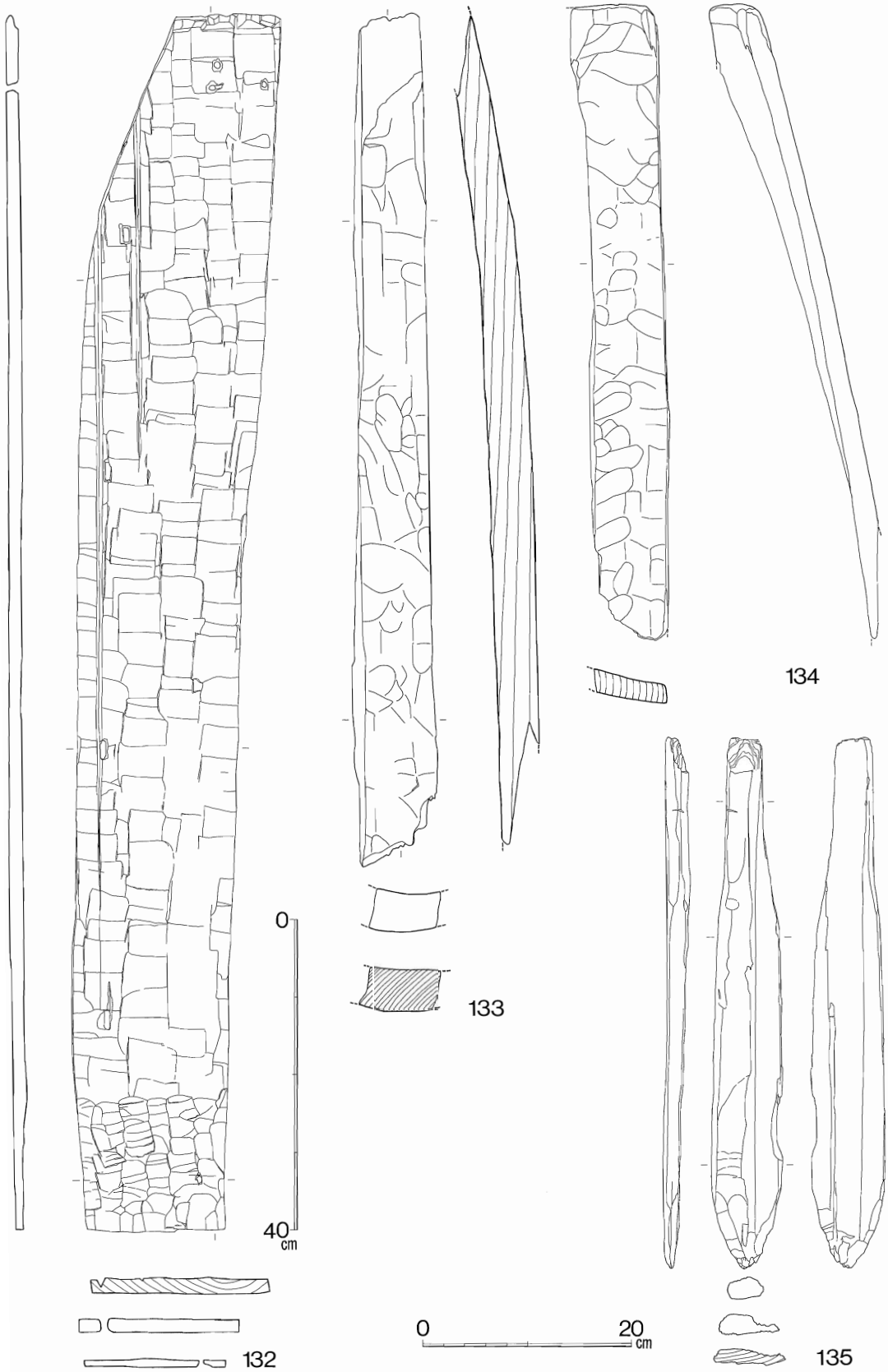


図43　拡張2区第1面出土木製品（2　132のみ1/8）

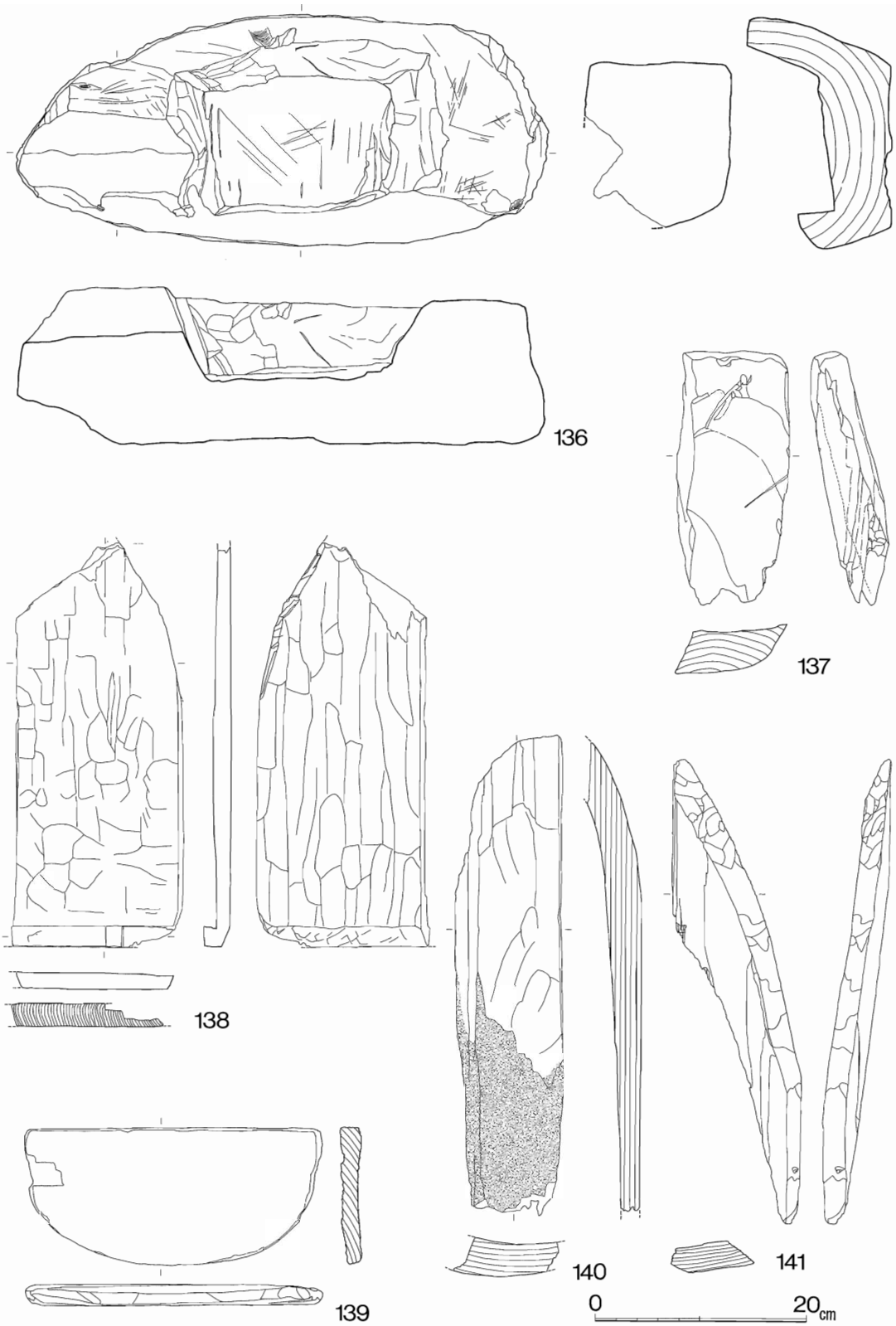


図44　拡張2区第1面出土木製品（3）

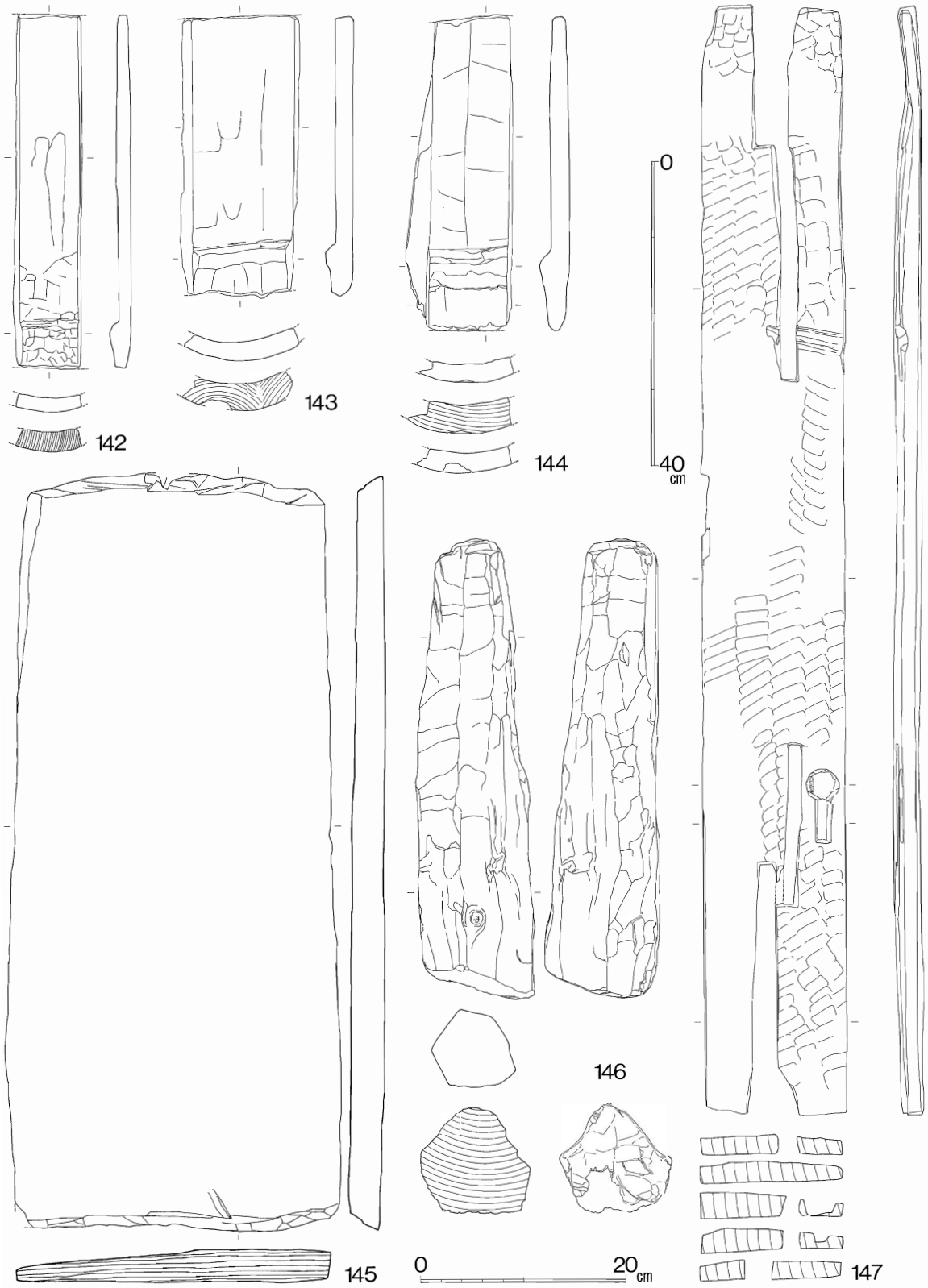


図45　拡張2区第1面出土木製品（4　147のみ1/8）

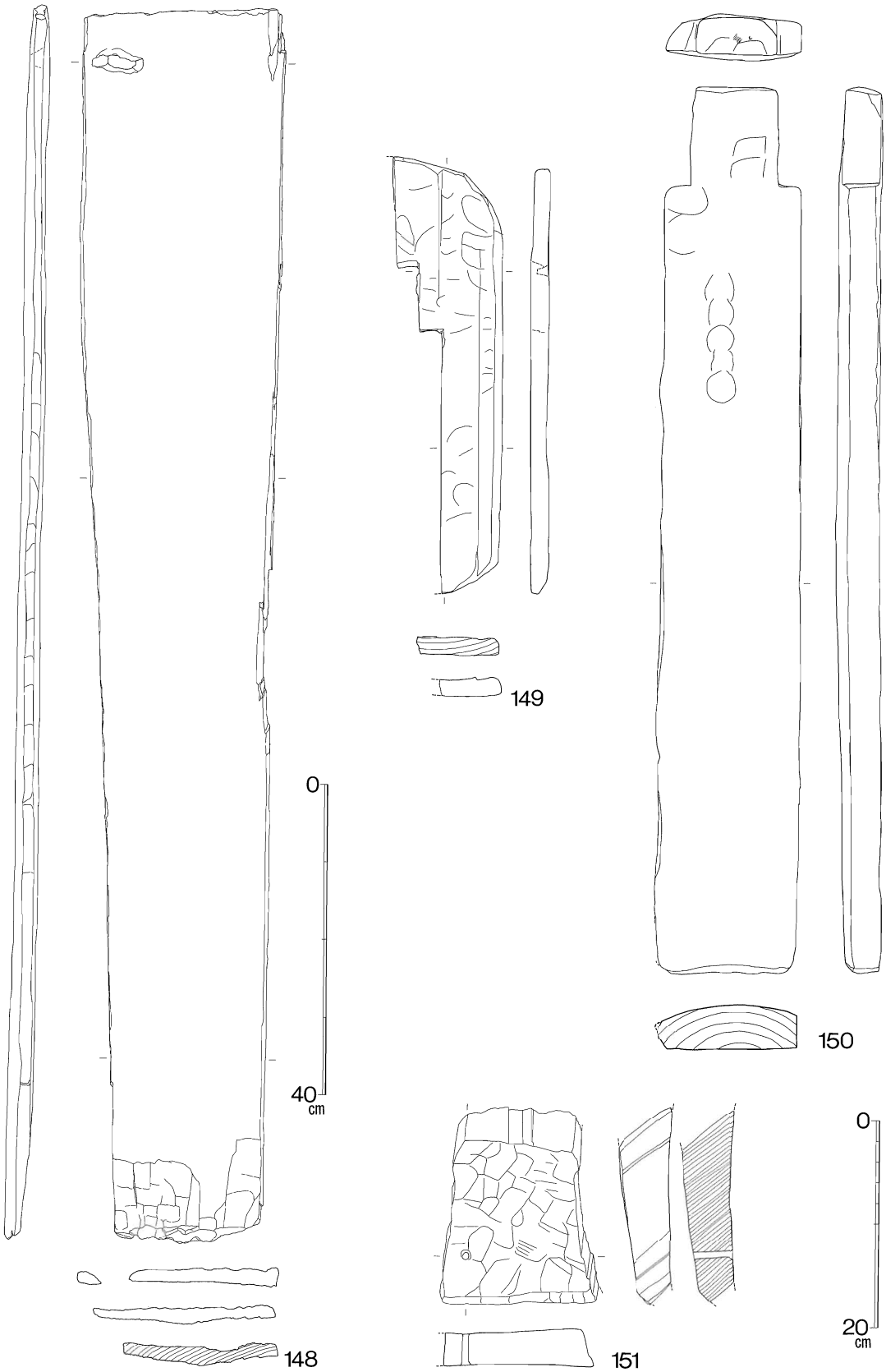


図46　拡張2区第1面出土木製品（5　148のみ1/8）

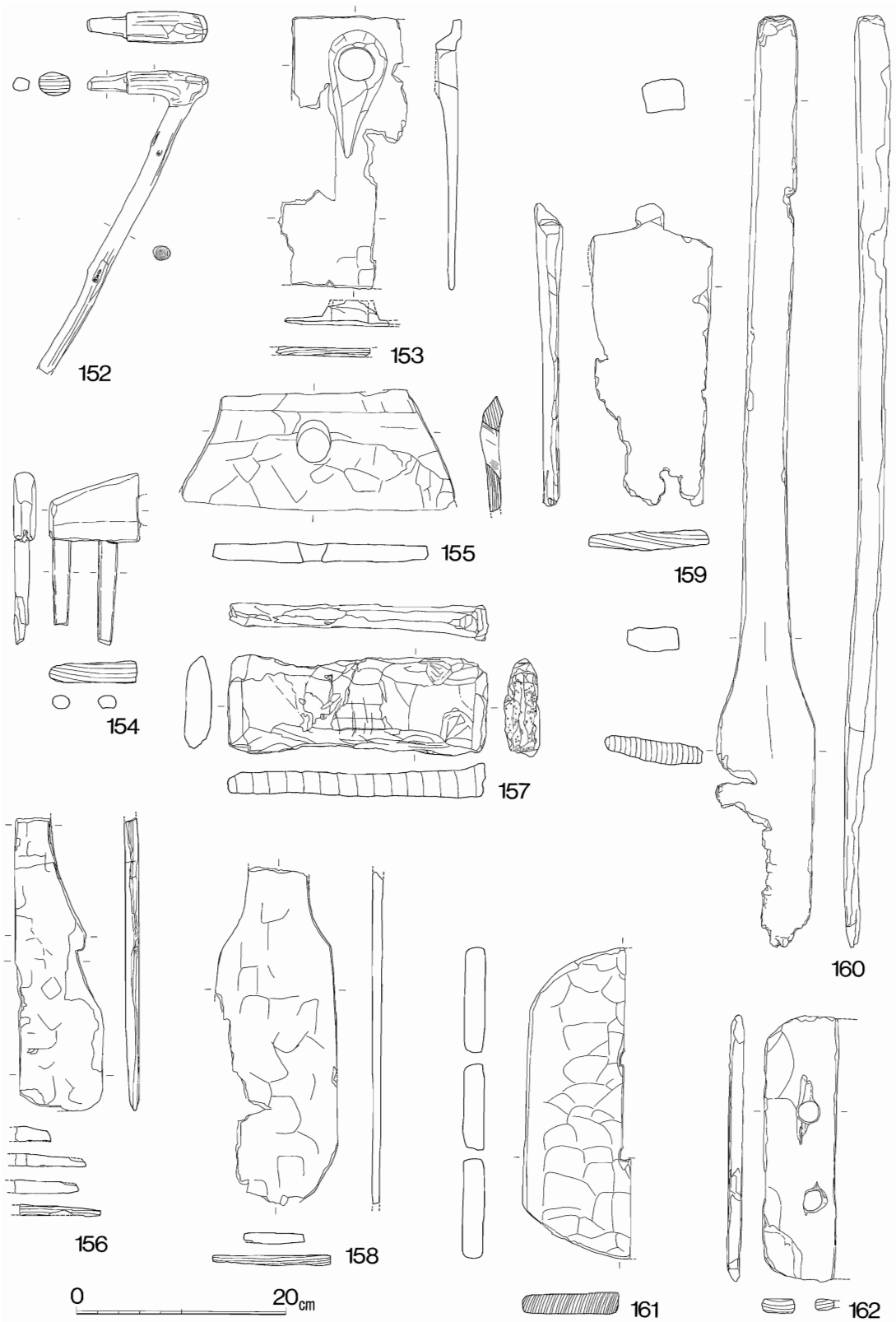


図47　拡張2区第2面出土木製品（1）

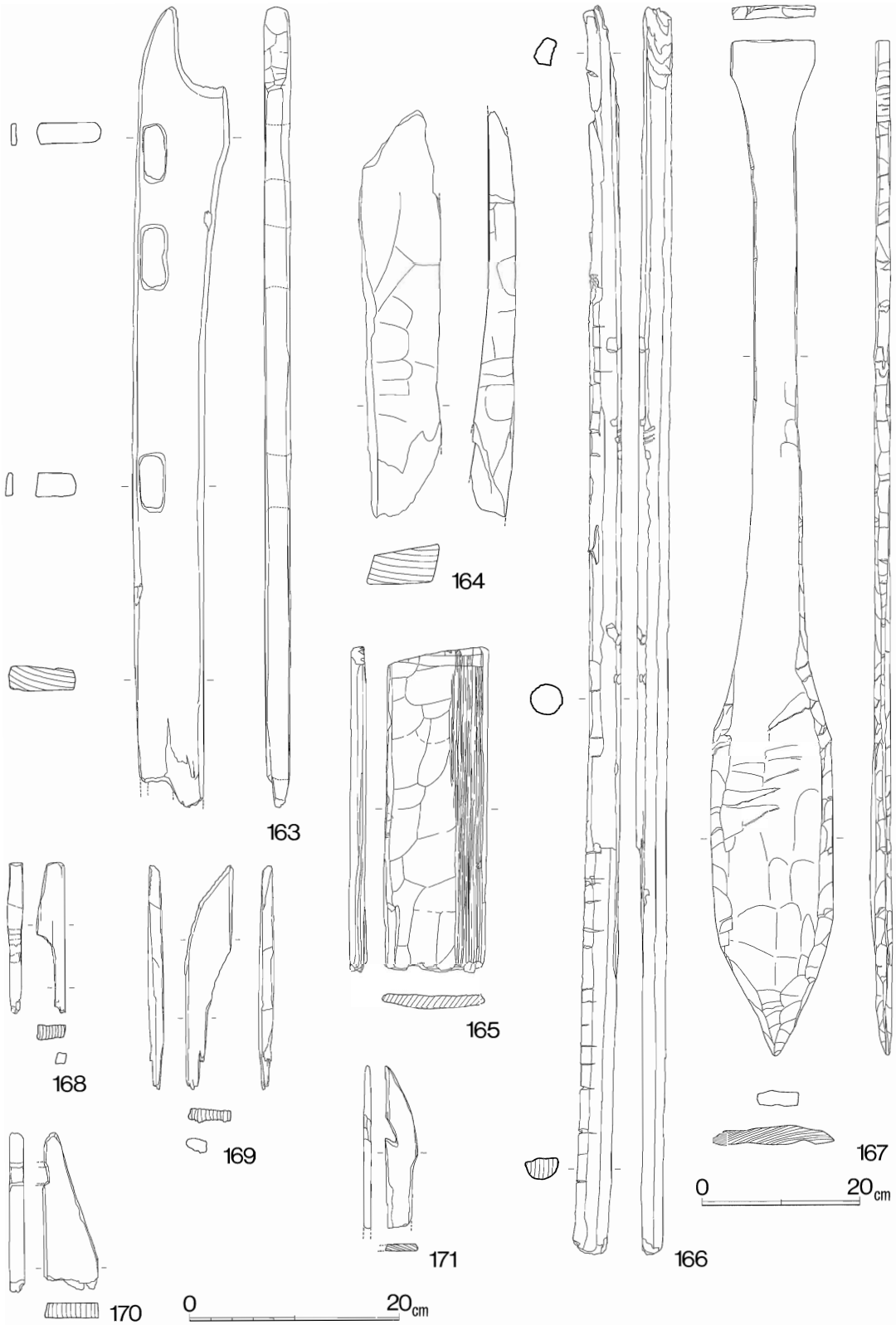


図48　拡張2区第2面出土木製品（2　167のみ1/8）

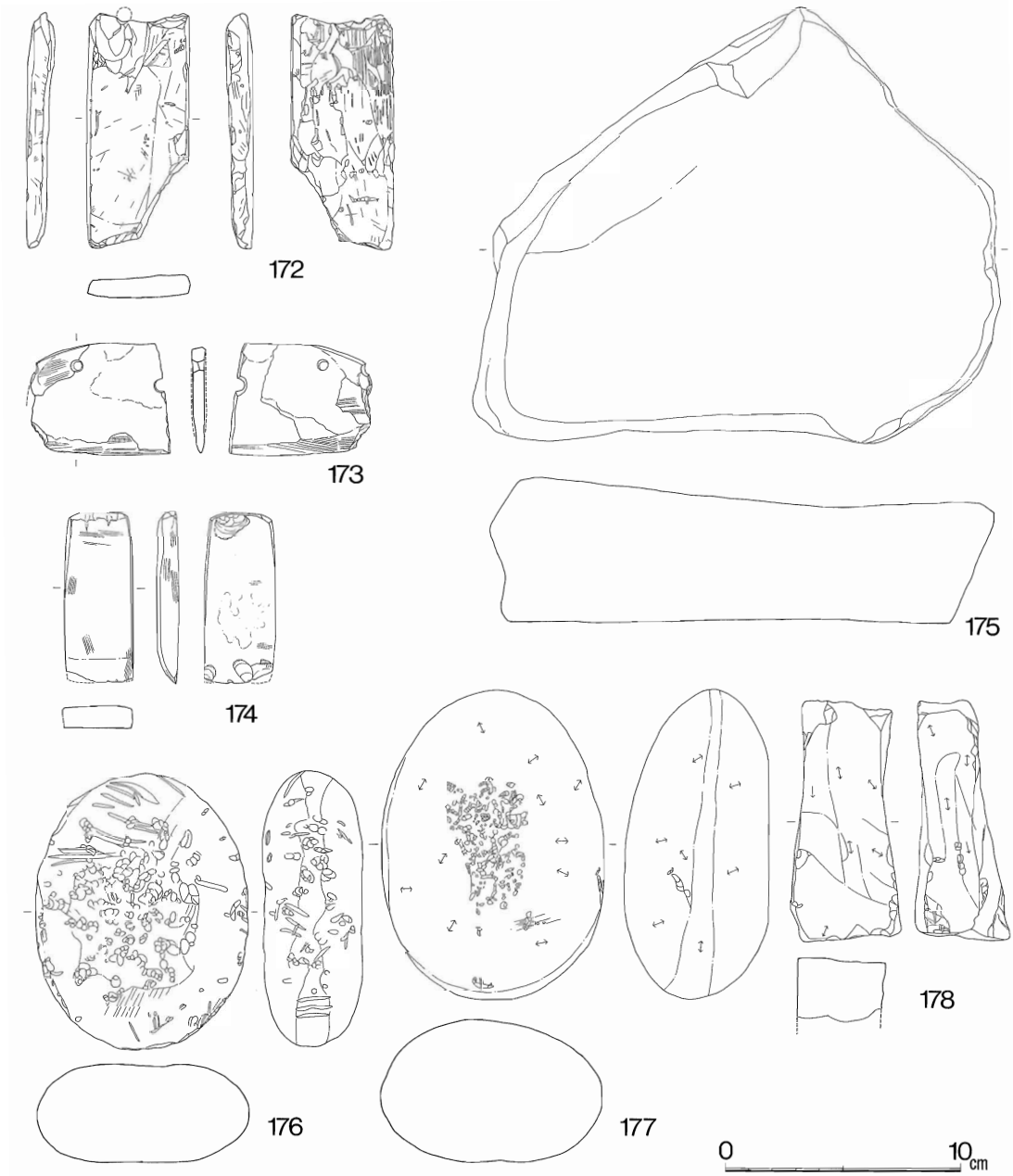


図49　出土石器実測図（1/3）

147はスギの柾目の一枚板で、全面に手斧痕をとどめる。扉を構成する材と考えられ、片開きの扉軸受孔がある。軸受孔は貫通しない浅いものなので、この材は扉の下部の蹴放しと考えられる。また、壁板が嵌め込まれていたと考えられる溝がある。扉の下に相当する部分には、加工時の手斧痕が残っており、未製品ないし長期にわたっては使われなかった部材と考えられる。いずれにせよこのような扉をもつ建物が付近に存在したことは、注目に値する。

148も大形のヒノキ科ネズコ属の板目板であるが、不明品である。長さ約160cm、幅25cmを測

る。一方の端部に不整形な穿孔が１つある。149～151は不明材である。150は広葉樹を材とするもの。151は針葉樹小口を輪切りにしたようなもので、穿孔が１つある。

第２面出土木製品（図47、48）　152は斧の膝柄である。小形で、袋状鉄斧を横に受けるソケットが作り出されており、手斧の柄であろう。柄の端部を欠く。153は舟状の隆起が刳り残された直柄平鍬で、裏面には泥除を受けるための段が刳り残される。154は直柄又鍬の身で、５本の爪が復元できる。柄孔は方形のものと考えられる。柄とはほぼ直角に結合する。155は直柄横鍬の身とも考えられるが、刃部を欠き、泥除の可能性もある。156は曲柄平鍬の身で、ナスビ形の笠部をもつ。157は鍬の原材と考えられる。ミカン割にしたアカガシ亜属の材を大まかに加工しただけのもので、一端には樹皮をとどめる。木取りからは横鍬の未製品かと考えられる。158～160は鋤で、158、159は組合せの鋤かと考えられるものである。158は全体に薄い。160は一木鋤で、ほぼ全形が知れる。161、162は田下駄折損品である。いずれも４孔のものと考えられる。161はスギの柾目材で、端部など平滑に仕上げられる。162はネズコ属を材とする。163は櫂と考えられ、残存長76cmを測る。同様のものと一対にして横桟を渡し、重量物の運搬に使われたものと考えられる。164は槽の破損品、165は浅い槽の未製品と考えられるスギ柾目材である。短辺の一端は緩やかな弧状に加工され、もう一端は粗く切断されたままで未製品と考えられる。加工された短部側には鋭利な工具による罫書き線が２条残る。166は天秤棒、167は一木作りのカイで、粗割時の荒れた面を残し、各部に加工痕をとどめる上、柄も角柱状のままで、これも未製品と考えられる。168～171は、何かの小形の部品と考えられるがいずれも不明品である。170は針葉樹柾目材である。

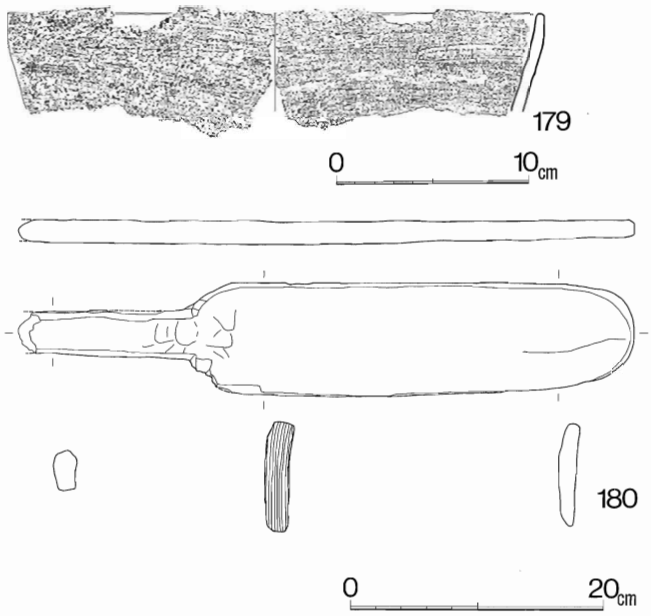


図50　最下層出土遺物

出土石製品（図50）　172は提砥と考えられ、４面を砥面として使っている。上端は提緒孔付近から折れている。３区出土。173は黒色頁岩製と考えられる磨製石包丁の折損したもの、拡張１区出土。174は木目の細かい白色の石材の磨製片刃石斧である。２区出土。175は大形の砥石。２区出土。176、177は円礫を転用した磨石。ともに拡張１区出土。178は３面に使用面を留める砥石である。３区の出土である。

最下層出土遺物　下層木製品群の調査後、基盤層を断ち割ってさらに下層の調査も行った。わずかに遺物が出土している。179は条痕をとどめる深鉢で、特徴に欠けるが、他遺跡の類例を参照すれば縄文晩期前半の粗製土器と考えられる。180はカイ状の木製品で、柄は一部しか残存していない。

4．出土木製品樹種一覧

No.	名称	取上No.	樹種
上層木製品群			
1	田下駄	221~242	
3	田下駄	番外	
4	把手	73	スギ科スギ
5	不明材	番外	スギ科スギ
下層木製品群			
1～3区			
61	船材	251・252	スギ科スギ
62	平鍬	378	
63	槽	395	
64	不明材	208	
65	船材か	169	
66	鍬材	番外	ブナ科アカガシ亜属
67	田下駄	170	スギ科スギ
68	不明材	179	ブナ科アカガシ亜属
69	把手	番外	スギ科スギ
70	不明材	番外	スギ科スギ
71	盾	番外	マツ科モミ属
拡張1区			
90	狭鍬	566	
91	田下駄	690	
92	田下駄	574	
93	不明材	513	スギ科スギ
94	カイ	681	
95	盾	529	
96	槽	719	
97	槽	636	スギ科スギ
98	天秤棒	534	
99	腰掛	609	ヤマグワ
100	槽	547	スギ科スギ
101	不明材	625	スギ科スギ
102	火鑽臼	番外	スギ科スギ
103	田下駄	567	スギ科スギ
104	不明材	664	スギ科スギ
105	建築材	586	
106	不明材	番外	
107	不明材	470	
108	不明材	502	スギ科スギ
109	不明材	569	
拡張2区第1面			
124	鍬柄・身	1212	
125	泥除	958	
126	鋤	1013	
127	鋤	967	ブナ科アカガシ亜属
128	鋤	757	ブナ科アカガシ亜属
129	田下駄	906・918	
130	田下駄	829	
131	田下駄	736	スギ科スギ
132	不明材	866	
133	槽	882	
134	槽	900	
135	カイ	791	マツ科モミ属
136	容器	845	
137	槽	775	スギ科スギ
138	容器	885	
139	桶底	860	スギ科スギ
140	槽	912	
141	槽	801	スギ科スギ
142	刳物桶	756	スギ科スギ
143	刳物桶	843	ヒノキ科ネズコ属
144	刳物桶	996	ヒノキ科ネズコ属
145	鍬材	1012-1	
146	不明材	1175	ヤナギ科ハコヤナギ属
147	扉材	753	
148	不明材	778	ヒノキ科ネズコ属
149	不明材	794	スギ科スギ
150	不明材	863	
151	不明材	781	
拡張2区第2面			
152	手斧柄	1706	
153	平鍬	1444	ブナ科アカガシ亜属
154	又鍬	1425	ブナ科アカガシ亜属
155	横鍬	1704	
156	平鍬	1328	
157	鍬原材	1442	ブナ科アカガシ亜属
158	鋤	1306	ブナ科アカガシ亜属
159	鋤	1637	ブナ科アカガシ亜属
160	一本鋤	1637-2	ブナ科アカガシ亜属
161	田下駄	1326	
162	田下駄	1570	ヒノキ科ネズコ属
163	櫂	1667	スギ科スギ
164	槽	1380	
165	槽	1413	スギ科スギ
166	天秤棒	1432	
167	カイ	1223	
168	不明材	1491	スギ科スギ
169	不明材	1491	スギ科スギ
170	不明材	1303	
171	不明材	1564	

V．出土木材の年輪年代

奈良文化財研究所
光　谷　拓　実

1．はじめに

稗田遺跡の発掘調査では、弥生時代の木製品が大量に出土した。その多くは建築材や農耕具などである。木製品群は、上層と下層の２層から出土した。今回、スギの木製品のなかから年輪が約100層以上あると思われるものを４点選び出し、年輪年代法による年代測定をおこなった。以下にその概略を報告する。

2．試料と方法

年代測定用に選んだ木製品は、No.１：容器の断片、No.２：田下駄、No.３：板材、No.４：扉材の断片総数４点である。年輪幅の計測は、専用の年代読取器（0.01ミリまで計測）を使用した。年代を割り出す際に用いたスギの暦年標準パターンは、鳥取県青谷上寺地遺跡出土のスギ材で作成したもの（紀元前496年～紀元後141年）を使用した。この暦年標準パターン以外に滋賀県下で出土したスギ材で作成した暦年標準パターン（紀元前651年～紀元後199年）も用いることとした。両方の年輪パターンには高い相関関係のあることを確認している（ｔ値＝12.7）。コンピュータによる年輪パターンの照合は相関分析手法によった。

3．結果

４点の計測年輪層数は、No.１が156層、No.２が101層、No.３が95層、No.４が104層であった。いずれの年輪層数も、結果はそう多くない。まず、地域的に近い鳥取県の青谷上寺地遺跡出土木材で作成した637年分の暦年標準パターンとの照合を個別におこなった。４点のうち３点が高い類似度（ｔ値）で成立した。さらに、この３点は滋賀県下の遺跡出土木材で作成した暦年標準パターンとも同じ年代位置で照合が成立した。それぞれの年輪年代（残存最外年輪測定年代）はNo.１－紀元前132年、No.２－紀元前120年、No.３－紀元前65年と確定した。これら３点の木製品には、心材部につづく辺材部がすでに失われたものばかりであるから、原木の伐採年は年輪年代をもって上限とすることができる。

表１　稗田遺跡出土木材の年輪年代測定結果

番号	調査区	図面No.	部材名	樹種	年輪数	ｔ値	年輪年代	形　状
1	拡張２区第１面	138	容器未製品	スギ	156	7.4	132B.C.	心材型
2	拡張２区第２面	161	田下駄	スギ	101	5.2	120B.C.	心材型
3	拡張２区第２面	未掲	板材	スギ	95	8.6	65B.C.	心材型
4	拡張２区第１面	147	扉材	スギ	104	4.2	127A.D.	辺材型（3.8cm）

No.４については、青谷上寺地遺跡の出土木材で作成した暦年標準パターンとは照合が成立しなかった。そこで、滋賀県下の出土木材で作成した850年分の暦年標準パターンと照合したところ、ｔ値は4.2とやや低い（ヨーロッパの照合基準では、ｔ値≧3.5になれば２つの年輪パターンデータのあいだに相関関係がある、とみなすのが一般的である。このときの危険率は0.1％である。）ものの、この年代位置で照合が成立している可能性が考えられるので、ここではあくまでも参考年代としてあげておく。今後、青谷上寺地遺跡の出土の木材で作成した暦年標準パターンの後端部（紀元後）を複数の年輪データで補充していくことができれば、No.４の年輪パターンに正確な実年代を確定することは可能と思われる。

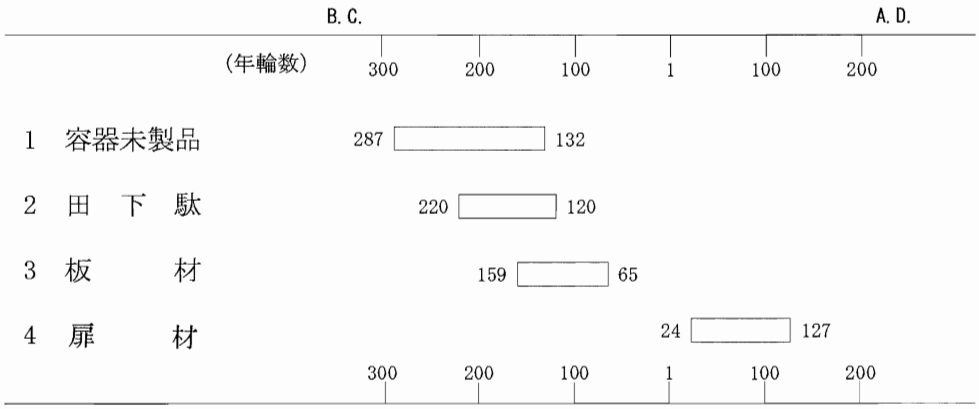


図51　稗田遺跡出土木材の年輪年代測定結果

Ⅵ. 小　　結

１．下谷遺跡

Ａ区で検出した２棟の建物は、ともに小規模なもので、さほど長期間定住したようではなかった。床面出土の土器から、古代のものと考えられる。

Ｂ区で検出した建物ＳＢ０３は、伴う土師質土器から中世の住居であった。隣接するＳＢ０４、０５とあわせ、これら３棟の建物は、覆土の状況が酷似しており、母屋と納屋あるいは家畜小屋など、同時に営まれた家屋と考えられ、眼下の平地を耕作する小規模な農家の姿を推察することも可能である。今後の類例を待ちたい。

遺跡の前面の景観を考えると、北約100ｍの試掘調査区Ｇ35、36[1)]では、地表下約２ｍの砂の下から陶磁器を含む粘質土が検出されており、中近世に砂丘が著しく発達したことがうかがえる。古浦砂丘遺跡でも弥生時代のクロスナ層はもとより、古代の遺物を包含するクロスナ層がある砂丘面は、厚い白砂下に埋没しており、古代以降、砂丘が発達したことを確認している。それは山陰海岸では一般的な傾向[9)]のようである。また、砂丘の発達は、気候の冷涼化とも密接に関係しているという。先年実施した古浦地区での下水道管の埋設に伴う[10)]立会調査においても、中近世に対応すると考えられる厚い白砂層を認めており、古代までの遺跡が立地する古い砂丘面は、現在の砂丘に較べると非常に小さいものであったとの印象であった。

標高約12～14ｍに位置する下谷遺跡の住居よりも低位に位置したと考えられる当時の水田など耕作地面は、遺跡眼下の砂地下層に埋没していることが考えられる。

集落もこうした気候の変化に伴う環境の変遷にあわせ、その位置を移動しているものと考えられる。

２．稗田遺跡

遺跡では、下層木製品群の弥生時代中・後期には調査地点付近は水田ではなく、歩行の困難な低湿地であったと考えられるが、上層木製品群層である古墳時代後期にはこの地点は水田となっていた。この間に可耕地が拡大したことを如実に確認できたこととなる。

また、数多く出土した木製品は未製品の比率が非常に高く、背後に存在が予測される当時の集落では活発な木器製作が行われていたことを推測させる。この集落は付近一帯の拠点であったことも考えられる。

北講武氏元遺跡での弥生時代前期層での花粉分析結果[11)]は、スギの植生としての卓越が認められており、稗田遺跡でも出土木製品の状況をみると若干時期は下るものの、同様の傾向が指摘できる。一方、スギ材の耐水、耐腐食性は、調査で木製品を取り上げる際に、われわれがしばしば経験するところである。こうした木の性質が当時も認識されていれば、低湿地の足掛りとして選択的にスギ材が投入されている可能性も考慮される。

また、しばしば認められる木製の祭祀具が、この遺跡では注意されず、こうした木製品は別途廃棄されている可能性も考えられた。

今次の調査では、年輪年代測定が可能な材の出土があった。これら供試材と出土土器の対応は、不十分ながら、その関係を予想させるものと考えられる。紀元前の年代（B.C.132～B.C.65）を示す木製品３点のうち２点は、拡張２区第２面にある。いずれも心材型の試料で、年代は伐採の上限を示すにとどまるが、今後こうした試料が蓄積されることによって、遺物の年代観を特定しうるものと考える。第２面の木製品に伴う土器は、状況から弥生Ⅳ様式である蓋然性が高い（図52）。なお、B.C.132年を示す容器未製品138は、第１面で取り上げているが、上面に後からの木製品が被っていなかったため、本来、第２面で取り上げるべきものを第１面で回収したものと考えられる。

一方、参考値として紀元後の年代（A.D.127）を示す可能性がある扉蹴放し板147は、白太部を残す辺材型のものであった。この材は、拡張２区第１面の木製品でも最上位、層中でも最上

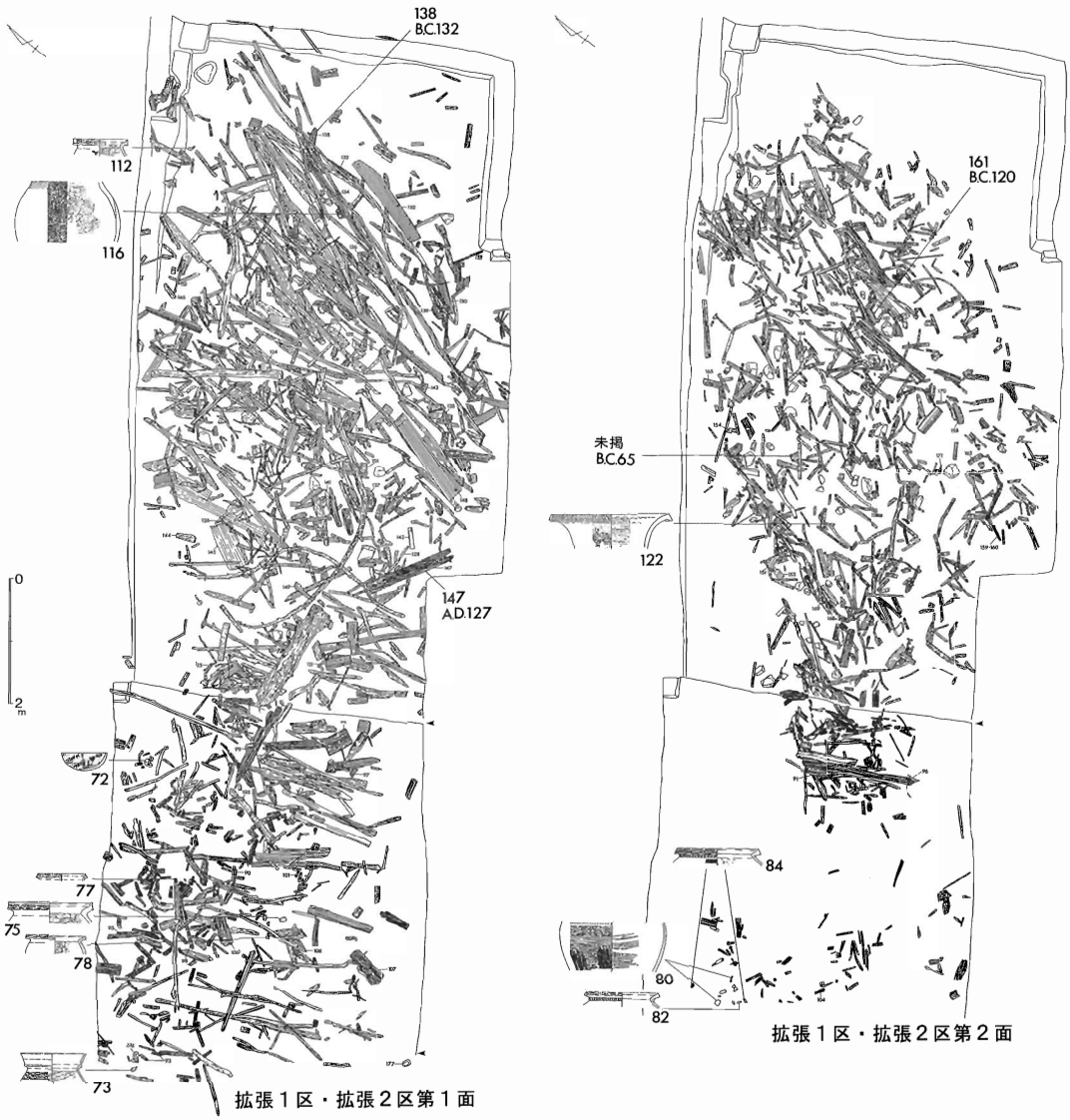


図52　稗田遺跡拡張1区・拡張2区出土遺物と年輪年代材

部といえる位置にあり、これら下層木製品群の包含層である暗褐色土層の下限時期は、出土遺物から弥生時代後期から古墳時代初頭の間にあることが考えられ、扉材147が示す参考値とも矛盾しない。今後、年代が特定できるときを待ちたい。

扉材147の出土からは、稗田遺跡背後に存在が予測される集落に扉をもつ建物が存在したことが明らかになり、当時の集落景観を見直すものとなろう。扉は、出雲地方では古墳時代後期に、松江市北小原横穴、宍道町伊賀見１号墳、同町鏡北廻古墳、同町下の空古墳、斐川町出西小丸古墳で、玄室閉塞石に閂を表現した陽刻があり、扉実物の存在は予想されていたところであるが、かなり遡った例となった。

また、弥生時代中期後葉に相当することが考えられる拡張２区第２面で、鉄製工具の痕跡をとどめるものや、袋状鉄斧柄そのもの（152）の存在は、当地方における鉄器の導入時期についても検討を迫るものといえる。

下層木製品群出土の田下駄は、緒孔が４孔のもののみで、３孔のものは上層木製品群の古墳時代後期の枠付大足のみであった。弥生時代の山陰地方には４孔の田下駄が多いことは指摘があるが、ここでもそれを確認することとなった。

『出雲国風土記』に「恵曇陂」としてあらわれる池は、こうした低湿地への働きかけの結果、徐々にその範囲を狭めていく海岸砂丘内側の潟湖の姿を記したものであろう。

注

１．『佐太南地区遺跡試掘調査報告書』 鹿島町教育委員会 1994年
２．山本　清「佐太講武貝塚」(『講武村誌』 講武村誌刊行会 1955年)
『佐太講武貝塚発掘調査報告書』 鹿島町教育委員会 1993年
『佐太講武貝塚発掘調査報告書』２ 鹿島町教育委員会 1994年
３．『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書４ 北講武氏元遺跡』 鹿島町教育委員会 1989年
４．金関丈夫「島根県八束郡古浦遺跡」(『日本考古学年報』16 1963年)
藤田　等「島根県 古浦遺跡」(『探訪弥生の遺跡 西日本編』 1987年)
５．『佐太前遺跡』 鹿島町教育委員会 1987年
６．『志谷奥遺跡』 鹿島町教育委員会 1976年
７．『菅田考古』第16号 島根大学考古学研究会 1983年
８．以下、弥生土器の様式名は、松本岩雄「出雲・隠岐地域」（正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』 木耳社 1992年による。
９．豊島吉則「山陰の海岸砂丘」（『第四紀研究』 第14巻第４号 1975年)
10．『下水管埋設事業に伴う古浦砂丘遺跡立会調査報告書』 鹿島町教育委員会 1993年
11．此松昌彦「Ⅳ．北講武氏元遺跡の花粉分析」『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書４ 北講武氏元遺跡』 鹿島町教育委員会 1989年

調査前全景
（北から）

A 区全景
（北から）

A 区南壁土層
（北から）

図版２

ＳＢ01（西から）

ＳＢ02（西から）

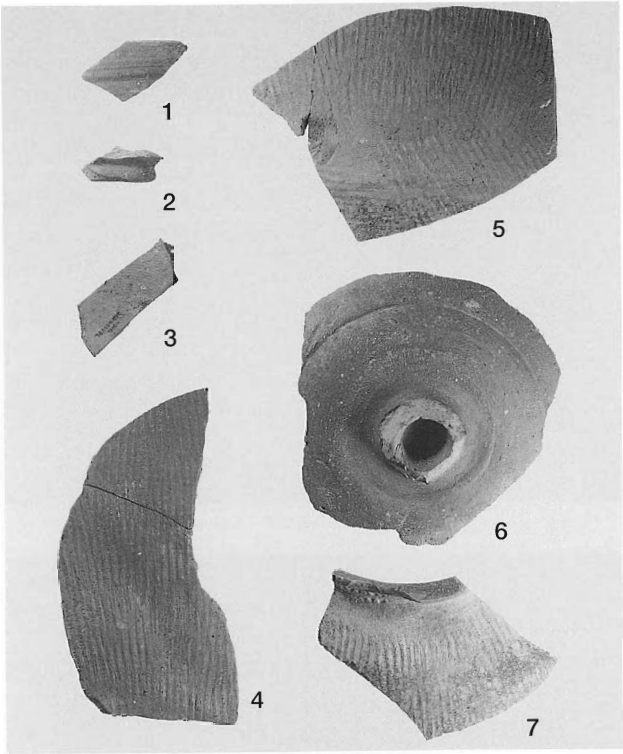
Ａ区土坑群
（北西から）

B区ＳＢ03，ＳＢ04
（東から）

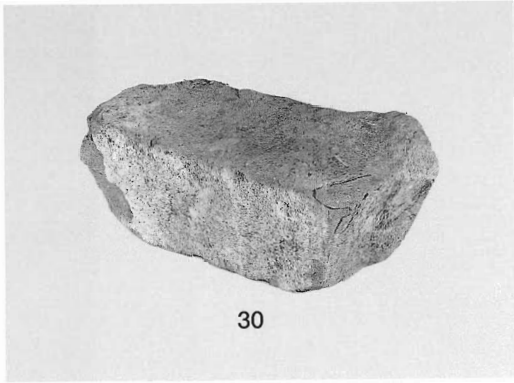
ＳＢ03（北から）

ＳＢ04（北から）

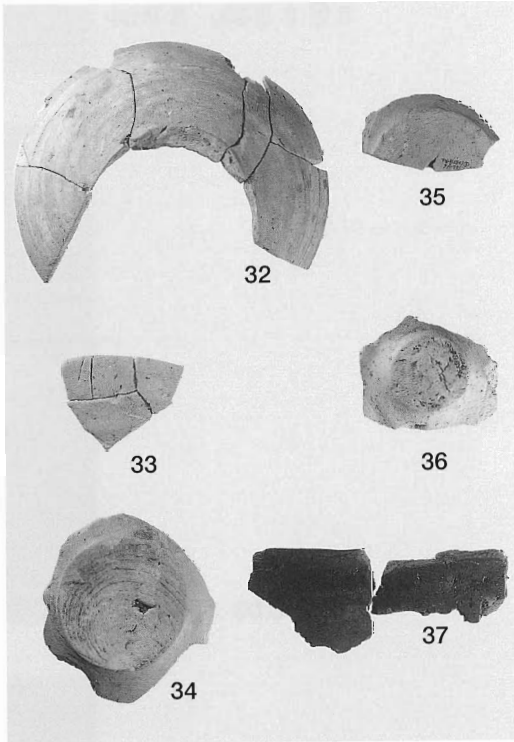
図版 4



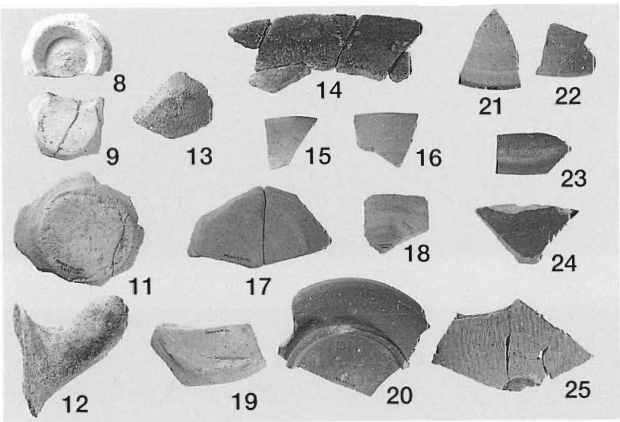
A区ＳＢ01・02出土遺物



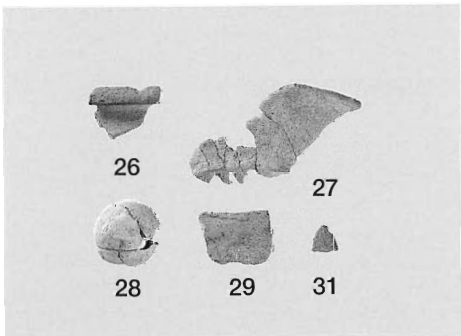
A区下層出土遺物（2）



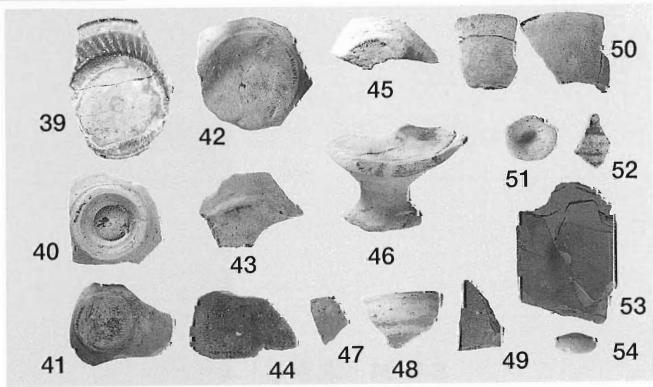
B区ＳＢ03出土遺物



A区出土遺物



A区下層出土遺物（1）



B区出土遺物

調査前全景
（東から）

1 区上層木製品群
（東から）

枠付大足出土状況
（東から）

図版 6

1 区下層木製品群
（北西から）

2 区船材出土状況
（北東から）

5 区スギ倒木出土状況
（南西から）

拡張 1 区下層第 1 面（北東から）

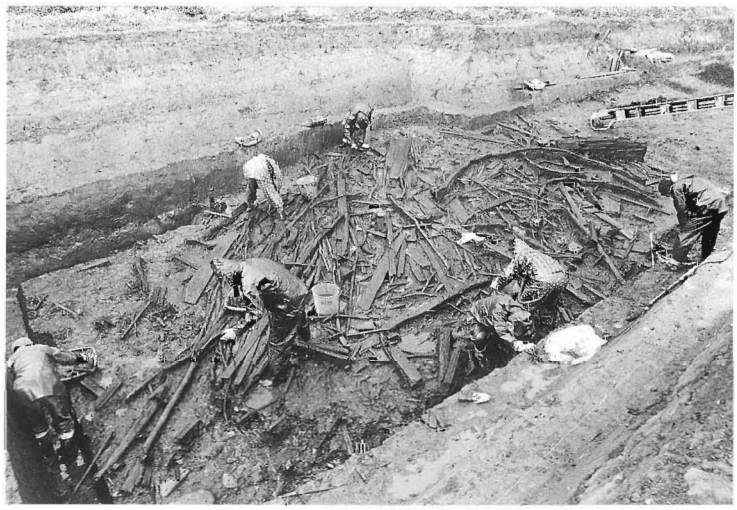
同上木製品出土状況（北西から）

図版 8

拡張 2 区第 1 面木製品出土状況（北西から）

拡張 2 区第 2 面木製品出土状況（北西から）

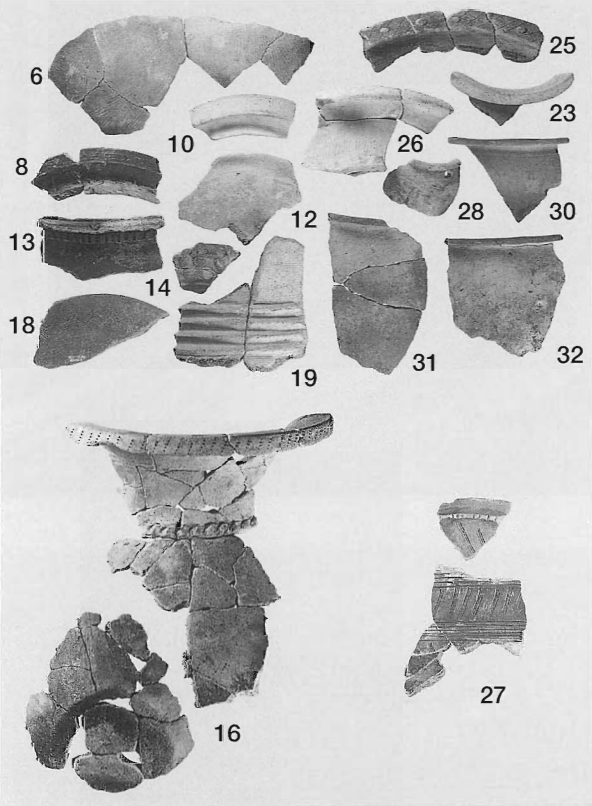
拡張2区第1面
（北東から）



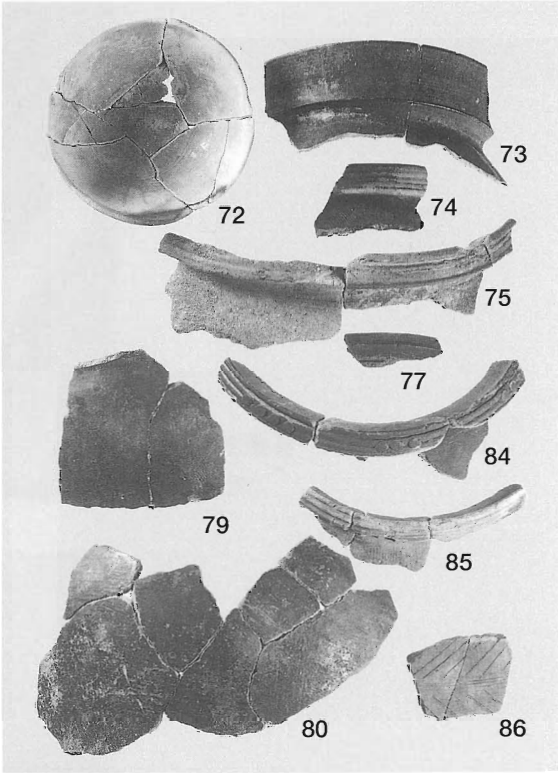
同上調査風景

基盤層以下の断割り
（東から）

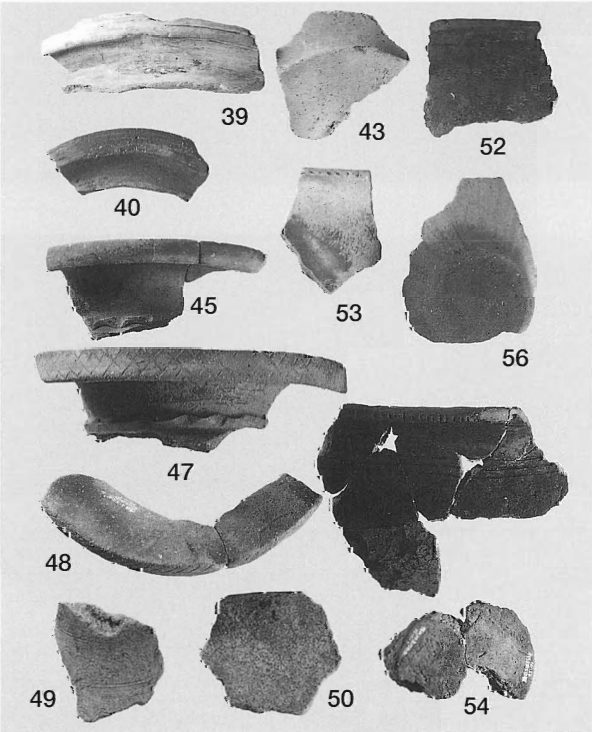
図版10



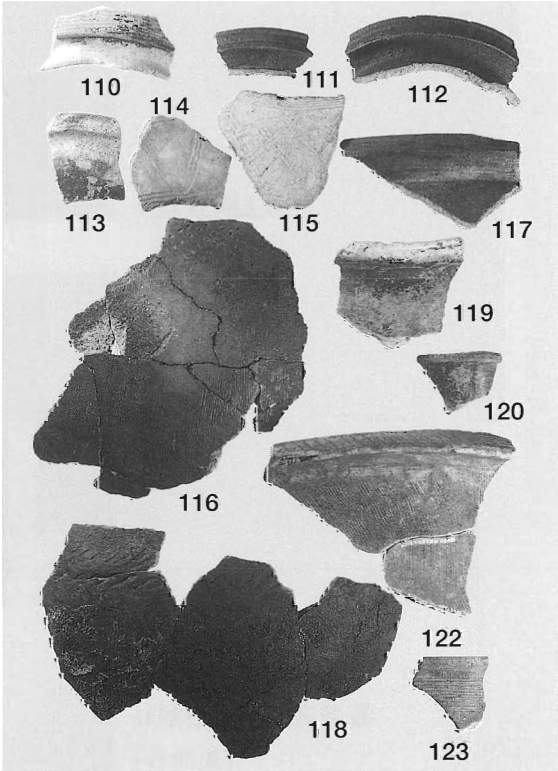
1～2区出土土器



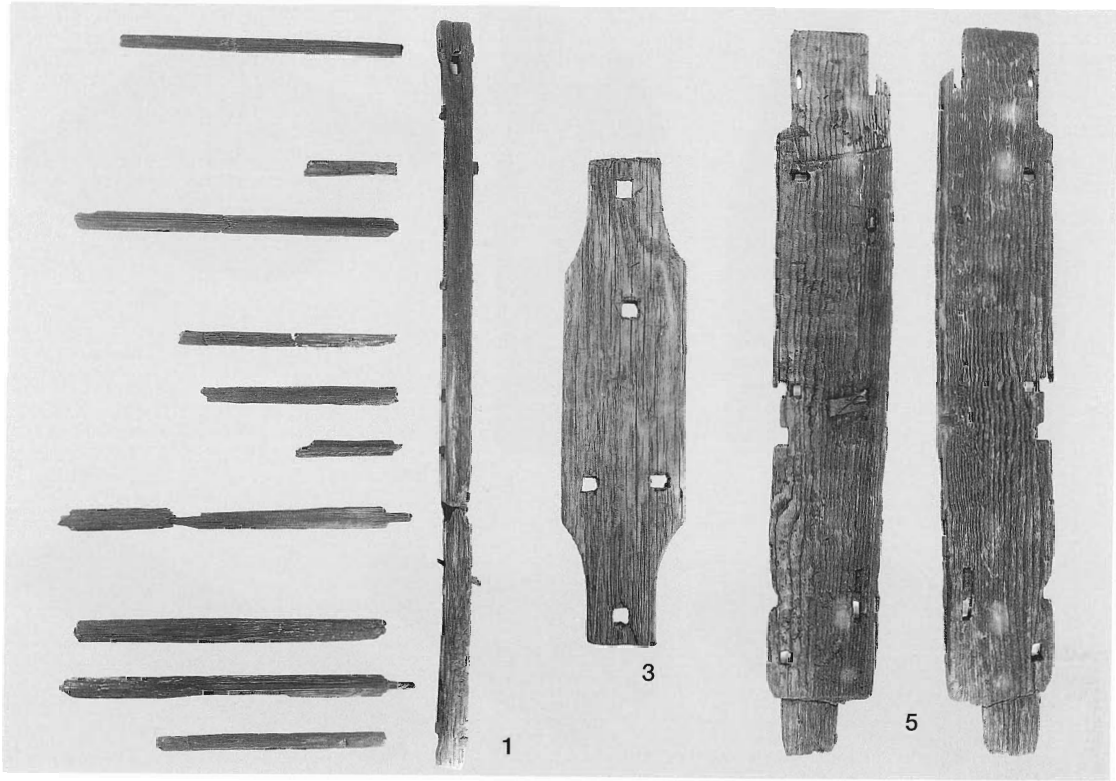
拡張1区出土土器



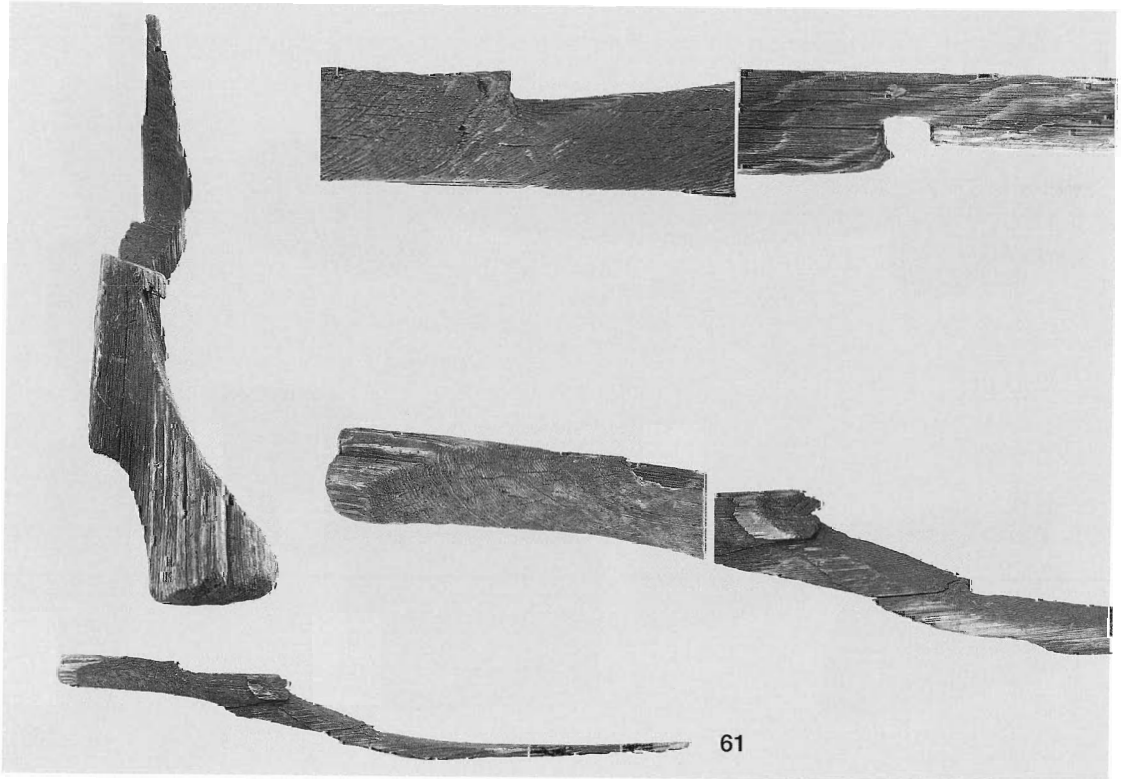
2～5区出土土器



拡張2区出土土器

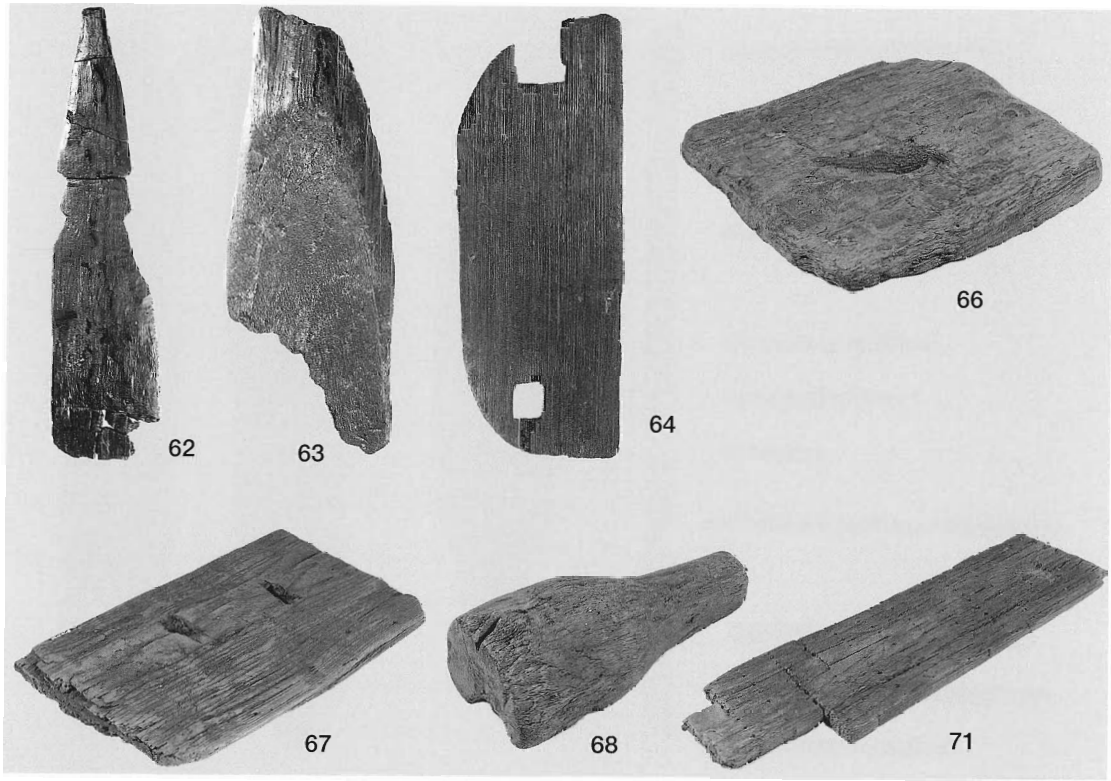


上層木製品群

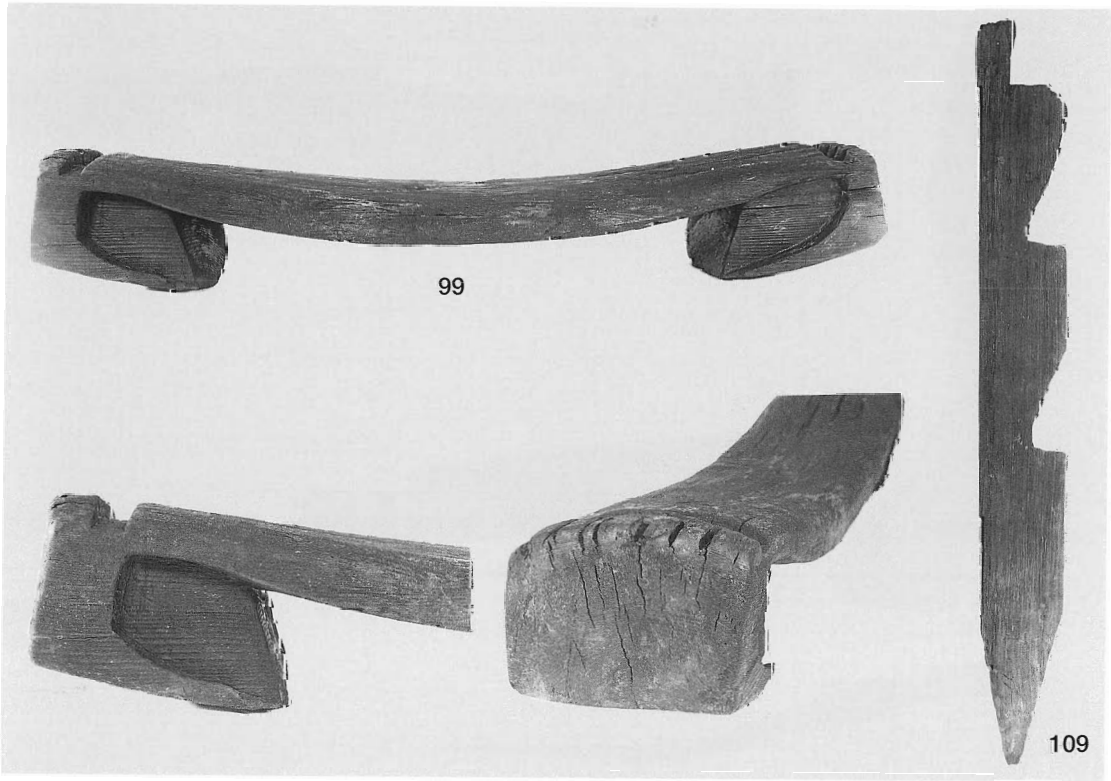


下層木製品群（２区）

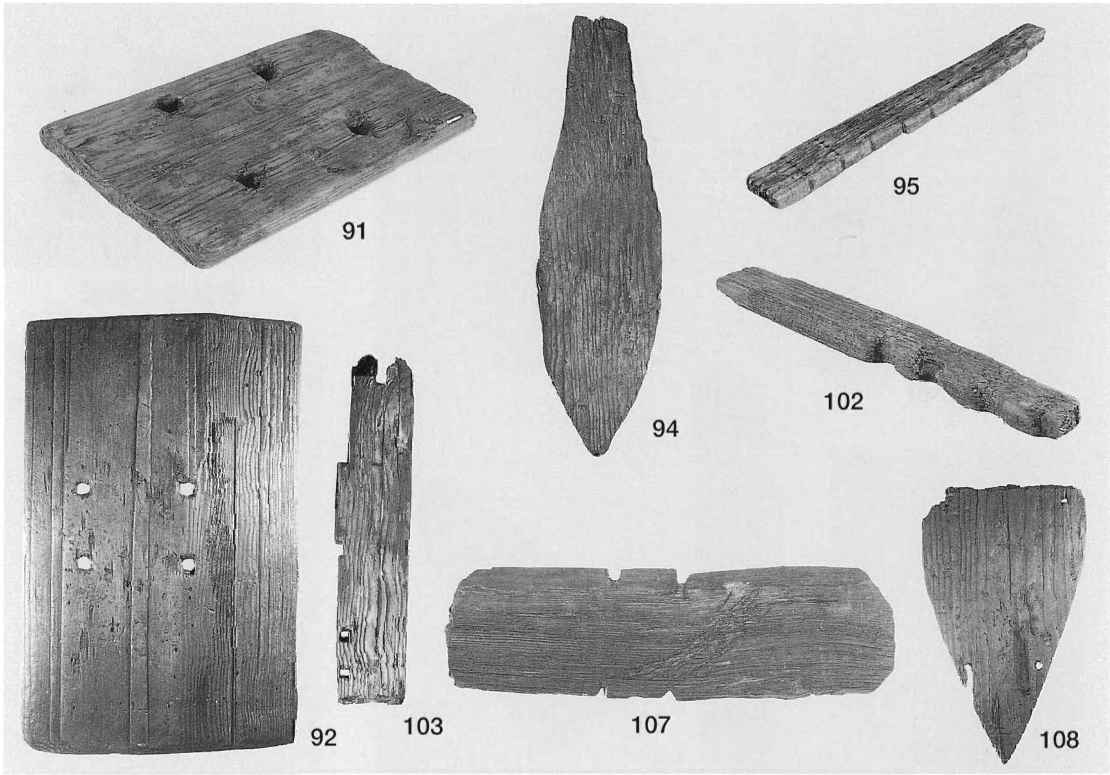
図版12



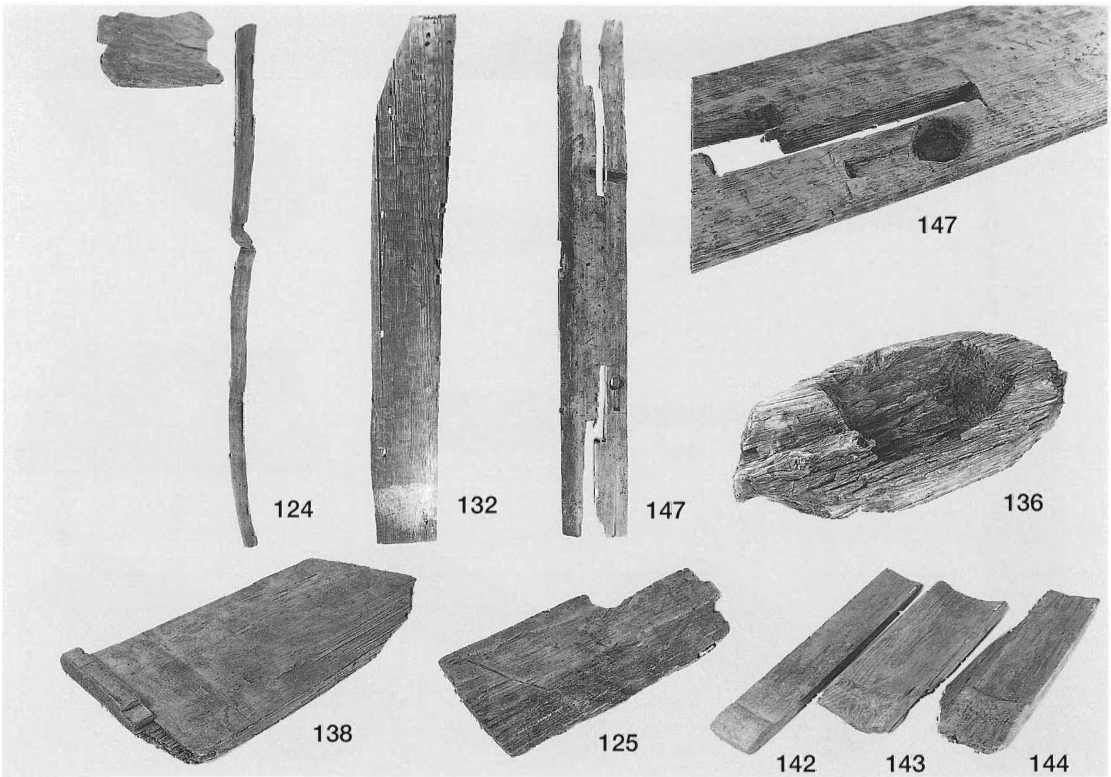
下層木製品群（1～5区）



下層木製品群（拡張1区）

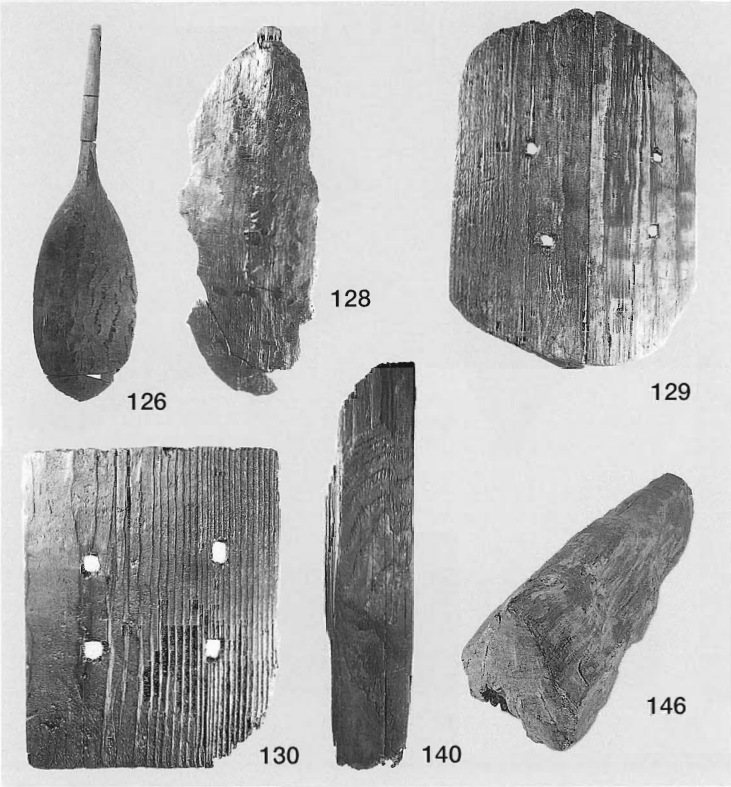


下層木製品群（拡張１区）

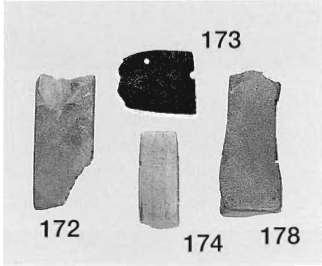


下層木製品群（拡張２区第１面）

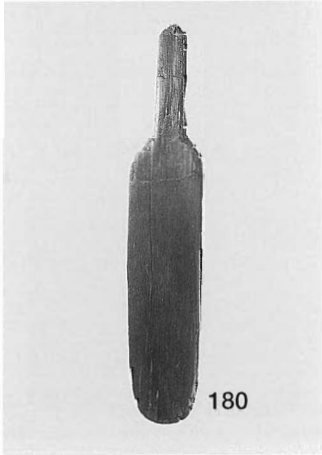
図版14



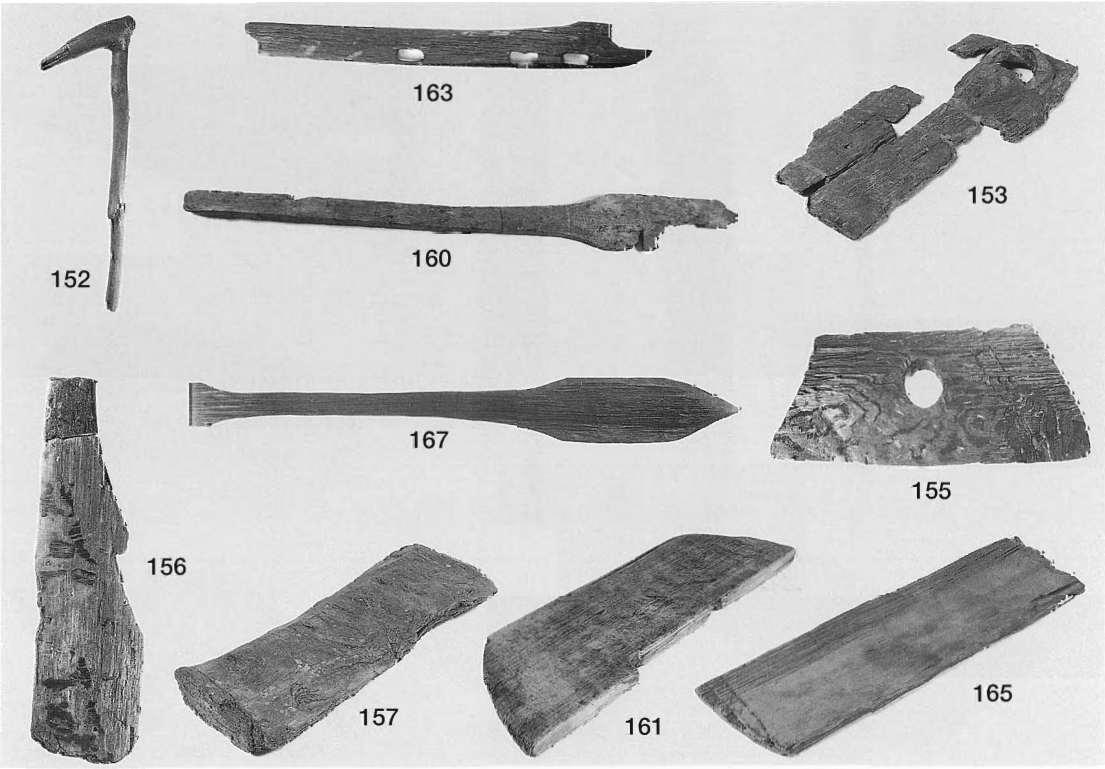
下層木製品群（拡張２区第１面）



各区出土石器



最下層出土遺物



下層木製品群（拡張２区第２面）

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもたにいせき・ひえだいせき　さだみなみちくじゅうかんきょうせいびじぎょうにともなうはっくつちょうさ
書　名	下谷遺跡・稗田遺跡　佐太南地区農村活性化住環境整備事業に伴う発掘調査
編著者名	赤澤秀則・光谷拓実
編集機関	鹿島町教育委員会
所在地	〒690-0396 島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷640-1 0852-82-3211
発行年月日	西暦１９９４年３月３１日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
下谷遺跡	島根県八束郡 鹿島町大字佐陀本郷 2056、2057、2058他	32301		35度 31分 5秒	132度 58分 42秒	19930510 ～ 19930719	390	遊歩道（石段）設置
稗田遺跡	島根県八束郡 鹿島町大字佐陀本郷 1758、1761	32301		35度 31分 11秒	132度 59分 4秒	19930803 ～ 19931126	480	集落道敷設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下谷遺跡	集落あと	古代～中世 弥生～古墳	住居跡５棟 土坑群	土師質土器 土師器、須恵器 弥生土器	谷部に所在する古代から中世にいたる小規模な集落。
稗田遺跡	集落周辺部	古代から弥生	木製品の集積	木製品（船材、建築材など） 弥生土器 土師器 石器	低湿地に投棄された弥生時代を中心とする大量の木製品群。 年輪年代材

下谷遺跡・稗田遺跡

佐太南地区農村活性化住環境整備事業に伴う発掘調査

1994年3月発行

発行　鹿島町教育委員会

島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷640-1

印刷　有限会社谷口印刷